

# 怪異譚 鈴語り

紅野生成

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

あらゆる者が行き交う辻の上に、古き時代から在り続ける旅籠屋。

竹の垣根に囲まれた辻堂と呼ばれる旅籠屋には、人に迷い己に迷った者達が訪れては去っていく。

チリンと鳴るしか能のない、鈴の一人語り。

それは誰にも知られずに闇に埋もれる者達への、弔いの語り。  
物言わぬ鈴の、空しい独り言にすぎない。

こちらは小説家になろう様にも投稿しています。

# 目次

1	男の内に飼われるモノ	1
2	香りに惑い、溺れかけた女	20
3	ちつさな命と 忘れられぬ温もりと	37
4	壁に横られる者	45
5	子鬼が生を望む夕暮れ	57
6	魂とさえ呼べぬ者	74
7	鈴の盗み聞き	89
8	子を想うも 待ち人を想うも女なり	98
9	その身を 想いを守る者	110
10	黒いけむくじやらの家出	121

1	琵琶の音が呼び寄せる者	131
1	忘却の術から漏れ出る記憶	142
1	怨念を固めし者	154
1	恩義を果たす鷹	171
1	付喪渡しの夜行船	184
1	庭の水面に珠に舞い	196
1	奪われてこそ咲く命	212
1	古傷を背負う者の行末は	224
(完)	遠い日の誓いを守る者	241



## 1 男の内に飼われるモノ

わたしは鈴である。そして名も鈴という。いつからこうしているのかはわからない。気付けば、己は鈴であった。

ぼんやり揺れているには、長すぎる時間が過ぎたように思う。正直、この世に存在することにさえ飽きがあった。

それでもやすやすと土塊に戻れるわけもなく、こくり、かくりと揺れるしかない。

ふと長すぎる時の一部を、意識的に切り取ってみようかと思いついた。

わたしの声は主にさえ聞こえやしないから、寂しい一人語りにはすぎない。

それでも、暇つぶしにはなるかと思う。

「少し日が長くなったねえ、鈴よ」

庭の岩に腰掛けた、主の袖がぺらりと風にはためく。単の着物一枚では、この夕暮れにさすがに小寒いであろうと息を吐く。

チリン

ひと揺れして答えたわたしに、主は切れ長の目を向けて薄く微笑んだ。主にわたしの

声は聞こえない。それでも、わたしがここに居ることは知っておられる。

「おや、誰か来たようだ」

主はすいと立ち上がり、裏の木戸から表へでた。

この古家の界限に客人などありえない。生きてここへ入れるのは大屋様のみ。わたしはひとり、ない首を傾げた。

その大屋様はひと月前に……。

「新しい大屋様はわたし達に、まだここに居ても良いといってくださいるか」

そういうことか。

チリリン

「おや、鈴は心配かい？」

紅を薄くひいた口元に、白い指先を当てて主が笑う。

道の先にまだ人影はない。乾いた土を擦る、主の草履だけがしやりしやりと音を鳴らす。

道に落ちる茜の色が濃くなった頃、右へと折れる道の先からふらりと人影が現れた。

一枚の紙つぺらと周りの様子を見比べながら歩く姿は自信なさげで、明らかに道に迷っている風だった。

「あれかねえ」

主は誰にいうでもなく、ぼつりと言葉を落とす。

主の姿に気付いて駆け寄り寄ってきたのは、見知らぬ人影の方だった。

「すみません、道に迷ったのですが」

若い男の体の線は細く、他人を見つけて心底ほつとしていようだった。

「このような夕暮れにどちらへ？」

「この先にあるはずの、辻堂と呼ばれていた旅籠跡を探しているのですが、似たような景色の中、方向がわからなくなってしまうました」

風になびいた僅かな髪が、微笑んだ主のほの赤い口元を目隠しする。

「迷つてなどおられませんよ。ここはすでに辻堂にございます」

主の言葉に若い男はきよろきよろろり辺りを見回し、そしてはつとしたように口を半開きにした。

「人に出会えたことが嬉しくて、周りを見ていなかっただようです。こんなに大きな屋敷が建っていたなんて、でも、さつきまでは敷だったのに」

「お探しの辻堂は、お借りしている我が家でございます。まいりませうか」

己の目に納得がいかないのか、いまだ首を傾げる若者を誘つて主が歩き出す。少し遅れて若い男もついてきた。

リーン

「不満そうだねえ」

低く鳴ったわたしに向けて、主がそつと囁く。

「そうおいしいでないよ。ここまで一人で入ってきただけでも、上出来じゃないか」  
うつすらと笑いを含んだ主の声に、呆れてわたしは黙り込んだ。この先の全てがこの若造の度量にかかっているというのに、密かに楽しんでいる場合ではないだろう。

主の悪い癖だとわたしは思う。

明日を思い煩うことなく、許される範囲内で存在しようとする潔さは、言い換えれば諦めなのではないだろうか。

主には何一つ諦めてなど欲しくない。わたしは鳴りそうになるこの身を、必死に押し留めた。

道すがら双方口をきくことはなかった。

背後を警戒することなく歩みを進める主。

何を疑うことなく、その後ろをついていく若い男。

その間で思い煩うは、能無しの愚かな鈴。

屋敷の周りをぐるりと囲む竹の塀をみて、男はほう、と声を漏らす。

「とても江戸の時代に建てられたとは思えない。もっと傷んでいるかと思っていたの

に、きちんと手入れされているのですね」

木戸に撫でられて、少しばかり伸びすぎた地草がさりさりと音を立てる。

「住む者がいて家は生きるものにごさいます。わたしどもでも、少しは役に立っているのでしょうか」

「あなたの他にも、どなたか住んでいるのですか？」

主は立ち止まり、すいと半身を返して男を流し見る。

「それは後に、ご紹介することとなりましょう」

男を座敷へ通し、主は奥へと進んで酒を盆にのせる。

「陽炎ようえんがいてくれたら、何か旨いものでもこしらえてくれるのにねえ」

主は残念そうに肩を竦め、火の上の網で魚を炙る。

焼けた魚と酒を手に座敷に戻ると、男は縁側に腰掛けて庭を眺めていた。

「何もありませんが、どうぞ」

勧められた酒に小さく頭をさげ、意を決したように居住まいを正した。

「女性がお住まいの所に、こんなことをいうのが失礼なのは百も承知ですが、今夜だけ、ここに泊めていただくわけにはいかないでしょうか？ この夜道を帰る自信がないのです」

叱られた童子のように背を丸める男に、主は静かに声をかける。

「そのような遠慮など。居てくださって構いませんよ」

申し訳ない、と男は更に頭を下げる。

「ただ、ここに居ていただくには、守っていただきたい約束がございます」

「どのような？」

「この屋敷のどこへいかれても構いません。ですがこの屋敷に住まう者には、触れないでいただきたいのです。たとえ着物の袖、髪の手先であってもでございます」

若い男は慌てて首を振る。

「そのような失礼はけつして！」

慌てて弁解しようとする様子を、主はそつと手の平で制す。

「約束していただけますか？」

男は黙って深く頷いた。

それを見て、主は春の蕾のように口元を綻ばせる。

「では一杯どうぞ」

わたしは主の腰帯にぶら下がったまま、そつと身を潜めて話の先を見守った。

「いずれ、あなた様のような方がいらつしやると思っております。先代の大屋様が、この辻堂を譲る者は決めていると申されておりましたから」

男は、不思議そうに首を傾げる。

「確かにぼくの物になりそうですが、父は遺言も残していません。譲るなど……ひと……言もいつては……」

男の手から盃が落ちる。芯が抜けたように体が弛緩して、ごろりと畳に転がった。

「ごうも申しておりました。策を巡らさずとも、たとえ望まなくとも、この辻堂はあなた様の手に落ちると」

「寝息を立てる背中に羽織を一枚掛けてやり、主は庭へと繋がるふすまを開ける。

リン

「お酒に薬を少々、心配はいらないよ。明日の朝には、酔いつぶれただけと思って目を覚まされるだろう」

こんな頼りない若造など、このまま山の土に返してしまえば良いものをと、わたしは手足の無い己に悪態を吐く。

「今宵くらいは静かにお休みいただきたい。鈴もそう思うだろうか？」

チン

主の言葉といえども、不満なものは承諾しかねる。

わたしが静かな夜を願うのは、この若造の為ではない。

主にも心休まる、そんな夜があつて欲しいと願うからだ。

ミヤア

庭で猫が鳴いた。庭の闇を月だけが照らしている。

「シマかい？　これはどうやら、手酌で一杯の酒を呑む暇もなさそうだねえ」  
若造を匿うように、主は後ろ手に障子を閉じた。

ミヤー　ミヤー

庭の小池に満月の映る、明るい夜である。

小池の横で四つ足を踏ん張って鳴く、シマと呼ばれた猫の横に一人の男が立っていた。

「お客さんだねえ」

主はゆっくりと庭に下り、男との間に少しだけ間を置いて立つ。

「ここへは自分の足でできたのかい？　おまえ様は自分が何処の誰なのか、わかっておいでなのかねえ」

男はゆっくりと首を横に振った。

冷えた夜風が、かさかさとした木々の葉を揺らす。

「気付けばここにおりました。この噂を耳にしてはいたものの、どう足掻いても辿り着けなかつたのでございます。ところが突然に辿る道筋が見えたのでございます。火玉のようなものが、ふらりふらりと揺らぐあとを追ってまいりました。見えるはずのな

「この目に、確かに見えたのでございます」

主は訝しげに目を細めた。

「おまえ様をここへ誘ったのが何者なのか、それが気にかかる」

「わたしはここに居てはなりませんか？」

男の声から体から、失望の色が立ち昇る。

「構いけませんよ。ここは辻堂と呼ばれる旅籠。あらゆる者達が立ち寄り、風のように去っていく場所。おまえ様が望むなら、この先の道を抜ける手助けをしようじゃないか」

男は腿にぴんと伸ばした手を当て、深々と頭を垂れた。

「ところで頭に巻いたその布は？ 目を患っていたのかい？」

男は大きく頭を振る。

乱暴に巻かれた布の端が、染みついた煤を撒き散らすようにひらりと揺れた。

「わたしは根無し草でございます。この布をどうして巻いたのか、それさえも覚えてはおりません。何の必要もないかもしれない、ただの布きれにございます」

この様子では男は自分がどのような状態か、まったく解っていないのだろう。 焼け焦げた島物小袖には切られたような裂け目がそこここにい口を開け、そこから覗く肌は、赤い傷口を痛々しく残していた。

目にも傷を負っているなら、血染みのひとつもありそうなものだが、煤けた布にはそのような跡は見られない。

小池に映し出された月の影を裂くように、魚がパシャリと水音を立てて跳ね上がる。

尾に跳ね上げられた池の水が、傍らに立つ男の目元にかかった。

あつ、と男は小さく声を上げた。

そして目の周り覆う布を、引き裂かんばかりに掻きむしる。

「痒い、痒い！」

その様子を見て主は、さつとシマに目を配る。

足音もなく、シマが男の側から身を引いていく。

「痒い、痛いほどに痒いのです！」

狂ったように掻きむしる男の前へ、主はすつと一歩寄った。

「その布、取ってはなりません」

主の張った声が、夜の庭に響く。

「痒い、たまらない！ 痛い！ 痒い！」

男の耳に、もはや主の声など届いてはいない。

主がもう一歩歩み寄ろうとしたその刹那、男の右の中指が浮いた布の下にもぐり込み、易々と巻かれた布が頭から外れた。

布がゆるゆると解け、動きを止めた男の首にぶら下がる。

「ああ、なんと愚かな」

男の眼が夜風に晒されたとき、目の前に居たのは主であった。

役者のように整った男の顔が苦しげに歪み、やがてそれは自嘲へと変わった。

「やつとの思いでここまで辿り着いたものを」

主は月明かりに照らされた美しい顔の眉根を寄せ、睫を伏せたまま一歩、また一歩と後退る。

「全てを、思い出したのだねえ」

もう伸ばしても手が届かぬほどに、主と男の間は開いていた。

「月とは、こんなにも美しいものでしたか……」

夜空を見上げて、男は微笑む。

「もう、わたしにして差し上げられることは、ないのでしようねえ」

主の言葉に、男は深く頷いた。

「この旅籠へきた以上、後ろめたい過去を隠すつもりはありません。わたしは女に騙されましてね、そりゃ美しい女だった」

男の語りが、夜霧のようにしんしんと庭の闇に染みていく。

わたしは表店の跡継ぎで、店の者からは若旦那と呼ばれておりました。

薬師問屋を営んでおりましたが身代はそれなりで、父の溜め込んだ金が蔵に眠っている、そんな家に生まれたのでございます。

暇をみては足を運んでいた小料理屋に、ある日新しい女が入ってきましてね。どの客にも愛想のいい、そりやあ器量の良い女でございました。

一目で惚れてしまいましたね、女の方もわたしに気があるのがわかっていたから、ある日時を見計らって声をかけました。

わたしに気があるのは確かなのに、飯を食いに行こうという誘いにさえ女はなかなか首を縦に振ってはくれませんでしたね。

今思えばあの時すでに、わたしは女の術中に嵌っていたのでございましょう。

初めて女が誘いに乗ってくれたときには、それこそ天にも昇る思いでして、蜆汁の具を多くして奉公人に振る舞い、酒までつけたものです。

ああ、蜆汁は丁稚も喜ぶ蜆汁といわれたくらいでして、最後の残り物しかあたらないう丁稚達にも鍋底に沈む具があたるからと、たいそう喜ばれたのですよ。

おっと、話がそれてしまいましたな。

いくら惚れたといっても、女を娶るなどわたしの立場では無理なこと。

親が決めた相応の家柄である娘と、祝言を挙げる日がくるのはわかっておりました。

だからせめて、女に少しはまともな暮らしをさせてやりたかった。

わたしは女に、うちの店に来るように勧めたのでございます。

聞けば病気の母親を抱えているというじやありませんか。

他の者の手前、給金を上げてやるわけにはまいりませんから、わたしの懐から小遣いをやるつもりでございました。

早くに母を亡くしてしまいましたから、父やわたしの身の回りの世話をさせようと考えたのでございます。

誘いをかけて十日ばかり、女がよろしくお願いしますといつてきました。

嬉しかったです。

女はそれは甲斐甲斐しく働きました。

最初は渋い顔をしていた父も、ひと月ふた月と経つうちに働きを認めて、いい娘を見つけたものだと言ってくれたものです。

桜の季節が終わわり蟬時雨も去り、木の葉が散り始めた頃でございました。

最初に異変に気付いたのは、大部屋で寝ていた奉公人。

その千切れんばかりの悲鳴に、わたしは跳ね起きました。

焦げ臭さを感じて庭へでようとしたわたしは、己の目を疑いましたよ。

お店から火の手が上がり、飛んだ火の粉がわたしの居る離れにも火を付けておりました。

た。

煙に巻かれながらも何とか父を助けようとしたが、火の回りは早く父の寢所に近寄ることさえ叶いません。

燃えさかる炎の向こう側に逃げ惑う奉公人達の姿が見えましたが、どうにもしてやることはできなかつた。

どこにいるのか。

すぐに女の顔が浮かびましたが、逃げ惑う者の中に見慣れたその姿はございませんでした。

何とか外に逃れようと火の手の薄い方へ逃げたわたしは、蔵の錠前が外れ、重い戸が開いているのを見つけたのでございます。

賊に火を放たれたのだと気付いて、わたしは身を震わせました。

抜けた腰を引き摺りながら這って、やっと裏の木戸まで辿り着いたわたしは、そこで見つけてしまったのです。

臆病者で腰を抜かして這ってなどいなければ、見過ごしていたはずの物を。

それは干支を模った根付けでございました。

ありふれた根付けにございます。

そして、わたしがあの女に送った根付けでございました。

そのときわたしは悟ったのでございます。

あの女は、引き込み女であつたのだと。

呆けたまま立ち上がり、ふらりふらりと表にでました。

打ち鳴らされる半鐘が聞こえた気もいたしましたが、燃え崩れるお店も、見捨てたも同然の父や奉公人のことも、何もかもが遠い出来事のように思えたのでございます。

わたしの心に鬼が巣くつたのは、このときやもしれませぬ。

それから七日の間、物乞い同然に身を落としてわたしは女を捜しました。

当てもなく遠く本所深川まで足を伸ばしていたわたしは、一軒の煮売り屋の店先に何気なく目をやって、ぶるりと身を震わせました。

わたしから全てを奪つた神仏が哀れに思ったのか、慈悲をかけたのか。

煮売り屋の店先で総菜を眺めていたのは、見間違はずもなくあの女でございました。

総菜を買つて店を後にした女を、わたしはこっそりつけました。

戻つた先にひとりで居るのなら、問い詰めてから迷わずに殺すつもりでございました。

女は町の外れにある、小さな荒れ寺に入つていきました。

逃すまいと気が急いで、そのまま女の後を追つて寺の中に飛びいった。

間が悪いとは、ああいう事をいうのでしよう。

あの日取った金を分けるために、賊が雁首をそろえておりました。

わたしはそのど真ん中に、ひとり丸腰で飛び込んだのでございます。

わたしを見て女は寸の間驚いた表情を浮かべましたが、その後に見せたのは、にたりと下卑た笑みでございます。

女が指ひとつ動かしたただけで、ごろつきどもが一斉に得物を手に襲いかかってきたのですから、素人のわたしなどひとたまりもありやしません。

引き込み女は、盗賊頭の色だったようで。

四方八方から切り込まれるわたしを見て、女は笑ったのでございます。

押し寄せる賊の腕の隙間から、妖艶なその微笑を見ていたわたしは、女が憎くて、恨めしくて、なのに……。

美しいと、思ってしまったのでございます。

浅間しい己の男心に、心底嫌気がさします。

流れる血に視界が霞んでいく中、わたしは一心不乱で鬼神に祈禱いたしました。今ここであの女を殺れるなら、この魂が朽ちるまで美しい女を目にはしないと。願を掛けたのでございます。

ドスッ

胸をさされた息苦しさで引き替えに、心の臓が収まる辺りから熱が湧き上がり、それは喉元を焼ながら、わたしの腕に力を与えました。

わたしは己の右胸に突き立てられた刃物を抜くと、無茶振りして周りの者を薙ぎ払い、ひとり立っている女に向けて、手にした刃物を投げたのでございます。

刺さったんですよ。

女の首のど真ん中に。

ごろつきどもは慌てて女の元へ駆け寄りました。

死にかけてたわたしのことなど、どうでも良かったのでしようよ。

わたしはその隙に、床に落ちていた細長い布で己の目を塞いだのでございます。

息も絶え絶えで、逃げることも叶いません。

ですから死んだ後のことを思って、目を塞いだのでございます。

わたしは今でも、鬼神が願いを聞き入れたのだと信じております。だからこそ、誓いは守らねばなりません。

死んだら四十九日はこの世を彷徨うというじやありませんか。

その間に町を歩く美しい娘を、目にしてはならないと思つたのでございます。

今になって思えばせめて生きている間、という誓いにするべきでしたかねえ。

あの世にも行けず、生まれ変わることも叶わないまま長い時が流れ、わたしは己が何

者であるのかさえも忘れておりました。

あの女のこと、死に際のこと。

この身に巣くっていたのは、理由さえ忘れた憎しみという怨念のみだったのでごごい  
ましようか。

まったく、くだらない身の上にございます。

男の語りが終わると、小池で魚が小さく跳ねた。

「そのような目にあつても、おまえ様はまだ、その娘に惚れていらつしやる」  
主がいう。

「愚かな男と、お笑い下さい」

「おまえ様は、鬼神との約定を破ってしまわれたと？」

「ええ、布を解き、あなたを見てしまった」

月が、流れる雲に身を隠す。

男の背後で、暗い小池の水面がふつふつと泡立つ。

泡立つ水面から細く黒いモノが湧き出て、男の足から胸へと這い上がった。

「後悔しちやいないのかい？」

ゆつくりと後退りながら主が問う。

黒い糸状の影は、男の頭まで覆い尽くそうとしていた。

「後悔しておりません」

いまや黒い影と化した頭部の中、男の眼だけが僅かに白く覗いている。

男の足が引き倒され、足元から影と共に小池の中へと引きずり込まれていく。

ズルズルと、嫌な音が庭に響く。

「男とはまつこと、厄介なモノを己の中に飼っているのだねえ」

男の体が小池の闇へと引きずり込まれ、水面から覗くのは黒い影に染まった頭部のみ。

「最後に目にしたのが……あなたで良かった」

影に絡まれた隙間から、白い目が嗤う。

ぼちやりと音を立てて、男の姿は完全に吞まれて消えた。

雲を逃れた月明かりが、波紋を広げる水面でゆらりゆらりと揺れていた。

## 2 香りに惑い、溺れかけた女

わたしは鈴。チリンと鳴るただの鈴である。

そして、名を鈴という。

眠らずに朝を迎えた主の腰帯で、チリとも鳴かぬまま一夜を明かした。

男がその身を沈めた黒い小池も、今は朝日を受けてちらちらと水面を光らせ、その移り変わる様子を見ていたであろう主の心情は、鈴ごときのわたしに解るはずもない。

ひとつだけいえることは、今朝のわたしは不機嫌だ。

ちっ、わたしの心を乱す元凶が目を覚ましたらしい。

何があつたかも知らず、主の心遣いも知らずに呆けて寝ていた若造め。

こいつが次期家主様だと？ わたしは認めない。鈴の威信にかけて認めない。

「おや、お目覚めになられましたね」

壁に背を凭れ庭を眺めていた主が、ふすまを開けてのっそりと顔を出した若造を見やる。

「すみません、お酒を飲んだらすぐに寝ちゃったみたいで。少量で酔うことなど滅多にないのですが、疲れていたのかな」

主に薬を盛られたなど夢にも思っていないから、盛んに首を傾げている。

「ゆるりと休まれたのなら、それが何よりでございます。そういうえば、名前をお聞きしていませんでしたね。わたしはカナと申します」

「小野田悟です。カナさんとお呼びしても？」

「こりと主は頷いた。

「悟様のお好きなように呼んで下さいまし」

「あ、いや、悟様はちよつと」

「残念ながら悟様という呼び方だけは譲れません。歴代の大屋様も、同じように呼ばせていただきましたから」

「はあ」

「こいつに様づけなど、主は甘い。寝癖で渦巻いた頭の若造に様づけするくらいなら、ドブネズミをドブ様と呼んだ方がまだましだ。

「カナさんは早起きですね。まだ日が昇ってそれほど経っていないでしょう？」

「わたしが眠るのは、もう少ししてからのごさいます。日が昇ったら眠り、日が沈む前に目覚める。そんな毎日を送っております」

「昼間は寝ているということですか？ ああ、夜に働いているとか？」

若造の頭に浮かんだことなど、開かれた文を見るより明らかだ。

夜に起きていて、美しい女性ができる商売など決まっている。まったくもって、浅ましい思考しか持ち合わせていないらしい。

「いいえ。この様に廊下に座つて庭を眺めたり、閉めたふすまの奥で揺れる蠟燭の灯りを、楽しんでいただくの方がおございます。けれども、時折とはいえ、この屋敷がわたしを必要とするのも、また夜なのでございますよ」

「屋敷が必要とする？」

「はい。ここを訪れる客人は、宵闇と共にここを訪れるのが常。わたしが眠っていたのでは、お相手をする者がいなくなつてしまいますから」

「なるほど。今宵は客人が訪れる予定はあるのですか？」

「どうでしょう。でもその客人と会わなくては、悟様はこの大家様になられるかどうかを決めることはできません。しばらく、ここに居られては？」

突然の申しでに戸惑つたのか、空中で溺れた金魚のようにぱくぱくと口を動かしている。

「もちろん大屋様になられるかは、悟様次第。お忙しいのであれば、今日のところは帰られて、後日また来られてもよろしいですよ。悟様が大屋様になることはつきりと辞退されない限り、この場所はここに在り続けるでしょうから」

そうだ、辞退しないかぎりには辻堂はここに在り続ける。

そして、大屋様としてここを認める者が居ない限り、この庭は目に見えぬほどに僅かではあるが、その範囲を狭めていく。

大屋様が不在で在る時期が長ければ長いほど、主が自由に歩ける少なき場所が失われていく。

「ここにしばらく置いて下さい。父が何を思い、何をしようとしていたのか、この目で確かめたいと思います。そして今回の滞在中に結論をだします。それでよろしいでしょうか？」

穏やかに主が頷く。

「ここをどうなさるか、悟様次第。わたしは、ただの店子にございますから」

「店子とはずいぶん古めかしい言い方ですね。カナさんと話していると、まるで江戸の町並みが見えるような気さえします」

少年の色を残したままの笑顔で、若造は笑った。

「ところで父は、こんな古い屋敷を貸して、家賃を取っていたのですか？」

「いいえ、先代は一度も金子をお取りにはなりませんでした」

驚いたのか感心したのかわからない表情で、若造が目を見開く。

「あの強突張りが珍しいことを。どうしてでしょう」

主が口を付けると、湯呑みの中で茶の深い緑が揺れる。

「その答えを、悟様はここでお知りになります」

「失礼ですが、父とはその……」

ふふふ、と主は忍び笑う。

「先代の色であったかのか、とお尋ねですか？ 答えは否。それは無理というものでございませぬ」

「そうですよね。あんな爺さんじゃ。でもそれならどうして？」

「器が大きいとは、先代のような御仁のことをいうのでしよう。同じ時代に生まれていたら、きつと惚れていました」

「はははつ、まあ、歳のいった爺さんじゃね」

チリン チリリン

わたしの音に気付いて、主が庭へと目を向ける。

「おや、シマじゃないか。魚の匂いに惹かれてきたのかい？」

男のいる場所を避けるようにぐるりと回り、シマは主の膝の上に収まった。

「飼っているのですか？」

「いいえ、人に飼われるような猫ではありませんから。この子が勝手に、ここに居着いているのでございませぬよ」

魚の尾をもらって大人しく主の膝の上で蹲るシマは、それでも視線を若造から離そう

とはしない。

青みがかった灰色の毛を纏うシマは、いつ見ても愛想の無い猫だ。

リンとミヤーでは会話にもならないが、不思議と胸の内は手に取るようにわかる。

生意気なこの猫は、今まさに若造の値踏みをしている。

「昨夜のお約束、この子も例外ではありません」

「猫にも触れてはいけませんか？」

「この子はわたし以外の者に触れられることを、極端に嫌います。わたしの他にもこの子を抱ける者が、二人ほどはおりますが。この子が自ら寄つてこない限り、触れないでやってくださいませ」

「なるほど」

合点がいったように、若造は頷いた。

シマが主の膝から庭へと飛び降り、草陰のむこうへ姿を消した。

「シマがいつてしまったねえ。さてわたしも休むとしようか」

主は若造に丁寧に頭を下げ、寢屋へと歩みを進める。

今宵には何かが動くだろうか。

もろく崩れるのは若造の神経か、それを目にするであろう主の心か。

わたしは鈴。

眠りにつかれる主の傍ら、日が落ちるまで見守ろう。

何にせよ、闇が満ちるまでは何も起こりはしないのだから。

夕の膳が並べられた頃、木陰の闇からシマが姿を現した。

「今夜の膳にお魚はないよ?」

からかう主を一瞥して、シマは庭の隅へと姿を消した。みなが食べ終わろうかという頃に再び姿を現し、尾を立てると主の横にぴんと立つ。

その様子を見ていた主は、毛を逆立てそうに背を張った、シマの首筋を優しく撫でる。

「ご苦労だったね、シマ」

僅かに唇が動いただけの囁きだった。

「どうかしましたか?」

のんびり問う若造に、主は穏やかに首を振る。

「たいしたことはございません。ですが、客人があるやも」

「そうですか」

膳が下げられると、銚子一本分ほど酒を呑んでいた若造は、うつらうつらと船を漕ぎだした。

育ち盛りの小僧でもあるまいし、よくもこう眠れる。

一寸先も見えないとはよくいったものだ。

厚い雲に月の光を奪われた庭は、檜の板張りの廊下を一步離れたなら、目前の葉の一枚さえ見えない闇に包まれている。

客間で眠っていた若造がもそもそと布団を抜け出し、廊下にでた気配がした。

灯りひとつ無い居間に腰をおろし、主もそれを感じている。

檜の板張りの廊下を、ぺたりぺたりと歩く音が小さく響く。

「驚いた、シマかい？」

燭台を手を歩いていた若造は、廁の戸口の前で尾を立てるシマの姿に驚いていた。

「そこに用があるから、ちよつとだけ避けてくれないかな？」

シマの三角に立った耳の片方がひくりと動いて、面倒臭さそうにその場を退いた。

「わるいな」

躑のいい猫を褒めるように、若造は腰を屈めてそういった。

シマが動いたのは、この若造の声に反応したからではないというのに。

廁の戸口に形ばかりに付けられた、長四角な出っ張りを引いて戸を開けかけた。

「そのまま動かれますな」

柔らかな、けれども有無を言わせぬ主の言葉に、若造の動きが止まる。

主は大人しく動きを固めたままの若造の顔に、己が顔をすいと近づけ、あと少しで唇が触れそうな距離から、ふう、と唸と耳に息を吹きかけた。

何事かと瞬きをくり返すばかりの若造から、ほんの少し距離を取って主が立つ。

「悟様、済みましたからご自由どうぞ」

若造ははあ、と返事か溜息かわからぬ声を漏らす。

「これはいつたい、どのような趣向なのですか？」

若造が困り顔で廁へ向き直るのと、時を同じくして主が声をかける。

「そのような趣向にございます」

廁の戸口に手をかけようとした若造の動きが寸の間止まり、次の瞬間ぎやつと悲鳴を上げて飛び退いた。

蠢く白い腕が突き出ているのは、廁の戸口のその内側からであった。

「お止めよ、この方はおまえが求める者ではないのだから」

主の声にも、廁から伸びる細く白い指先は、空を搔いてそこにはない何かを求めているようだった。

「好いた男の香りまで忘れたわけではあるまいに。似た年頃の男というだけ。この方の香りに惑ってはいけないよ」

筋が浮きでるほど伸ばし開かれた指先が震え、力なくだらりと下がった。

「いい子だねえ」

腰を抜かしたまま震える腕を伸ばし、がくがくとわななく顎を止めることもできずに  
廁を指さしたのは、情けない若造。

「そ、それは何ですか！」

「若いおなごの腕にございます」

若造から見えぬ側へと顔をそむけた主の表情は、長い睫を伏せて泣き出しそうな幼子  
に似ていた。

「おなごとは、いつの時も損な道しか選ばぬな」

ぴくりと跳ねた細い指先を、主は己の手の平でそつと包む。

「悟様、この者は死人にございます。死人の魂とでも申しませうか」

主の手に包まれてなお、廁からの覗く腕は肘から少し上を見せたまま、だらりと垂れ  
下がっている。

「魂とは、見えるものなのですか？ ゆ、幽霊というやつですか？」

裏返った声で必死に話す若造に、主は言葉なく頷く。

——どこにおられるのか。

廁の中から、やつと聞き取れるほどにか細い声が響く。

「ひいっ！ しやべったのですか？ 心がまだ残っている？」

「悟様、心を持つが故のなれの果てにございます。心を失えたなら、死してこれほどまで己を追い詰める者などおりますまい。ですから悟様。この者達を幽霊とは呼んでやらずにいてくださいまし。魂なのでございます。苦しんで道を見失った、寂しい心なのでございます」

わかつてかわからずか、若造はかくかくと首を縦に振る。

「シマも心配おしでないよ。この子なら、大丈夫だから」

毛を逆立て主の側から離れなかつたシマは、その言葉を聞くと静かに廊下の隅へ身を引き、ぴんと立てた耳から力を抜いて蹲る。

「誰を捜しておいでだね」

主が女に問う。

——共に手を取って死ねたなら、このようなことには。

「心中かい？」

——追つ手がわたしたちを川から引き上げた。

「二人とも息があつたのだね？　心中し損なえば晒し者だろうに」

——三日間晒された。

「辛かつたろう」

——その後、顔も知らぬ者達に襲われた。

「そうかい」

——惨かった。

白い腕の上の方から、たたりと一筋の血が流れ落ちる。

絶えることなくぽたりぽたりと落ちるどす黒い血は、檜の木板の廊下に付く前に、燭の淡い光のなか、溶けるように消えていく。

「わたしが手を貸そう。闇の中から出ておいでな」

一滴、また一滴とこぼれ落ちる血の玉。

「惨めな思いをした女を数え上げたら、人生など幾つあつても足りぬもの。思いが伝わらないのは歯痒い。けれどね、忘れぬことと過ぎたことに溺れるのでは訳が違うのだよ」

白い腕に線をなして流れる血の跡が、指先から霧となつて消えていく。

「おまえはいい子だもの。その優しさを、今度は自分に向けておあげ。今のままでは、いけないよ」

指先が主の手の中から引き抜かれ、白い腕が闇へと戻っていく。

「行つてしまうのかい？」

白い指の先が、廁の闇に吞まれて消えた。

——戻つてまいります。必ずや、あなた様のもとに。

心なしか声が正気を帯びている。

落とすように微笑んだ主の表情は、何を思うものなのか。

「他人に心をかけるほど、楽になったわけでもあるまいに」

——人とは醜怪なものにございますが、今宵は蕾も開く思いにございました。

後に残されたのは、蠟燭に照らされ揺れる主の影。差し出したままだった手を、主はするりと己の胸元へ引き寄せる。

若造はといえば抜けた腰を廊下に張り付かせたまま、口を半開きに己の不甲斐なさを晒していた。

蹲っていたシマが役目を終えたといわんばかりに欠伸をひとつすると、庭の暗がりへと紛れて消える。

チリチリン

どこか遠くへ思いを馳せたままの主の心呼び戻すように、わたしは小さくひと鳴りました。

はっと瞬きした主の口から、浅い息が漏れる。

「おまえはやさしいねえ」

冷たい指の先が、そつとわたしの身を撫でた。

優しさなど、いったい何の役に立とうか。

役立たずのこの身を恥じて、わたしはきちりと身を固くした。

「悟様、廁へ用がおありだったのでは？」

「い、いや、しかし」

主は身をかがめ若造の顔を覗き込み、顔を寄せると瞼に息を吹きかける。

「これでもう、先ほどのような者が見えることはございません。勝手ながら、聞く力だけは残させていただきます。ご自分の耳でお聞きになり、その全てを留めて決めていただきますとうございます」

「もう、今のような者は見えないと？」

「はい、さすがにそれは辛かろうと思ひまして。ただ今宵だけ、一度だけ目にしていただけが必要があつたのでございます。口で言われても理解できぬ者が、この世には存在しているのだと」

竦んだまま、若造の視線がうろろうと宙を彷徨う。

「それとも、今宵限りでここを後にされますか？」

それは決して、主が口にしたくない言葉であろうに。

主はいつでも己の存在より、他人の気持ちを思う。

他人の気持ちを汲み取りすぎるあまり、主にはいつまで経つても平安が訪れない。

「恐ろしいです。震えが止まりません」

横で膝を折る主が、睫を伏せる。

「それでも知りたいのです」

一度は伏せられた睫の隙間から、漆黒の瞳が覗く。

「あの強突張りの父が、ここで何を知り何をしようとしていたのか。カナさんに器が大きいとまでいわせる父の本性を、ぼくは知りたい」

若造はまだ震えの残る膝を折り、主に向かつて居住まいを正す。

「人には各々に宿命があるというのが、父の口癖でした。ぼくにもそのようなものがあるかはわかりません。それでも、背負って生まれたモノがここにあるなら、それを見極めたい」

「ありがとうございます」

主は震える唇をきつく結んで、深々と頭を垂れる。

「ところでカナさん。お願いがあるので」

「なんでございましょう」

少し落ち着いたのか若造は、ぽりぽりと頭を搔いて恥ずかしそうに視線をそらす。「使いたいのですが、今だけここで待っていていただけませんか？」

若造が指さしたのは、件の廁だった。

主は可笑しそうに肩を揺らし、唇を綻ばせる。

「おやすいご用にございます」

「いや、本当に情けないかぎりです」

情けない？ そのような言葉で済みますのか？ わたしであればこのような慙愧の至り、己を許せるものではない。悔いを千載に残すであろう。

そんなわたしの思いも知らずに、若造はへらへらと頭を下げながら、おぼつかない足取りで厠へと入っていった。

リ——ン

低く鳴るわたしを見て主が笑う。

「不満そうだねえ。でもね、さすが先代が見込んだ男だと、わたしは思うのだよ」

いくら主の言葉でも同意しかねる。先代はまっこと俠気のある御方だった。それに比べて、あの若造は糞である。

鈍助、頓痴気、抜け作！ 罵倒する言葉なら、一晩中でも続けられそうさ。

「いやいや、すみません」

阿呆面を晒して、若造が厠からでてきた。

「あとはゆつくりお休み下さいな。聞きたいことは山ほどおありでしょうが、今宵はどうもお休み下さい」

「はい、承知しました」

若造が寝屋へと戻っていく。

主は檜の板張りの廊下に腰をおろし、一人庭を眺める。

夜が白むまで、こうしておられるつもりだろうか。

いつの間にやら雲が晴れ月の光が差している。

「おや、せつかく顔をだした月だというのに、霞がかかっているねえ」

それならそれでいい。

わたしは鈴。主が居る傍ら、いつまでも寄り添うだけだ。

## 3 ちつさな命と 忘れられぬ温もりと

雨上がりの澄んだ夕暮れであった。

夕暮れとはいってもすでに日は落ち、遠くの山を縁取る空が僅かに茜に染まっているだけである。

私は鈴。

目覚めたばかりの主の腰帯で、ゆらりぶらりと夜が明けるまで揺れるだけの存在だ。若造とはいえば、すっかり空気が夏と入れ替わりやつと姿を現した陽炎ようえんに見とれて眺め疲れたのか、少し前から寢所に籠もっている。

主が目覚める前に夕の膳の支度を終えた陽炎は、漆黒の長い黒髪を束ね、その途中を紐で二箇所ばかり結わえている。

横の髪は耳の下で切りそろえられた、小柄な若い女であった。

その陽炎が庭に下りようと草履につま先を押し込み、白地に藍色で染め抜かれた牡丹の柄がひらりと揺れた。

「カナ様！」

陽炎があつ、と小さく声を上げ、慌てて主を呼ぶ。

寝所からでてきた主が、陽炎の姿をみて懐かしそうに微笑んだ。

「陽炎、久しぶりだねえ」

主に頭を深く下げた陽炎は、遠慮がちに庭を指さす。

「おやシマ、お客さんかい？」

庭には、いつものような鳴き声を上げることなく佇むシマがいた。その横には四十絡みの男が立っている。

無愛想な猫だが、客人が訪れて鳴かなかったことなど一度もない。

鳴いて主に知らせるのが、仏頂面したシマの仕事であるというのに。

主の姿を認めると、シマは音もなく草陰へと姿を消した。

「シマとは、誰のことだい？」

男が口をきく。

「シマはこの屋敷に居着いている猫ですよ。ちよいと前までその辺りにいたというのに、どこかへいってしまいました」

男は納得のいかない様子で首を傾げた。

「ここへ来るまでの間、誰かが手を引くように寄り添ってくれたんだ。そいつが道案内をしてくれた。辺りは暗くて何も見えやしなかったが、行く道の先だけほわつとあったかくてよ。猫じゃないよな。猫の道先案内なんて、聞いたこともねえ」

男は飛脚の恰好をしていた。

左足が、膝の下まで赤黒く腫れ上がっている。

傷口から土の毒でも回ったのだろうか。

「おれは何処に來ちまったんだい？ 仏さんの世界にしちやあ、姉さんの声が色っぽいな」

訝しげにいう男は、自分の死を理解しているらしい。

「ここは辻堂と呼ばれる旅籠。あなたが進むべき道を、照らし示す場所にございますよ」  
へえ、と男は頷いた。

「ずいぶんと彷徨われたのですか？」

「いやいや、俺は死んで間もないのさ。死んだのははつきりと覚えているが、その後がよくわからなくなつてよ。たぶん、昨日とか三日前とか、その辺りに死んだと思うんだが」

主はすいと目を細めた。

「お客さんですか？」

庭の話し声を聞きつけて、阿呆面の若造が顔をだす。

「はい。飛脚姿の男にございます」

主は視線で、男が立つ辺りを指し示す。

「ところで、あなた様は目が見えないのでは？」

「そうなんだ。足の先にちびつと付いた傷が悪かった。仲間は土の毒だつていつていたが、本当のところはわかりやしねえよ。医者にかかる金もないから、長屋のかみさん連中が分けてくれる目刺しとか、漬け物とかを食って最後は命を繋いでいたのさ」

まだ傷む気がするのか、男は盛んに左の腿を手で撫でる。

「毒が回るのは早かった。仲間は走つてでるのが仕事だから、いつまでも俺を構つている暇はねえ。死ぬのがわかつていて、一人で居るのは思うより寂しいもんだ」

「お一人で亡くなられたのですか?」

男の姿は見えなくとも、声だけは聞こえている若造が、己の事のように声を詰まらせきいた。

「ひとりじゃなかったぜ」

男がにっと笑う。

「どなたが看取つてくださったのです?」

主が問う。

「どなたかつていうほどの者じゃねえよ。猫だよ。ふらりとやつてきた野良猫が、どういふわけか、熱をだして呻っている俺の側に居着いちゃった。まだうつすらと見えたこの目に映つたのは、暖炉裏の灰みたいな毛色の猫だったよ。まあ本当のところは、おれに懐いたんじゃなくて、近所の婆が持つてきてくれる、魚の切れ端が目当てだったんだ

ろうよ」

見えない目で遠くを見るように、男は空を仰ぐ。

「うれしかったあ。あんなちつさい命でも、側に居てくれて嬉しかったのさ」

「少ししかない食料を、その猫に与えたのですか？」

驚いたように若造が声を上げる。

「どうせ死ぬのはわかってんだ。ちつさい目刺し一匹でも必ずわけた。おれが魚の頭の方半分で、あのチビがしつぽを食う。しつぽを食ったら、ミヤーって鳴くんだ」

愛しい子供の顔でも思い浮かべたかのように、男の表情が優しく緩む。

「死ぬ何日前、とうとう目が見えなくなった。それでもあいつは、おれの横でミヤーって鳴くんだよ。あの鳴き声だけが、おれにとつちや今生の温もりだった」

男の話に、主は睫を伏せて優しく微笑む。

「その猫も、あなた様のことをきつと覚えていてるでしょうよ」

主の言葉に、男はへへへ、と笑う。

「どうか、猫なんて気ままだしよお。なにせチビだったからな。あいつもやせ細っていたから、餌が食えなくなっていなけりやいいが」

「ここへ来ていないのなら、まだ生きているのかも」

主がいうと、男は嬉しそうに何度も頷いた。

主は時折やさしい嘘を吐く。

知らなくても良いことが、この世にはあるのだと主はいう。

「そろそろ行くかな。どうせここには居られないんだろう?」

男は庭の隅に足を向ける。

「足に触れる、道しるべにそつてお行きなさい」

「ありがとよ」

男は見えない目の代わりに、足先で行く道を確かめながらゆつくりと進む。

不意に男が振り返った。

「あいつやせつぽちだったから、いつ死んじゃうかわかんねえ。もし見かけたら、力に

なつてやつてくれよ。灰と同じ毛色の、ちっさい猫だからよ」

そういう残して、男は暗がりへと姿を消した。

「あの男、本当に死んで間もないと信じていたようだねえ」

主が首を傾げる。

「でも優しい人でした」

のんびんだらりんとした若造の声に、この身が危うく震えるところだ。

「いくら優しいからといって、己が死んだ時を百年以上違えるなど」

そこまでいって、主はシマが姿を消した草陰に目を向ける。

「妙なこともあったもんだねえ。ねえシマ？ 聞いているのかい？」

「シマがどうかしましたか？」

「いいえ、どうもいたしませんよ」

そういつて微笑むと、主は座敷に入ってしまった。

陽炎がこしらえた夕の善は、すっかり冷めてしまっている。

奥からでてきた陽炎が、庭先で七輪に目刺しをのせる。

目刺しをひっくり返す頃には、旨そうな匂いが庭全体に広がっていた。

「さあできた。シマ、好物のお魚よ。ここに置くから、冷めたらお食べね」

陽炎は目刺しを一匹皿にのせ、檜の板張りの廊下の端に置いた。

みなが冷えた膳を食べ終わるころ、ようやくシマが庭の隅から姿を現した。

小皿の目刺しをぺろりとひと舐めして、旨そうに齧り付いている。

部屋にいる者は、そんなシマを見て見ぬ振りをしていた。

今宵ばかりは武士の情けである。

まあ、武士ではないのだが。

悠然と尾を振りながら、シマが庭の闇へと帰っていった。

小皿の目刺しはきれいに半分だけ尾の方が食われ、頭付きの半分が残されている。

ミヤア

庭の暗がりから、  
いつもとは違って甘いシマの鳴き声がひとつ響いた。

## 4 壁に模られる者

己の過去を垣間見られて恥ずかしく思ったのか、仏頂面のシマが二日ほど姿を見せず、ようやくと庭をうろつき始めた夕暮れ時、主から借りた縞の浴衣を着た若造は、文机に肘を凭れて庭を歩くシマの姿を目で追っていた。

もともとぼんやりした抜け面の中、突如に目だけが大きく見開かれる。

はっとした様子で凭れた肘を離し、きよろきよろと辺りを見回した。

「どうかなさいましたか?」

主の声に、若造は首を傾げた。

「今しがた揺れたような気がしたのですよ。地震かと思いましたが、どうやら気のせい  
です」

主はゆるりと首を巡らせ、座敷の壁を見回した。

「気のせいではございませぬよ。悟様は場の揺れを感じたのでございます。もうすぐこ

こへ、野坊主<sup>のぼうず</sup>がやってくるのでしよう」

「野坊主、とは魂のようなものでしょうか?」

おろおろと辺りを見回す若造に、主は微笑みながら首を振る。

「魂というなら、確かにその通りなのですが、この間の娘や男達とは存在が違います。今の野坊主に居所があるとしたら、それはこの辻堂でございましょう」

軽い空気の乱れを感じたのか、若造はびくりと肩を跳ね上げる。

「野坊主がまいったようでございます」

主の目は、壁の一点を見つめている。

壁の一部がめりめりと盛り上がり、やがてそれは人を模って動きを止めた。

顔の細部、風貌の詳細を見て取ることはできない。精巧な人型に盛り上がった壁の表面がそこにあるにすぎなかった。

胡座をかいているであろうその姿は恰幅が良く、頭は丸く禿げ上がっている。

「久しぶりですね、野坊主」

——そうであったな。久しくそなたの顔を見ておらぬ。

壁に模られた唇が動く。

野太い声は、若造の耳にも届いたのだろう。小さな文机を倒さんばかりに、上体を仰け反らせている。

「悟様には見えないでしょうが、ここに野坊主が姿を現しております。野坊主、こちらは悟様。この辻堂の大屋様とされるやもしれないお方。姿は見えなくとも、野坊主の声は聞こえていますから、どうぞご挨拶なさいませ」

しばしの沈黙が流れた後、先に口を開いたのは野坊主だった。

——先代の訃報はこの耳にも入っている。真に惜しい方を亡くしてしまった。わたしの名は野坊主。この先幾度か会うこともあるろう。

「悟と申します。先代の小野田創見の末息子です」

野坊主は、無言のまま顎を引いて頷いた。

「今日はどのような用向きでしょう」

——そなたの香りを微かに纏う、若い女が動いておる。見知った者か？

視線を束の間横へと流し、主の口元がうつすらと開く。

「つい先日、ここへ立ち寄った娘かと。……無理をしているのでしょうか？」

——我が身を省みず、といったところか。あの闇の中、魂が砕けても良いと思つているように、わたしには見えた。

「わたしが悪いんですよ」

主は悲しげに笑みを落とす。

「何を頼んだわけでもありません。けれど感じてしまったのでしようよ。別れ際、決意を滲ませる言葉を残していききました」

野坊主の唇は動かない。

「あの子の手を取ったとき、重ね合わせてしまったのでございます。忘れそうに遠い己

の姿と」

主はここで言葉は切った。

わたしは震えそうになる身を必死に押さえた。

忘れるわけがあるまい。

忘れそうになど、なるわけがあるまい。

欠片の救いさえないこの道に主が足を踏み入れたのは、ただひとつの願いの為ではないか。その為だけに選んだ道であろうに。

——そなたも変わらぬな。

野坊主の言葉は、主の慰めになるのだろうか。

鳴るしか能のないわたしには、言葉の機微など深くは理解できない。

この身を鳴らす代わりに、無数の言葉から主に伝えたいただひと言を、このひと言を伝えられるのなら、今宵この身が錆びて砕け散ろうと何の悔いが残ろうか。

「あの、重ね合わせるとは、いったいどういう意味なのでしょう？」

野坊主の顔が、若造へと向けられる。

——気にするな、カナの独り言だ。

そうですか、口元だけでそう呟いて若造は口を閉じた。

「申し訳ありませんが、野坊主と少しばかり込み入った話がございます。悟様はしばらく

くの間、客間でお休みになってみてくださいませ」

「わかりました。何かあつたら、声をかけて下さい」

悟は見えぬはずの野坊主へと一礼し、静かに座敷を後にした。

廊下の床板が軋む音が遠ざかるのを待って、主は野坊主の前にゆつくりと腰をおろす。

——カナよ、あの若者は答えを出したのか？

主は小さく首を振る。

「焦らずにいてやってくださいな。成るようにしかならないのは、野坊主が一番良く知っているでしょうに」

野坊主の口元が綻む。おそらく笑つたのだろう。

——少しは焦れといたいだが、カナの心の底はいつまでも掴めぬ。素手で鰻を掴むようなものだ。

「鰻を、でございますか？」

——手は届く。確かに触れることができるというのに、触れたと思つた途端、この手の中からすりりと逃げる。

「女を鰻にたとえるなど、禅門とはいえ高僧に劣らぬ方と思つておりましたのに。これはとんだ生臭坊主だこと」

主が口元に着物の袖を当て、可笑しそうに笑う。

——今も昔も、徳のある高僧など爪の垢ほどしか居らぬ。

「目の前に居ると、わたしは信じているのですがねえ」

主の言葉に、野坊主が僅かに肩を揺らす。

可笑しければ声を出して笑えば良いのに、とわたしは思う。

わたしでさへ、面白いと思えば鳴るといふのに。

違うな。

役立たずの鈴などと一緒にはならない。

輪廻の輪に乗って再び生まれ変わる日でも来ない限り、大声で笑うことなどできない

のだろう。

それほどに暗く重い荷物を、この生臭坊主は背負っている。

だからといって、野坊主を好きにはなれない。

ほの暗い道しか続かぬ旅路への手形を、主へ渡したのは野坊主だ。

だからわたしは、いつまで経っても野坊主が嫌いだ。

「先日、陽炎が姿を見せました。秋の音が聞こえるまでは、いつもの夏と同じようにこの

屋敷に居てくれるでしょう」

——もうそんな季節か。陽炎のこしらえた白和えこんにやくは旨かった。

「今でも美味しゅうございますよ。いつか、静かな宵にでも造ってくれと頼んでみましようか？」

——そうだな。静かな宵があれば、頼んでみるとしようか。

他愛のない会話が続く。若造を払ったのは、余計な話を耳に入れずにおきたかったからだろう。

野坊主は嫌いだ、主が楽しそうであるから今宵は我慢しようと思う。

この部屋に主が一人きりになるまで、錆びたように黙っていよう。

話の所々に聞き耳を立ててはいたが、主の求める話は野坊主の口には上らなかつた。知っていたなら話すと信じておられるのか、主からも問う素振りはない。

目的はどうあれ主は、野坊主にとって己の願いを叶える道具に過ぎないとわたしは思っている。

求める答えを知ったなら、主は辻堂を離れるかもしれない。

みすみす手駒を減らすような真似を、はたして野坊主はするだろうか。わたしが己の思考に深く陥っている間に、野坊主は姿を消していた。

チリン　チリリン

「やつと鳴ったねえ、鈴。また臍でも曲げていたのかい？」

リーン

「氣を揉むことはないよ。野坊主なら、悟様の客間へいったのだから。悪いことではないだろう？」 男同士の方が、話しやすいこともあるだろうからねえ」

チリチリ

心配げに鳴ったわたしに、目を細めて主が微笑む。

若造のいる客間に茶を運ぼうと、主がふすまに手をかけると、場の空気が揺れた。少しばかり半開きになったふすまの隙間から中の様子が伺える。

主は腰帯からわたしを外し、廊下の端に静かにおいた。

「野坊主が現れたのなら、わたしは失礼しようかね。おまえは、心配でたまらないのだろう？ ここにおまえがいることなど、とつくに野坊主は知っている。知っていて話すだろうから、ここで気が済むまで二人の会話を聞いておいで」

囁いて主は座敷へと戻っていく。

呼び止めようかとも思ったが、ふすまの中の会話が気になった。

主のためだ、決して盗み聞きなどではない。

場の空気の揺れを察した若造が、背を仰け反らせて見開いた目をきよろきよろとさせている。

「誰か居るのですか？」

若造のすぐ横の壁が、めりめりと盛り上がり座した男を横る。

野坊主であつた。

——わたしの姿は見えないのであつたな。

己のすぐ脇から聞こえてきた声に若造は尻から跳ね上がり、口から漏れたのは潰された蛙のごとき、喩えようなない声だつた。

「そこに居るのですか？」

——野坊主だ。さきほど会つたばかりであろうよ。

ほつと肩を落とした若造は、声を頼りにあたりを付け、壁に向かってきちりと座り直す。

——そう改まるな。取つて喰うとも思っているのか？

若造はぶるぶると頭を振り、野坊主の戯れ言を否定する。

——カナは美しい娘であろう？

「はい。とても綺麗な女性です」

——カナに惚れたか？

「とんでもない。そんな大それたことなど考えるわけがありません。それにカナさんは、髪の毛の先、袖の先ひとつにも触れてくれるなどいわれています」

野坊主の肩が笑いに揺れる。

——おまえが考えているのとは、ちと意味合いが違う気がするがな。

「カナさんの言葉に、どんな意味合いがあるというのです？」

——気にするな、独り言だ。

はあ、と若造は返事とも溜息ともつかない息を漏らす。

——おまえは見極めたいといったそうだな。それゆえ臆病者のくせに、ここに居座ることを決めた。

返す言葉がないのか、若造は恥ずかしそうに俯いた。

——おまえはここで、己の本質に気付くであろうよ。臆病者と、骨のある無しは関係ない。

野坊主の真意が見えぬらしく、若造は困ったように唇を窄める。

あの頭の中には、日常生活で使う言葉しか詰まっていけないのだろう。

棒で叩けば、ぼっくりぼっくりと中身が空の音がするに決まっている。

——おまえは先代が嫌いか？

「実の父ですが、ああいう人間にはなりたくありません。経済力はありませんが、家庭を顧みない人でした。父と一緒に出かけたのは、三歳の時が最初で最後です」

——覚えていいのか？

「いいえ、数年前に普段は物言わぬ父がこういいました。昔おまえを連れて行った場所

に、いつかまた連れて行くと。言葉は多くありませんでしたから、ぼくが三歳であったことと、二人で出かけたことしかわかりません」

若造は少し寂しげ視線を落とす。

——親の顔を覚えているなら、それもひとつの思い出であろうよ。ぼろりと産み落とされ、土を舐めて生き、ひとり朽ちていくしかない者達がこの世には大勢いる。

若造は顔を上げ、声の聞こえる壁の方をじいつと見入っている。

「まるでご自分のことを語られているように聞こえます」

——かも知れぬな。

野坊主がこれ以上余計なことを語らぬかと、わたしは身も凍る思いで聞き耳を立てた。先代とさえそれほど口をきかなかった野坊主が、よくもこれほどしゃべったものだ。

すっかり暗くなった部屋の中、若造が燭台に灯をいれる。

——大家になるか、まだ決めておらぬのだろうか？

頷いた若造の顔を、灯されたばかりの蠟燭の明かりが撫でた。

「自分でもわからないのです。ぼくがここの大家になり、ここが在り続けることを望む人がいるのだから、承諾すればそれですむ話だというのに。何に躊躇しているのか、自分で分ではつきりとしたことは……。自分の心だというのに、ここへ来てからまったく扱

いづらい」

壁に模られた野坊主の姿がすいと壁の内へ吸い込まれ、古い木目の板が平らに戻つていく。

——わたしはもう行くが、焦ることはない。

「焦らなくとも良いのでしようか？」

——生きているから、人は惑うのだよ。

「野坊主さん？」

その問に答える者はもういない。

野坊主の言葉は意外だった。

先代のときには淡々と事を進めていたし、焦るなどはいわなかった。

人とは惑うものなどと……。

若造は足を崩し、文机に肘をつけて何か考え込んでいる。

ミヤー

庭でシマが鳴いている。

今宵もまた、騒がしくなりそうだ。

## 5 子鬼が生を望む夕暮れ

この日の朝は、若造のどたばたと纏れた足音で始まった。

古い檜の板張りが抜けるのではないかと気を揉むほどに、廊下を軋ませて駆けてくる。

「カナさん、カナさん！」

女性の寝屋に、知って日の浅い男が声をかけるなど許されようか。

この不快な声に主が目覚ますなど我慢ならぬわたしは、主の美しい臉が開かれる前にこの身を鳴らした。

リーン チリーン

身を横たえているだけの主は眠つてなどいなかっただが、これはわたしの意地である。

主が庭に出る時間を知らせるのは、わたしの仕事だ。

「鈴、悟様がいらしたよ」

小声で主はそういった。

「悟様、仕度をいたしますから、少々お待ちになつてくださいませ」

障子から差し込むまだ明るい夕焼けに、影となつて落ち着かぬ若造の様子が見てとれ

る。

男児たるもの、堂々としていなくてどうする。ましてや女性の前で狼狽えるなど、情けないにもほどがある。

「カナさん、妙な話なのですが足音がするのですよ。あちらこちらを走り回る足音が」  
「おやまあ」

長い黒髪にツゲの櫛を通しながら、のんびりと主は答えた。

「山の縁が茜に色づき始めたころから始まったのです。誰か客人でも来た音かと思いましたが、人の気配など何処にもないもので」

一生待つても、ここで人の気配がすることあるまい。

あるのは闇に紛れて訪れる、存在という名の気配だけ。

「ずいぶんと慌てておいでなこと。今そちらへまいります」

主が障子を開けると、詮無き子のように足をもじもじと摺り合わせる若造の姿があった。

「ここでは足音が聞こえる日もあるのですか？ それなら安心なのですが」

「そのような日はございませんよ」

「やはりありませんか」

「でも、そのような日があっても、おかしくはございません」

「……どつちですか？」

呆けた面の若造を手で招きながら、主は廊下の先をいく。

「悟様の客間で聞こえたのでしょうか？」

「はい。ですが厠に入っている間も、廊下を無数の足音が駆け抜けていきました」

首を傾げる主は、何を思いついたのか懐から匂い袋を取りだし、口を開くと中の白い粉を手の平にのせた。

唇を寄せてそれにふつと息を吹きかけると、白く微細な粉がまって床をうつつすら白く覆う。

「それは？」

「足跡の正体を、炙りだそうかと思ひまして」

主の言葉に若造が返したのはあ、という気の抜けた返事ひとつ。

「おや、陽炎じゃないか。働いてばかりいないで、少しはお休みよ」

主の視線の先には、家中の用向きを全て終えた陽炎が立っていた。

夏の訪れと共に辻堂へ姿を現してまだ日の経たぬ陽炎は、己が留守にした三つに渡る季節の埃を全て拭おうとするように、足を止めることなく働いている。

「楽しいのです。こうやってカナ様のお側であれこれするのは、今しかできないことですもの」

「先日ばかりんとした挨拶もできずにすみません」

へこりへこりと頭を下げて、若造が主の背から顔を見せる。

「悟様ですね。陽炎にございます。ご用がありましたら、なんなりとお言いつけくださいまし」

陽炎が控えめな笑顔と共に頭を下げる。

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

陽炎に負けじと深々と頭を下げる若造に、主は口元にふわりと笑みを浮かべた。

「陽炎は夏の間だけこの屋敷に立ち寄り、共に居てくれる者です。陽炎、すまないがお茶を淹れて座敷まで持ってきてくれるかい？」

ひとつ頷いて、陽炎は屋敷の奥へ姿を消した。

「まるで平安京のお姫様みたいな女性ですね。顔の横の髪を短く耳の下で切りそろえているところとか、豊かな黒髪を二本の紐で結わえているところとか」

陽炎の後ろ姿を見送った後、若造が感嘆の溜息を漏らす。

「人は現世の己の姿に、固執するものでございます」

「現世ですか？」

「彼女は夏の日差しが降り注ぐ季節にだけ、姿を現す陽炎と同じにございます。この場に留まることは無い存在にございます」

若造はしきりに頷きながら、尚且つ首を傾げている。

「現世とは、どういうことでしょうか？」

「生きていた頃の姿、という意味にございます」

「陽炎さんは、死人なのですか？」

若造は少しだけ目を見開いた。

「死人でありながら、死にきれないのが陽炎の定めにございます。平安の世は、人と闇が混在しておりましたから」

少しずつ歩みを進める主は、座敷に入ると隅に腰をおろすよう若造を誘った。

「平安とは、平安京の時代ですか？ それはまた、途方もなく遠い時だ」

「己の運命を呪うこともできず、誰を恨む事もしなかった。陽炎の魂は澄んだ泉のように綺麗すぎたのでございますよ」

「綺麗なことは、いけませんか？」

「いいえ。それでも行き場を失った思ひは、時に己を鎖で繋いでしまうのでございます」  
主は残っていた手の平の粉を、ふっと吹いて畳に散らす。

「闇の者にもなれず人にもなれない、それが陽炎という存在にございます」

若造はそれ以上何も聞き返すことなく口を閉じた。

「悟様、優しさは時に己への仇となります。情に溺れてはなりません」

若造がひとつ頷くと、盆に茶を載せた陽炎が座敷へと入ってきた。

畳に撒かれた白い粉に、目をしばたいている。

「座敷の端を通つてここまできるといいよ。その粉は、小さな仕掛けだから」

にこりと頷いて、陽炎はなるべく白い粉を踏まぬ用端を歩いて茶を運び、静かに座敷を後にした。

陽炎が去るのを待っていたかのように、廊下に騒がしい足音が響く。

「カナさん、この音です！」

立ち上がらんばかりにおろおろと辺りを見回す若造を、主は唇の前に指先をすつと立てて無言で制する。

「もうすぐ正体がわかりますよ」

一度は遠ざかった足音が、だんだんに座敷へと近づいてくる。

「あつ」

声をもらしたのは若造だった。

畳に撒かれた白い粉に、姿の見えぬ小さな足跡がぺたりぺたりと残される。

「これはいつたい」

「おや珍しい。これは子鬼達の足跡でございますよ」

「鬼ですか？ 子供の鬼なのですか？」

主は小さく首を振る。

「魍魅魍魎の類で、昔から語られる鬼とは少しばかり違います」

こうして二人が話している間にも、ぱたぱたと響く足音は小さな足跡を残しながら廊下と座敷を好き勝手に行き来していた。

「あの子らは、元々は人の子。昔、口減らしのために捨てられたり売られたりして命を落とした詮無き子達にございます」

「小さな子供が、売られていたのですか？」

「三つ四つの子供の命など、枯れ葉より軽い時代があつたのでございますよ」  
緊張に張っていたのであろう若造の肩が、すくと落ちた。

小さな足跡が、若造の目の前を走り去ろうとする。

「ちよいとお待ち！」

駆け去ろうとする足跡に、主が声をかけた。

足跡の動きがぴたりと止まる。

足跡の数からして、五人ほどはいるだろうか。

「わたしが見えるだろうか？ わたしにはちゃんと姿が見えているよ。この屋敷で好きなだけ遊んでかまわない。でも遊んでいいのは、お月様がお空のてっぺんをまわるまで。その後はわたしのいうことを聞いて、いい子にするって約束できるかい？」

相談するかのようになり、小さな足跡が一方所に集まった。

主が見つめる先に、わたしも意識を集中した。小さな子供らの着物はぼろぼろで、丈が足りずにみな膝小僧が丸見えになっている。

話がまとまったのか、子供らは主の方へ一斉に顔を向ける。

白い顔に目と口はなく、鼻があるはずの場所には僅かなでつぱりだけが残っているだけ。顔の横にあるはずの耳さえ失っていた。

わたしが思った通り、子供達は全部で五人。その全員がのつぱらぼうの白い顔で、主に向けてこくりと頷いた。子供らしい仕草だった。

「いい子だねえ」

主の言葉に、子鬼達の小さな足跡が忙しく跳ねる。

褒められ可愛がられた記憶などない子鬼達に、主のかけた言葉を汲み取ることは難しくとも、主の心を感じたのであろう。

小さな手を打ち鳴らして、踊るようにその場で跳ねている。

「子鬼達は何か話しているのですか？ ぼくには何も聞こえませんが」

「話してはおりませんよ。あるのは小さな体から発せられる感情と想いだけ。この子らには、目鼻や口、耳までもがございませんから」

ぎよつとしたように若造が身をそらす。

「それを持たぬ事こそが、短いながら生き抜いた人生がどのようなものであったかを物語っているのです。」

若造は跳ねる足跡にちらりと目をやり、そらした背を元に戻して黙って主の言葉に耳を傾ける。

「己を人として扱わぬ世を見なくて済むように目を塞ぎ、罵声と怒号しか届かぬ耳を塞ぎ、どれほど叫ぼうと聞き届けられぬ言葉しかでない口を塞ぐ。そして生きることさえ望まれないなら、息を吸う必要さえなかりうと、鼻までをも塞いだのがこの子らの姿が現す意味にございます。」

そうですか、呟いた若造の視線は、まだ跳ね続けている小さな足跡に注がれる。

「カナさん、この子鬼達が行く先には、痛みも苦しみもないのでしょうか？」

消え入りそうに声が震えている。

「詮無き子に苦を与える仏など、あの世にはおりません」

「あの世の仏様が慈悲を持っておられるなら、この世の仏様は何をしておられるのか！」  
若造の言葉が、僅かに怒気を含む。

「仏様はあの世のもの。浮き世には、仏など最初からおりませぬよ」

「ならばこの世に居るのは、いったいなんだと？」

「この世に居るのは、人の皮を被った夜叉にございます。その夜叉に喰われるのが人で

あり、死んでなおその手から逃れられないのが、魑魅魍魎の類でございましょう」

若造は背を丸めて畳へと視線を落とす。

「仏は、居ないのでですか」

言葉尻が細く暗く落ちていく。

「救つてくれる仏が居ないからこそ、人は他人を想い、癒そうとするのではないでしょうか」

語る主の目は優しい。

残酷に成り下がるだけなら誰でもできる。芯から優しくなれるのは、いつの世も地獄を見てきた者ばかり。

「よしー、好きさなだけ遊びなよー、いっぱい遊ぶんだー」

何を思ったのか、若造が両手を広げて笑顔で叫んだ。

子鬼達の笑い声が、寸の間座敷に響く。

「おや、話せるようになったのかい？」

飛び跳ねる子鬼らの白い顔に、小さく赤い唇が現れた。

くすくすと押さえたような笑いが響く。

「子鬼達の笑い声が聞こえたー」

若造の表情がぱつと晴れた。

「子鬼達に、ものいう口が戻りました」

「戻るものなのですか？」

「頑なに決めつけていた己の存在意義が変わったのなら、自ずと姿形も変わります。見てみたいと思えるものができたなら小さな目も開き、また生きようという気になったなら、鼻の氣道も通じましょう」

嬉しそうに微笑む主を見て、わたしの心はチクリと痛む。

己の幸せを感じて主が最後に微笑んだ日から、気が遠くなるほど時が過ぎた。

主はいつも誰かを思つて微笑んでいる。それがわたしには辛くてならない。

「一番歳が近いからでしょうか、子鬼達は悟様に興味を持ったようでごさいますよ？」

驚いた様子で口をぽかりと開けた若造の側へと、小さな足跡がそろりそろりと寄つていく。

「あ、足跡がこつちへ……きました。このために粉を？」

「いいえ、まさか子鬼達が悟様と遊びたがるとは思つてもおりませんでしたもの」

着物の袖で口元を隠して主が笑う。

「遊びたがっているのですか？ ですが何をしたら良いのかさっぱりです」

主がばんばんと、二度手を打ち鳴らす。

「お呼びでしょうか」

ほどなく姿を現したのは陽炎だった。

「面白いものが見られそうだから、酒を持ってきておくれ。酒の肴はいいから、早くおいだよ。陽炎も一緒に呑もうじゃないか」

花のような微笑みで、陽炎は頷いた。

「わたしは見世物ですか？」

「とんでもない。わたし達はただ、事の成り行きを見守る役にございます」

口元を隠す着物の袖が、肩の震えに合わせてひらひらと揺れる。

一息吐いて諦めたのか若造は立ち上がると、己の周りをくるくると走り回る足跡を目で追った。

「子供達は何人いるのですか？」

「男の子ばかり、五人でございます」

盆に酒を載せた陽炎が、開け放たれたふすまから座敷へと入ってきた。

腰に手を当てる考え込んでいた若造が、ぽんと手を打つ。

「あまり太くない縄を、一本用意してもらえますか？」

少し思案した様子の子の陽炎は、思い当たる物があったのか、はい、とひとつ返事をして急ぎ足で廊下を遠ざかっていく。

「みんな、これからする遊びを教えるから、走るのを止めて集まってよ！」

小さな足跡がびたりと止まり、戸惑い気味に若造の足元へと集まってきた。

「これでよろしいでしょうか？」

細めの縄を手にした陽炎が戻ってきた。

「丁度いいです。ありがとうございます」

若造は縄の片端を、部屋の柱に括り付ける。

「いいかい？ ぼくがこの縄を揺らすから、一列に並んで順番に縄を跳ぶんだよ？」

小さな子でも跳べるように、ゆっくりと縄が揺らされる。

「ほら、跳んでごらん！」

どうしたらよいのか解らないのだろう。子鬼らの小さな足は、その場でもじもじと動くだけだ。

いっこうに跳ばない子鬼達にどうしたものかと、額に指を押し当てて思案していたらしい若造は、ああ、と声を上げて陽炎を見た。

「陽炎さん、子鬼達に跳んで見せようと思うので、この縄を揺らしてもらえませんか？」

主に酒を注いでいた陽炎は、にこりと頷き立ち上がる。

そして細い縄を手に、小さく揺らし始めた。

「よく見ててごらん。この遊びは、こうやってするものさー！」

陽炎の揺らす縄を、若造はひよいと跳んで見せた。子鬼らの足跡が跳ね上がる。

「少しずつ波を大きくしてください！」

陽炎が揺らす縄を、若造は器用に跳んで見せた。

だが思わぬ誤算に足元をすくわれる。

陽炎の揺らす縄は、際限なく大揺れになっていったのである。

大きく波打って戻ってきた縄が、若造の足首をひっかけた。

「痛いっ〜！」

尻から畳に叩き付けられた上、勢い余って後ろへとでんぐり返った。

「大丈夫ですか？」

半分笑いながら声をかける陽炎の隣で、子鬼らの歓声があがった。

ざまあみろ！ どうせなら阿呆な頭から落ちれば良かったものを。

おやおや、子鬼達の顔に小さな目が現れた。

この阿呆の失態は、子鬼達の目を開かせるほどに面白かったのだろうか。

「悟様、子鬼達が喜んでおりますよ。この遊びを見て知りたいという思いが勝ったのでしよう。目が開いたようでございます」

引つ繰り返って顔を顰めていた若造の表情が、満面の笑みへと変わる。

「よし！ やり方はわかっただろう？ 順番にひとりずつだよ」

小さな足跡が一齐に動いた。どこにでもいる子供のよう、我先にともつれ合ったあ

と、ようやく順番が決まったらしい。

その様子を眺めながら、主は手酌で酒を呑んでいる。穏やかな表情に浮かぶ笑みは、まるで幸せな女そのものに見えた。

若造に縄を渡した陽炎も、主の隣の腰をおろし呑みかけの盃を口へと運ぶ。

「それ、いいぞー！」

若造が声をかけると、小さな足跡がひとつ駆けだした。

小さな揺れの縄を懸命に飛び越える足跡を見て、若造は嬉しそうに声をかける。

「上手だよ、がんばれー！」

少しだけ縄の揺れを大きくすると、足を取られた子鬼はひっくり返り、ごろりと一回転した。

何が起きたのかを主に聞かされた若造は、ほっとしたように息を吐く。

「ようし、次ぎもがんばって！」

ところがどの子鬼も、縄の揺れを少しだけ大きくすると、ころりとひっくり返って一回転してしまう。

その度に、子鬼達から大きな歓声と拍手が湧く。

「まさかお前達……ぼくが失敗して転んだのを、そのまま真似しているな？」

笑いとお奇声の入り交じった声を上げて、小さな足跡が散り散りに逃げ出した。

「こちら、待てー！」

逃げる足跡を追って、若造が座敷を飛び出していく。

あれでは遊んでやっているのではなく、遊んでもらっているも同然だ。

「さすがだねえ。見ただろう？ 子鬼達の顔」

主の言葉に、陽炎も嬉しそうに頷いた。

わたしも確かに見た。

座敷から駆けていく子鬼らの白い顔には、人の子と同じ鼻があった。

白い歯を覗かせて笑い、悪戯小僧そのものといったまん丸い目は、生き生きとした人の子そのものにわたしは見えた。

「生まれて初めて、他人との関わりに優しきを見いだし、面白さを感じたのだろうよ。こんなに楽しいことがあるならもう一度だけ生きてみよと、思ってくれたのかもしれないねえ」

盃の酒を一気に空けて、主は嬉しそうに息を吐く。

「縄遊びでそれほどまでに？」

陽炎の問いに、主は静かに頷いた。

「たかが縄遊びにさえ、かけがえの無いものを見いだせるほど無味な人生を送った子供しか、子鬼にはならないということさ」

不憫だねえ、主の最後の呟きは、  
注ぎ足された酒に溶けそうなほど、  
さわさわと小さ  
なものだった。

## 6 魂とさえ呼べぬ者

梅雨はとうに過ぎたというのに、ここ五日ばかりじめじめとした日が続いている。空は焚いた炭から立ち上ったように厚い雲に覆われ、一筋の光りすら差さない。

わたしの一番嫌いな天気だ。

金物のせいか、わたしはしつこい湿気をこの上なく嫌う。

嫌らしい湿気の染みついた屋敷の中では、五日にわたって怪異が続いていた。

所構わず水が漏るのである。

寝所に座敷、廁の果てまで天井からぼたりぼたりと水が漏る。

初日こそ桶で受ければ済むような漏れであったが、三日目の朝には壁全体に水が染みだし、障子の溝に目に見えるほど水が溜まった。

何より我慢ならないのは、この水が臭うことだった。腐った溝の腐臭がする。

はじめの内は雨漏りだなどといって、香気に器を置いてまわっていた若造も、ようやく四日目で異常に気付いたらしい。

「今朝起きて布団を仕舞おうと思ったのですが、開けてみると押し入れの中が水浸しなのです。心なしか畳も湿気りはじめたように思います」

主と陽炎の寝所も、同じような状態であった。

「水の気とは、あまりいい兆しじゃないねえ」

誰に向けるでもなく、主がいう。

それから二日経つても屋敷から水気が引くことはなく、とうとう五日目の朝を迎えた。

「悟様、この屋敷に妙な輩が紛れ込んだようでございます。始終お側にいることはできませんが、何かあればすぐに駆けつけますので、何かあってもお心を乱されませんように」

珍しく気難しい表情で語る主の言葉に、若造は微かに顎を引いて頷いた。

無駄に躡の良いこの若造が、いつものように返事を返さぬのは寝込んで布団から起き上がれずにいるからだ。

昨夜にはもう青白い顔をしていたが、今朝方いつまで経つても寝所から出てこない若造の様子を伺いにいった陽炎が、たった一晩で物言えぬほどに衰弱した阿呆を見つけた。

体調に支障をきたしたのは、若造だけではない。

これほどの怪異を引き起こす輩が紛れ込んだのなら、いち早く鳴いて主に知らせるはずのシマが、今回に限り一度も姿を見せていなかった。

屋敷に何者かが潜んでいるのは、異変からほどなくして主も気付いている。ならばシマが気づかぬ筈がない。

心配した陽炎が庭先で、好物の魚を焼いてもシマは姿を現さなかった。

今日の明け方、シマは庭の隅の小さな岩陰で見つけられた。

見つけたのは主であつた。

主の腕の中でだらりと四肢を弛緩させたシマは、それでも息だけはしていたが、まるで落ちる寸での線香花火のように心持たない息であつた。

「かわいそうに。猫は水気を嫌うから仕方ないが、それにしてもここまでとは。どうやら、とんでもない者が入り込んだらしいねえ」

主は一番乾いた座布団の上にシマを寝かせ、その世話を陽炎に頼むとふらりと庭にていった。

しばらく歩いたかと思うと座敷に戻り、部屋のあちらこちらを覗いてはまた庭へと戻っていく。

主は邪気の痕跡を追っているのだろうと、無い頭でわたしは考えた。

若造やシマが寝込んだのも、屋敷を覆うこの邪気に中つたせいだろう。

わたしでさえ、鈴の音の響きが悪い。

主といえども、この状態が長引けば只ではすむまい。

「最初に狙うなら、まずは弱った者だよねえ」

この五日間で、季節を無視して枯れてしまった庭の葉を摘んで主がいう。

「鈴も無理をしてはいけないよ。おまえが居なくなったら、わたしはとても困るのだから」

冷たい主の指先が、そつとわたしの身を撫でる。

わたしが居なくなったら、主は本当に困るだろうか？

いや、そのようなことは決してあるはずもない。

それでも主の言葉が嬉しくて、主の腰帯にぶら下がっていられることを、居るかも解らぬ神仏に感謝した。

わたしは己を奮い立たせた。

本当は生意気なシマのことなどどうでも良いし、若造にいたっては心配のシの字も浮かびはしない。

それでも奴らが助かる道を主が望むのなら、わたしは全力でそれを助けるのみ。

わたしは鈴。

主の為なら己の意思など、吹けば飛ぶ塵同然である。

チリチリン

濁った音で、わたしは精一杯身を鳴らした。

無理矢理にこの身を鳴らすと、不覚にも意識が飛びそうになる。

「おやまあ、なんて心強いこと。頼りにしているよ、鈴」

チーン

虚勢を張ってひと鳴りしてみせ、ふらつく身をぎしりと引き締めた。主の前で情けなく与太った姿など、絶対に見せてはならない。

それが鈴たるわたしの信条だ。

「カナ様、この屋敷でひとり夏を過ごすことになるなど、嫌でございますよ」

シマの背を撫でながら陽炎がいう。

「何とかしなけりやならないねえ」

答えた主が、乾いた音をたてて咳き込んだ。

陽炎はある意味で、我らとは違う時の中に存在している。生き物としての形に違いは無くとも、その質をまったく異にする。

だからこそこの屋敷で何が起ころうと、陽炎だけはひとり此処に残るだろう。

終わらない時の中にひとり残されることは、この世で陽炎が唯一恐れること。

「悟様も、あのままでは辛かろう」

枯れた庭を眺めながら思案に暮れる主の横で、ぼたりぼたりと水が落ちる。

「仕掛けるとしようか」

乾いた着物の用意を陽炎に頼み、主は屋敷の裏を流れる川へと足を向けた。

河原を歩きながら、主はわたしを腰帯からするりと抜いた。

草履をぬぎ、解かれた帯がはらりと落ちる。

無造作に着物を脱ぎ捨て、その下の襦袢が肩からするりと滑り落ちると、主の白い肌が露わになった。

「鈴、川の水に浸かるが、許しておくれよ」

わたしを手の中に握り、主はゆっくりと流れる川の中に足を浸す。

この川の中腹は、見た目よりずっと深くなっている。

水はすでに主の腰まで届いていた。川の中程で冷たい水に頭まで入った主の口元が何かを唱え、唇から漏れ出たそれは空気のアワとなつて川を流れては消えていく。

主の手の中で川の水に晒されるわたしは、あのじめじめとした臭い水の気が流されるような気がして、身が軽くなる思ひだった。

水嫌いのわたしは川の水に癒されるほど、この身にはじつとりと淀むものが染みついてきた。

水に潜っていた主が川から上がると、岸には陽炎によつて着物が用意され、脱ぎ捨てたものは綺麗に片づけられている。

己の身より先に手ぬぐいでわたしの水気を拭い取った主は、きちりと着物を着付ける

と、いつも通りにわたしを腰帯に据えた。

チリン　ヂリリン

まだ少し濁りの残る音だが、わたしは強くこの身を鳴らし主の背を押した。

屋敷に戻ると、主は敷地の要所に塩を盛った小皿を置いてまわった。

盛られた塩の間を繋ぐように、古木から削りだされた細い棒で、主にしか解らぬ言葉を書き記す。

墨で書くわけではないから、棒でなぞったあとには何も残ってはいない。

それでも確かにそこに書き記された、この世のものならぬ気を、わたしは確かに感じとった。

仮眠さえ取らずに棒を動かし続けた主が、ようやっと座敷に腰を落ち着かせた頃には、もうとつぷりと日が暮れていた。

灯された明かりに照らされる主の顔色は、あまり良いものには見えない。

「わたしが悟様のすぐ側にいたのでは、かえって害が及んでしまう。かといって、離れていれば、付け入られるだろうねえ。まったく厄介な」

そんな主の心を嘲笑うかのように、天井から壁を伝って水が一筋流れ落ちる。

壁を伝い落ちた水の筋は畳へと流れ、水が染みた跡が腐ったようにどす黒く色を変え

ていく。

「どうやら剣呑な雲行きになってきたようだ」

陽炎がシマを懐に抱き寄せ、弱音を吐かぬようにか唇をくつと噛みしめた。

ミヤ

陽炎に抱かれたシマが、震える首をもたげ短く鳴く。

主の目が、かっと見開かれた。

「間に合うか」

座敷を飛び出す主の腰帯で激しく揺れながら、闇に溶け込むおぞましい氣にわたしはふるりと身悶えた。

主が障子を開けると、蠟燭の灯りに照らし出された若造の寢所の中、少し開け放たれた押し入れのただけがやけに闇を帯びていた。

何も無いというのに、押し入れの襖がぎしぎしと音を立てて更に開く。

その奇異な音に、眠っていた若造がうつすらと目を開けた。

襖の奥から、闇がだらりと垂れ下がる。

ずるり

ぬるり

闇を染み込ませた筆でなぞるように、じわりじわりと影が這いでる。

見ることは叶わずとも怖気は感じたのであろう。若造が声のないまま僅かに唇を開いた。

苦しそうに目を見開き、音のする方をひしと見ている。

闇の模る影は徐々に人の形をなしていく。

長い髪をばさりと垂れた女であった。

まるでぬらぬらとした大蜥蜴が這うに似た様は、もはや人とはいえず、ただおぞましい。

女は襖の縁を伝って、頭から畳へと降りた。

濡れそぼった女の髪からは、喩えようの無い臭気が立ち上っている。

若造もその臭気を感じたのか、苦しそうに眉を顰める。

「それ以上、一歩たりとも動くことは許さぬ！」

若造の額を舐めんばかりに近寄っていた女が顔を上げた。

女の肌は黒ずみ、だらりと舌の垂れ下がる口元はだらしなく緩んでいる。

白目のない目玉は黒く、怨ずるような視線で主を見遣った。

ジズズジイイイ

舌が蠢き、漏れてきたのは声にもならぬ雑音だった。

「女であるどころか、もはや人でさええないか」

憐憫の情を欠片も含まぬ主の声が、怨嗟の籠もる客間の空気を斬る。

胸の前に手刀をかざした主の手首に、天井から垂れた黒い水が一滴落ちた。

シユウウウ

嫌な音を立て、主の白い手首の皮が爛れる。

一寸眉を顰めただけで、臆することなく主は女の方へと一步踏み出す。

長い髪を引き摺って、女がずりりと後退る

主の手刀が切られる度に、低い呻き声が上がった。

「カ……ナ……さん」

掠れた声は、若造のものであった。

若造の声が聞こえても、主は手刀を切り続ける。

「悟様、辻堂はあらゆる者が身を寄せる辻が上の屋敷にございます。どのような者であろうと欠片でも望みがあるなら手を貸すのがわたしの務め。ですが、この者はなりません。こうなってしまうては、もう救いようがないのでございます」

何か言いたげに震える若造の唇から、紡ぎだされる言葉はない。

「この姿を見て、この者が何の成れの果てかはつきりいたしました。この者の内に蠢くのは修羅にございます。片恨みしたうえの恨み死に。愠気に狂った女は、死してなお己の魂を焼くのでございますよ」

魂を失った者は、どれほど彷徨つても光りの差す方へと抜ける道はない。

放っておけば死してなお、他者を巻き込み傷つける。

「己が人であったことすら、もはや覚えてはおりませんまい」

主の頬に黒い水が垂れた、絹のような肌に一筋のただれを刻む。

「この辻堂で起きた数日間の怪異には、全て水が絡んでおりました。溝のように臭う水。この女、恠気に狂うて古井戸にでも落ちたのでございましょう。だとしても、生前に横恋慕を疑う娘を片端から殺しでもしなければ、この様な姿にはなりませんまい」

黒い髪が、ずるずると引いていく。

「此処から逃れたとて、いったい何処へいく」

黒い髪が退いた跡で、畳が泡立ち腐つていく。

「魂の朽ちたおまえに、逃れる場所などない。この方は、おまえの想つた者ではないぞ」

主が唇に指先を軽く添えた。

声なきまま、主の唇が言葉を宿す。

異臭を放つ女の頭が、もぎれそうにぶるぶると震える。

「お迎えだよ」

声なき言葉を飛ばすように、主は添えていた指先を女に向け息を吹きかける。

黒ずんだ女の指先が、激しく畳を掻きむしる。

若造は姿の見えぬ奇怪な音に、怯えたように目を瞑った。

ほの暗い押し入れの奥から、墨を垂らしたような闇が湧き上がり、のたうつ女の足を捕らえた。

仰け反る女の喉元が筋張って、ごぼごぼと音を鳴らす。

女を捕らえた闇は黒い霧となり、這つて逃れようとする女に絡みつき、あつというまにその身を呑み込んだ。

若造を掴もうと伸ばされた黒ずんだ手を、主の白い足袋が踏む。

「おまえのような畜生が触れられる方ではない。お行きー！」

女の体を巻き込んで、黒い霧がざつと引いた。

その様はまるで、打ち寄せた大波が引いていくようであった。

主の白い足袋が、ぼろぼろと朽ちていく。

朽ちた足袋に隠された小さな足の痛みを思つて、わたしは己の身が竦んだ。

全てが去り、押し入れの中を淡い蠟燭の灯りが照らす。

一步、二歩とよろめいた主が、崩れるようにその場に座り込んだ。

「畳を替えなくてはならにねえ。その前に、少しだけ休むとしようか」

主の半身がふわりと傾いで、まだ湿り気を残す畳の上に倒れ込む。

リリ　ヂヂーン

悲鳴にも似た音でわたしは鳴った。

聞きつけた陽炎が、客間である若造の寝所に飛び込んできた。

身が軋んで、これ以上はチンとも鳴れる気がしない。

若造は無事だし、愛想の無い馬鹿猫もすぐに体力を戻すだろう。

少しは主の助けになっただろうか。

わたしの意識は、ぱたりと闇に閉ざされた。

この日もわたしは庭を眺める主の腰帯に、いつものようにぶら下がっている。

陽炎の話では、主もわたしも三日三晩意識が戻らなかつたという。

「悟様が元氣になられる前に、この傷を何とかしなけりやいけないねえ」

主の顔と手首には、あの夜の傷が爛れとなつて、いまだ残つたままである。

足には白い布が巻かれているから、そちらもまだ癒えてはいないのだろう。

チリリン

「心配はいらないよ。こういう傷は跡形もなく治るから。鈴が綺麗な音で鳴るのを聞いて、陽炎がこしらえる着で盃を傾けていたなら、あつというまに治るさ」

チリチリン

主を励ますため、わたしは明るく鳴ってみせる。

「そうやって元気に鳴っていておくれ」

痛々しい傷を隠すことなく、主は優しいまなざしで微笑んだ。

枯れ果てたまま、すっかり夏の色合いを無くしてしまった庭をながめていた主は、ふいに腰を上げた。

「見てごらんよ」

白い指の先には、色褪せた葉に混ざって芽吹いた青々とした新芽がつままれている。

「こーやって繋がっていくのだから、命とは遅しいものだねえ」

庭石に腰をおろした主が、屋敷の奥にいる陽炎に声をかける。

「お酒と肴を用意しておくれよ。陽炎も一緒に呑もうじゃないか」

屋敷の奥から、陽炎の明るい返事が聞こえる。

しばらくして、魚を煮付けるいい匂いが漂ってきた。

庭の隅から小さな影がでてきたのを、わたしは見逃さない。

ミヤー

魚の匂いに釣られて、のこのこと姿を現したのはシマである。

恩の欠片もない視線を向けたかと思うと、ぷいと顔をそむけたくそつたれなシマをみて、もういつペン寝込めばいいと、わたしは心の中で本気で願った。



## 7 鈴の盗み聞き

主が目を覚ましてから更に三日が経ち、若造は飯を食いに座敷に顔を出すまでに回復した。

夕暮れ時、陽炎に付き添われて障子の向こうから顔をだした若造は、相変わらずの阿呆面であらへら笑いながら、迷惑をかけたことを詫び頭を下げた。

「お詫びしなければならぬのは、こちらの方にございます」

そういつて主は三つ指をつき頭を下げたが、その理由に頭が回らないのか若造は、不思議そうに首を傾げただけだった。

正直なところわたしは驚いた。

これほど早くに若造が、自力で歩けるようになるとは思っていなかった。

わたしやシマでさえ尋常ではない不調に見舞われたというのに、生身の若造がこの程度で済むなど奇跡である。

そういえば、遠い日に野坊主が言っていた。

——辻堂の大家は、人にして人にあらず。己の命でありながら、己の為の命を持たぬのが辻堂の大家様と呼ばれる者。外から眺めればなんと尊く、そのために産まれた者に

すれば、なんと忌まわしい血であろうか。

いまだにそれが意味する、本当のところは解らない。

先代は俠気な御仁で、己の苦悩を表には決して出さぬ方であったから、鈴ごときにそのお心を読むことはできなかつた。

若造はといえば、本当に先代の息子なのか疑うほどに、臆病者のへつぴり腰ときいてる。

毎日へらへらしているから、何を考えているかなど解るはずもない。

野坊主が尊く忌まわしいという血が、あの阿呆面の裏で影を落としているのだろうか。

だとしたら、若造はいま辛いのだろうか。

やめよう。

役立たずの小僧のことなど、どうでも良いことだ。

長い時を生きてきたというのに、これだけがわたしの悪い癖。

薄情なシマと違い、わたしは情に厚い。

唯一、わたしの欠点といえよう。

出された夕餉に形だけ箸を付け、若造はすぐに寢所へと戻っていく。

足元がふらつく様子を心配した陽炎が、細腕を差し伸べ寢所まで付き添った。

「いくら呑気な悟様でも、今度ばかりは嫌気がさたかねえ」  
手酌の酒を舐めながら主がいう。

主の顔にあつた爛れはすっかり消え、足に巻かれていた布も今はない。

主は誰かの為に負つた傷がどれほど深くても、痛いといつたことがない。

辛いといつたことがない。

だからわたしは主の肌から傷跡が消えても、主が負つた無数の傷跡を思い出すたびにこの身が痛む。

主に聞こえぬよう、痛いと鳴る。

主の代わりに、幾度でも涙の音を流す。

ミヤー ミヤ

庭に置かれた岩の上でシマが鳴く。

「野坊主か。どうやら、わたしに用ではなさそうだねえ」

唇を盃に押し当て、主は小さく息を吐く。

リーン

「放つておこうよ。こんな綺麗な月を見ないなんて、もつたないじゃないか」

わたしは諦めて、大人しく鳴るのを止めた。

半分ほど欠けた月が、夜空に浮かぶ雲をうつつすらと照らしだしている。

確かに美しい。

あの若造の為に見逃すには、惜しい月である。

だが先にもいった通り、わたしは情に厚い。

主の腰帯にぶら下がっていても、廊下を曲がった先にある客間は目に入る。

暑い空気を逃すためか、障子は開け放たれていた。

そして人では無いわたしの耳は、屋敷内の音であるなら聞き逃しはしない。

通りすがりの風と同じである。

本来無いはずの目と耳に、勝手に入ってきた部屋の様子と声など、わたしは気にしない。知ったことではない。

ぼんやりと天井を眺めていた、若造の肩がびくりと跳ね上がる。

突如襲った空間の揺れに驚いたものの、すぐに平静を取り戻したのは、部屋に満ちた気配に覚えがあったからであろう。

ゆっくりと首を巡らせ、若造は己の横でいつもと変わらぬ姿を晒す壁に目をやった。

若造の目に映らぬが、壁は座した男の姿を模りぬつと前に突きだしていた。

その姿を克明に写し、平面であるはずの壁が微細な凹凸をなしている。

「体の加減はどうだ」

野太い男の声が響く。

「やはり野坊主さんでしたか」

安堵したように、若造は弱く微笑んだ。

「まだ力が入りませんが、気分は良くなりました。あの時何があったのか、はつきりとはわからないのです」

「邪気に精気を吸われたのだよ」

朧な記憶を辿るように、若造の目は遠くを見る。

「日々体から力が抜け落ちて、あの日も朦朧としていました。ただ、カナさんが飛び込んできてから、この部屋の中で感じたのです」

「何をだ？」

若造は姿の見えぬ野坊主の方へと、気配だけを頼りに顔を向ける。

「痛み、とでもいいでしょうか。全身を貫く辛い感覚を、誰かが感じていたのではないかと、そう思えてならないのです」

「だとして、それが何か問題か？」

壁に横られた野坊主の眼がすつと細められ、横たわる若造を静かに見下ろす。

「あの時、誰も口にはしていないのです。痛いといわなかったのです。苦しいと、いわなかったのです」

野坊主は微動だにせず、言葉の先を待った。

「それは体の傷の痛みより、辛いと思うのです」

客間に沈黙がおり、さわりと吹き込む風に蠟燭の灯が揺れる。

「この屋敷に来る前からそうだったのか？ 人の心の苦しみや体の痛みを、感じながら生きてきたと？」

まるで当たり前の事だともいうように、若造は表情なく頷いた。

「近くに居るのが複数であれば、それが誰の想いなのかまでは解りませんが。強烈な感情でなければ、それらを感じることもありません」

「辛かったか？」

「すぐ手が届く所で、泣き出しそうに苦しんでいる人が居るのに、何もできないのは楽しいことではないですよ」

そうか、と野坊主の唇が僅かに動く。

「ただ一人、何も感じ取れない人がいました」

「誰だ？」

「父です。だからぼくには父が理解できない。もともと口数の少ない人で、自分の事を語ることはほとんどありませんでした」

「先代を責めるな。それは、互いの中を流れる濃い血の繋がりがそうさせたこと」

若造は布団の上でゆっくりと半身を起こした。まだ節々が痛むのか、支える腕に顔を擧める。

「同じ血が流れていても、兄弟の感情は少しだけ解るときがありました。まあ、この屋敷をぼくに押しつけられると思ったときに兄弟が、厄介払いができると思っていると喜んでいたのは、表情を見ただけでわかりましたけれどね」

若造が寂しげに微笑む。

「辻堂へ来たことを、後悔しているのか？」

「いいえ、ぼくはもう少しこの屋敷に留まるつもりです」

野坊主の首が、訝しげに傾ぐ。

「このような目にあつても、ここを立ち去らぬと？」

若造は、何も見えぬはずの壁に真つ直ぐに向き直る。

「ぼくはここに住む人達が好きです。カナさん、陽炎さんやシマも。今は枯れてしまいました、この庭も好きです。それに、カナさんが帯に付けている鈴の音も好きなのです」

落とすように微笑む若造の影が橙色した蠟燭の灯りに揺れる様は、日の下の陽炎を見るより儚かった。

「捨て置けないのです。この屋敷で辛い思いをしている人が居るなら、放つてはおけな

「いのです」

野坊主の姿が、少しずつ壁に吞まれていく。

「やはりおまえは、先代の子だ」

不思議そうな表情で若造は目をしばたく。

「兄弟が何人いようと、おまえにだけ先代の血が色濃く流れているのだよ」

「あまり嬉しくありません」

能面のような顔と膝だけが壁に取り残されている、野坊主の口の片端が上がる。

「己の道と見定めて進むなら良い。だが、その優しさに身を滅ぼすなよ」

「野坊主さん？」

「考えるな、今は休め」

「あの……」

野坊主の姿が、完全に壁の向こうへと消えた。

待つても返ってこない返事に、若造は息を吐く。

「まったく、突然に現れて、何もいわずに居なくなってしまうのだから」

若造は軋む体に眉を顰め、何とか体を横たえる。

「ここに居たからといって、ぼくに何ができるだろう」

目を閉じた若造の横顔に、先代の面影が重なる。

いや、そんな筈はない。そのようなこと先代に失礼である。

——カナさんが帯に付けている鈴の音も好きなのです。

このような事をいうなど、抜け作には百年早い。

生意気だ。

チン チリン

「鈴、なにか嬉しいことでもあつたのかい？」

主の声に、わたしははっとして我に返つた。

わたしは今、鳴つたのであろうか。

「楽しそうだねえ。どうしたというんだい？」

いいや、主の思い違いである。断じてわたしは鳴つてなどいない。

リーン

ひと鳴りして、わたしは主人に抗議した。

## 8 子を想うも 待ち人を想うも女なり

厚い雲が月を覆う夜、屋敷に灯された蠟燭が短くなり始めたころであつた。

ミヤー

月明かりの差さぬ障子の向こうで、シマの鳴き声が響く。

蠟燭の灯りを眺めながら畳に身を横たえていた主が、その泣き声に身を起こした。

「お客さんかい？」

蠟燭を片手に障子を開けた主は、手に持つ燭台をかざして庭を照らし、それから息を呑んだ。

揺れる灯りにぼんやりと浮かんだ姿は、主でさえ言葉を失うほどに、醜怪な容貌の女であつた。

結び上げた丸鬚はほつれ、腫れ上がって塞がった目の片方だけが薄く開いてる。

人ものとは思えぬほどに、紫に腫れ上がった唇は膿んで血を流していた。

「道が見つかりませぬ。どうぞ、お助け下さいまし」

細い琴音を思わせる声が、夜風に冷えた闇に響く。

「何を探しておられるのか？」

塞がった女の目がびくりと瞬く。

「赤子、手放してしまつた赤子を捜しております」

言葉が漏れるたび、口の端から血が溢れる。

「その赤子のごとで、己を責めておられのだねえ」

「愚かな母でございます」

骨のように細い指先が震えている。

主はゆつくりと庭に下り、数歩女に近寄つた。

「見たところ、裕福なお店のお内儀かと。なぜそのような姿になられたのか」

女の着物からは水が滴り、華美ではないが品の良い鼠色の地に紅葉をあしらつた着物は、濁流に流された跡のようにぼろぼろだった。

「商家に嫁ぎ、何一苦勞のない毎日を送つておりました。ですが大火で何もかもを失いました。零落して慣れない長屋暮らしに身を落としました女の、慣れの果てにございます」  
眉ひとつ動かすことなく、主は女の話に耳を傾ける。

「旦那様も奉公人も、全て炎がああ世へ持つていつてしまいました。同じ町内にあつた実家も焼かれ、残されたのはこの身ひとつと、腹に宿る赤子の命」

腫れ上がった瞼の隙間から涙が零れる様は、突き出た岩の割れ目から染み出る湧き水を見るようであつた。

「子を産んだものの手に職もなく、およそ働くなどということをしたことのない商家の娘として育ちましたから、その日の暮らしもままなりません」

女の指が、薄い腹の上を静かに這う。

「この身が細る一方では、乳さえ満足にできませんでした。泣く子を抱えて川の縁で蹲っていたとき、見知らぬ男が声をかけてまいりました。手に余るなら、赤子を引き取るということです。子供のできぬ大店の夫婦のために、内密で子を探しているのだと男はいいました」

「金子を積んで子供を買うなど、時代が時代なら良くあることだ。子のためにも、恥じた選択では無いと思うがねえ」

主の声が静かに庭に流れる。

主の言葉に女は激しく首を振る。

「腹を空かせて泣く赤子を腕に抱き、悪いようにはしないという男の言葉は、仏の差し伸べた救いの手に思えたのでございます」

消え入りそうなほどに俯いた、女の表情を伺うことはできなかつた。

「坊やを手放したくはなかつた。でもこのまま共倒れになるよりはと、そう思ったのでございます。たとえこの手で育てられなくても、坊やの命を繋ぎたかつた」

俯いた女の顎から、雫がぽたりぽたりと落ちては乾いた土に吸われていく。

「赤ん坊を、男に託したのだね？」

主の言葉に女は小さく頷いた。

「坊やを腕に抱いた男は、疾風のごとく去って行きました。今生の別れにもう一度だけ、坊やの頬を撫でることさえ叶わなかった。それから三日の大雨が続き、抜け殻となつていたわたしは雨の止んだ夜に、坊やを手放した川の縁へとまいりました。あの場所にいけば、坊やの香りが残っているような気がしたのでございます。ですが闇に紛れて流れてきたのは坊やの甘い香りではなく、聞き覚えのある男の声でございました」

顔を上げわなわなと震える唇は、今から語ることが目の前で起こるのではないかと、そんな錯覚を覚えるほどに鬼気迫るものだった。

「声は近くにある橋の袂から聞こえておりました。坊やの無事を確かめようと駆けだしたわたしは、はつきりと聞き取れるほどまで近づいた男の話に、その場に竦んでしまいました。男のほかに、聞き覚えのない声の年配の男がおりました。嘎れた声の男です。大雨の後で荒れ狂う川の流れに紛れて聞こえるの言葉の一つ一つが、刃となつてわたしの心を切り刻んだのでございます」

女の口元で、血と涙が入り交じる。

高値で買い取るといったのに、せつかく見繕ったガキを、気に入らなねえと抜かしや

がった。

——ほかに売りやあいいいじゃねえか。

それまで誰が面倒をみんだよ？ 泣いてばっかりで煩くてかなわねえ。

——それで、赤ん坊はどうした？

捨てたさ。この大雨のあとじゃ、色んなもんが流れてら。そこに赤ん坊が一人混じつたくらい、わかりやしねえよ。

「目の前が真つ暗になりました。大切な坊やの命を預けた相手が、どのような輩であったか、この時に知ったのでございます。目の前を濁流が流れておりました。この黒く冷たい流れの中に坊やがいるかと思うと、何も考えられなかった」

「身を投げたのかい？」

主の声が低く響く。

「己の命を捨てようとしたわけではございません。あの濁流の中、坊やを捜そうとしたのでございます。愚かな母でございましょう」

「その姿、己を責め抜いた証であろうよ」

「責め抜かずになどおられましようか」

寸の間、主は辛そうに目を閉じた。

開かれた眼差しには、優しい色が宿っていた。

「わたしはね、あなたは十分に母であつたと思うのだよ」

主の言葉に、女は嗚咽を漏らした。

「お客さんですか？」

声に目を覚ました若造が、寝所からのんびりと顔をだす。

「悟様を起こしてしまいましたねえ。今宵ここに居るのは、赤子を捜す母親でござい  
ます」

若造に女の姿は見えないから、のんびりした調子で主の言葉に頷いている。

「この先もまだ、坊やを捜すのかい？」

主の声に、女ははつきりと頷いた。

「坊やが愛しくてなりません。寒かつたであろうと、この胸に抱いてやりたいたのでござ  
います」

「とてもお優しい声ですね」

若造がいうと、驚いたように女は顔を上げた。

「声だけを褒めるなんて失礼でしょうか？ ぼくにはあなたの方が姿が見えないから。」

思うのですよ、この様に優しいお母さんの声を聞いたら、赤ちゃんは嬉しいだろうな  
と」

「何処にも居ないのでございます。どれほど捜しても見つかりません」

若造が不思議そうに小首を傾げた。

「赤ん坊とは無垢なものです。仏様の元に招かれたに決まっているのでは？」

女の晴れ上がった臉が動く。

「そうであるなら、どんなに嬉しいことでもございましょう。でも仏様の元では、わたしはもう坊やに会うことは叶いません。罪深い母親を、御仏はお許しにはならないでしょう」

女の言葉に、若造は明るく笑う。

「赤ちゃんがお母さんを恋しがっているのに、それを許さない御仏などいるものですか。赤ちゃんが心穏やかに過ごしていると思えば、見えてくる道も違うのではありませんか？」

若造の言葉に、女はそつと己の背後に広がる闇を振り返った。

細い肩を巡らせ、己の通つてきた闇へと向き直る。

ああ、女が息を漏らした。

「蛍のように、ゆらゆらと漂う淡い光が。ああ、懐かしい坊やの香りがする」

女はそつと、己の乳房に手を当てた。

「坊やの香りに乳が張つてきたのだろうか？ さあ、お行きなさい。坊やが待っているよ」

背を向けた女が、何も無い闇に向かつて一步、また一步と歩いて行く。

「きつと、お美しいお母さんなのでしようね」

女の姿が見えぬ若造が、呑気なことを口にした。

「ありがとうございました」

闇に紛れてはまた姿を現す女が、僅かに振り返つて会釈した。

闇に溶けていく女の背を守るように、薄緑に光る蛍のような灯りがゆらゆらと舞つていた。

最後に振り返つた女の姿はきちりと鬚を結び上げ、大きく丸い目を細めて微笑む、美しい母の姿であつた。

すっかり元気になつた若造は、こまごまと屋敷の雑事をこなす陽炎の後について回つては、あれやこれやを手伝つている。

はじめこそ遠慮しておろしていた陽炎であつたが、今では諦めたのか若造を上手く使い回しているのだから、なかなかのものである。

男子厨房に入るべからずなどという言葉は、今では骨董品の部類に入るのだろうか。

若造がすることに口を出さない主は、まるで兄弟のように楽しんで働く二人の姿を、

目を細めて眺めておられた。

ここ数日の辻堂は平穩に包まれている。

時折迷い込む子鬼はいたが、まるで自分の役目といわんばかりにしやしやりでる若造が相手をしてやり、夜が更けきる前には幼子らしい表情を取り戻して、みな己の行くべき場所へと去って行った。

「まさか瓦版が一回ついているわけでもないだろうに、やけに子鬼が集まってくるようになったものだねえ」

そういつて主は笑っておられた。

以前にも子鬼が迷い込むことはあつたが、これほど数が増えたことなどなかった。

どうやら主が美しく優しい笑みで諭すより、若造の阿呆面のほうが子鬼達の好みであるらしい。

今日も夕暮れ間近に現れた三人の子鬼に振り回され、日が暮れきった頃にはよれよれの手ぬぐいみたいな様で、若造は廊下で大の字に転がっていた。

「お疲れですか？」

半身を起こした若造の手に盃を持たせ、とくりとくりと主が酒を注ぐ。

「まだまだ若いつもりなのですが、子供にはかかせません」

頭を掻きながら若造がいう。

「悟様にしかできないことでございます。わたしはあの子らを諭して慰めることしかできませんが、悟様は違う。少ない時間で、子鬼らは生の喜びを知って去って行くのです。良き大人もいるのだと、この様に楽しいことがあるのなら、もう一度だけ産まれてみようかと、希望を心に抱いてここを後にするのですから」

「そのようなたいそうな事では。見ての通り、ぼくなど子鬼達に振り回されて、逆に遊ばれているような有様です」

謙遜ではなく本気でそう言い放つ若造を、主は温かく見つめている。

「悟様、もうすぐ夕の善が並びますが、今宵はひとつだけ、いつもよりお膳の数がおおぐざいます。ですが気になさらず召し上がってくださいませ」

そこへちやうど陽炎が、湯気の立つ鉢を盆にのせて運んできた。

並べられた膳はいつもよりひとつだけ多い。

主と若造の分の他に、もう一つの膳が据えられる。

「お客様ですか？」

「いいえ、陰膳にございます。いつ戻るかわからぬ者を待ち、その者の膳を用意するのは、わたしの我が儘にございます」

膳に並べられていく料理を見ながら、若造は頷いた。

「カナさんを待たせる人などいるのですね」

主は袖で口元を隠してくすくすと笑う。

「待たされている訳ではございません。わたしが勝手に待つているのでございます。こんな女にも、影さえ忘れられぬほどに、大切に想う者がいるのでございますよ」

若造は軽々しい己の言葉を悔やむようにすみません、と小さくいった。

「謝らないでくださいな。気にするようなことではございません。これは年に一度の風物詩、そんな風に思つて下さいませ」

察するところがあつたのか、若造は食べ終わると早々に自分の寢所へ戻つていった。

己の前に据えた陰膳に差す月の明かりを、ぼんやりと眺めながら主は手酌で酒を呑む。

「何処にいらつしやるのやら。今宵はわたしの酌に、付き合つて下さいな」

そういつて主は、膳の隅に置かれた盃に酒を注いだ。

その盃に口を付ける者はいない。

一晚では呑みきれぬほどの酒を置いて、陽炎もどこかへ姿を消した。

月明かりが照らす中、主はぼつりぼつりとひとり語る。

前に陰膳を据えてから一年。その間にあつたことを、時にひとり微笑みながら、つらつらと語つていく。

それに答える者は、この屋敷には居はしない。

終夜を通して相づちを打ったのは、庭でチリチリとなく虫の音だけであった。

## 9 その身を 想いを守る者

遠くの山脈にかかった雲が茜に染まり、その手前を綿を丸めたような雲がふんわりと漂う庭で、主は変わりゆく空の色を眺めていた。

「ねえ鈴、あの雲の下には何があるのだろうかねえ。季節の花が、小さく咲いたりしたら素敵だろうに」

チリン

ひと鳴りして答えたわたしは、主の心を思つて無い歯を食いしばる。

主は時折、空を流れる雲を指差しては、その下に広がっているであろう景色を楽しそうに想像する。

どれほど時が流れようと、決して叶うことのない主の願い。

あの雲の下にある景色を見る、ただそれだけのことが主には叶わぬ夢である。

この辻堂で過ごす決めた日から、主はこの屋敷に捕らわれている。

この屋敷の表をはしる土埃のたつ道と、裏を流れる川以外、主が行ける場所などどこにもない。

鳴ることしかできぬ己の身を、幾度呪つても飽きたらぬ。

「カナ様、夕の善の用意が整いました。少し早いですが、夕焼けを眺めながらお食べになつてはいかがでしょう」

陽炎が主の少し後ろで膝をつき、愛らしい笑顔でいう。

座敷では陽炎を手伝つて膳を運ぶ若造が、せつせと走り回っていた。

そんな若造の周りを、毛むくじやらの黒い物体が飛び跳ね纏わり付いている。

主も陽炎も気にはしていないから邪気のある者ではないのだろうが、女の細腕ほどの太さがあるそいつは、まるで太った短い蛇に黒い毛を生やしたようにしか見えなかつた。

目鼻があるのかさえ、ぼさぼさと生えた毛のせいで見えたものではない。

「そうしようかねえ」

紅を薄くひいた唇で微笑み、主は座敷へと上がっていく。

「おや今夜は魚の煮付けだね。美味しそうだこと」

「悟様が裏の川で釣つてくださったのですよ。お陰様で献立に迷わずにすみました」

「まあ、悟様が？ 何という魚だい？」

ぶつ切りにされた魚の、もはや形など解らぬ皿の中を覗きながら主がいう。

「それが、何という魚なのかさっぱり」

「恥ずかしそうに若造が頭を搔く。」

得体の知れない魚を主に食させるなど、気は確かか？

リーン

我慢できずに、わたしは盛大に鳴ってやった。

「大丈夫だよ鈴、この辺りの川に毒を持った魚などいやしない」

くすくすと笑う主の横顔に、ひとり溜息を吐く。

「それにね、あの黒い毛の子は、川で魚に喰われかけていたのを、悟様に助けられたらしいよ。魚の口に啜えられていた時には、小指ほどの大きさしかなかったらしいが、あれがあの子本来の大きさなのかねえ」

主は若造のすることに寛容すぎる。

「見てごらんよ。まるで親鳥のあと追いかける、ひよこみたいだよ？」

訳のわからぬ輩まで勝手に連れ込むなど、決して許してはならぬ。

尻の青い若造など、きつく躡けるのが一番であるというのに。

だが楽しそうに笑う主を見てしまうと、それ以上何もいえなくなる。

若造が来てから、主は良く笑うようになった。

だから、生意気な若造の失態は見逃そうかと思う。

主が一時でも笑ってくれるなら、それでいいと思えてしまった。

なんとも愚かな鈴である。

ミヤー

庭の隅でシマが鳴く。

夕の善が下げられようとしている頃合いであった。

「シマ、お客さんかい？」

庭はすっかり闇に閉ざされている。主は燭台を手に、素足に草履を引っかけて庭へと降りた。

蠟燭の灯りをかざしても、なかなか姿の見えぬことに首を傾げながら、主が座敷に戻ろうとしたときであった。

「ここが辻堂で？」

暖れた女の声は、庭の闇から湧く霧のように、わたしには薄気味悪いものだった。

「そうだよ、ここが辻堂。自力で辿り着いたのかい？」

主は庭の闇へと向き直る。

「いいえ、闇を彷徨う声に、導かれてまいりました」

暗がりから浮かび上がったのは、薄くなった白髪を結び上げた初老の女であった。化粧気のない顔には年相応の皺が刻まれ、目の横には濃い染みが浮いている。

肉が落ちて頬の瘦けた顔で、女はにたりと笑う。

「どのような用でしよう？」

穏やかな笑みのまま、主の草履は一步後退る。

「あたしは吉原の置屋の主人でございました。どつぷり頭のとつぺんまで吉原の水に浸かったあたしが言うのも何ですが、吉原とはおなごの血で明かりが灯る場所でございます。おなごの涙を油代わりに血が吉原の街道を照らし、一夜限りの夢をつくりあげるのでございます」

「恨まれたことも、一度や二度ではありますまい？」

主の問いに初老の女は、けけけつ、と喉を詰まらせた嫌な笑い声を上げる。

「それはもう。買った恨みを晴らさせてやろうと、短刀でも持たせたなら、この身を幾つぼろ雑巾にされたって足りやしませでしようよ」

だから、と初老の女は噎れた声で言葉が続けた。

「彷徨うばかりで、何も無い闇から抜け出せずにおりました。あたしを恨みながら穴に放り込まれて死んでいった女達の魂が、あたしを惑わせているんでござんしようかね」  
主の草履が、また一步後退る。

いつの間にやら姿をみせたシマが、主の傍らで珍しく灰色の毛を逆立てていた。

客の姿が見えぬ若造でさえ声から何かを感じ取ったのか、眉根を寄せて主の近くに身を寄せた。

得体の知れない黒い毛むくじやらも、若造の足元にぴたりと寄り添う。

「それで、わたしにどうしろと？」

長く主と共に過ごしてきたわたしには解る。この女は闇を彷徨う定めで、この先何処へ行くことも叶わない。浮き世で背負った女の業は、それほどまでに重い。

「いえね、ひとりぼっちで彷徨う闇の中、囁く声がしたんですよ。辻堂の主の望みを叶えてやれと。探し人がおいでだろう？」

なんと卑怯な。主が死ぬほど知りたい御方の行方と、何を引き替えにするつもりなのか。

主は女の言葉に眉を動かしたが、それはわたしにしか解らぬほど些細なものだった。女が張りのない頬を歪めて、にやりと笑う。

「あたしはね、ただあの闇から抜ける道が知りたいだけですよ。先も後もない闇など、この身が闇に溶けて朽ちたように思えてがまんならない」

だからさあ

「教えておくれでないかい？ 畜生道を生きた女が、闇から抜け出す道をさあ」

檜の板張りの廊下に足を押しつけるほどに、主はその身を引いていた。

それでも背を張って姿勢を正した主は、真つ直ぐに女を見据える。

「この辻堂の主になると決めた日から、わたしは抜けられぬ理に縛られて生きていてねえ。この身と引き替えに得たい答えであつても、手を出すわけにはいかないのさ。救

いようがないほど腐りきった魂が差し伸べる手を取るほどまでに落ちたら、

辻堂の主人は務まらないんでねえ」

けっ、と女が唾を吐く。

「おまえを取りまく闇は、生きた道を振り返らせる為の闇。その意味を解らずに迷うだけの者に、先へ進む道など最初からありはしない」

主の言葉に迷いはない。

女の言葉に、手の届くところにぶら下がる答えに、主の心は散り散りであろうに。破れた心のことなど、欠片も滲ませずに主は凜と立つ。

「なら仕方ない。一緒に逝つてもらおうか！」

きいええええ

声に鳴らない音を喉から絞り、女が主へと襲いかかった。

手には短刀が握られている。

何処から手に入れたというのだ、主の魂さえ葬り去るあの短刀を。

「カナ様！」

駆け寄ろうとした陽炎だが、間に合うはずもない。

身をよじらせた主の腰帯で、わたしの身は激しく揺れた。

ドス

重く嫌な音が、闇に包まれた庭に響く。

この身を鳴らすことさえできずに、わたしは震えていた。

主の魂が霧となつて霧散するのを見るなど、耐えられるものではなかつた。

「カナさん……だいたいじょうぶ？」

わたしは我が目を疑つた。

主と女の間にも身を滑らせ、廊下に仰向けに倒れた主に覆い被さるやうに、震える腕で己の体を支えているのは若造であつた。

「おのれ！」

女が短刀を引き抜くと、若造はげほりと血の塊を吐いた。

主のすぐ脇に吐き出された血が、板の目を伝つて庭の土へと流れ落ちる。

「悟様！」

主の悲鳴にも似た叫びが、わたしの身を震わせる。

「逝けえ〜!!」

狂気の叫びと共に短刀を振りかざした女の動きが止まる。

振りかざした腕をそのままに、黒い塊にやせ細つた身を巻かれていた。

「何だ！ 離せ！ 離さぬか！」

髪を振り乱す女を絡め取るそれは、太く長い体に黒く長い毛を纏い、短い手足が胴体

の中途に申し訳程度についていた。

その長い胴の上にあるのは、まるで精悍な眼を持つ黒い狐であった。

「悟様！ 何をなさっているのですか？ 早くお体を横に！」

主に覆い被さる形で耐える、若造の腕ががくがくと震える。

女が短刀を刺したはずの場所には、浴衣の生地に裂けた跡さえなかった。

一滴の血さえ滲んではない。

だというのに、若造の口の端からはいまだ血がぼたりぼたりと流れ、顎を伝って主の着物を染めていた。

「カナさんが……言ったものではありませんか」

「わたしが何をいったのです？」

「たとえ……着物の袖、髪の毛……先であっても……決して触れてはくれるなど」

はっとした表情で己の口元を両の手で押さえた主は、するりと若造の下から身を滑らせ抜けて出た。

若造の表情が、安堵の色に緩む。

震える腕から力が抜け落ち、丸太を落とすように若造の体が檜の板張りの上に崩れて落ちた。

主が鋭い眼光を女に向ける。

「わたしの怒りを買わぬうちに、ここから立ち去るがいい」  
押さえた主の聲が闇に流れる。

女の最後の叫び声の意味を、聞き取ることはできなかった。

黒い生き物が、女を巻き込み闇の向こうへザツと音をたてて姿を消した。

「悟様！　悟様！」

庭土に崩れて顔を覆う主の腰帯で、わたしは無力に揺れていた。

女手ひとつでどうしたものかと慌てる陽炎を、優しい力で押さえる者が居た。

女を闇へ引き込んだ黒い生き物が庭へと戻り、若造を見下ろしている。

「悟様を好いているのだね？　お願いしてもいいだろうか、寝所まで悟様を運んでおくれ」

主の声は消え入りそうに細かった。

物言わぬ黒い生き物は鋭い牙の生えそろう口を開けると、脱力した若造を啜え寝所へと飛んで行く。

お湯と薬草を揃えに、陽炎が屋敷を走る。

若造を刺した短刀は、主の魂を霧散させるが人の体を刻むことは叶わない。

だが若造は血の塊を吐いていた。

刺さるはずのない短刀に、体が反応していた。

——辻堂の大家は、人にあつて人にあらず。

野坊主の言葉が頭を過ぎる。

主が寝所にお湯を張つたたらいを持って行くと黒い巨体は姿を消し、昼間から若造のあとをついて回つていた、黒い毛むくじやらが枕の横でそわそわと身を揺らしていた。

チリ チリン

心配して音を鳴らすなど、この阿呆に勿体ないが今宵は良いだろう。

若造が元氣にならねば、主が悲しむ。

それだけは嫌だった。

だから今宵だけ、わたしは若造を励まし続けようと思う。

命まで持つて行かれることはないだろう。

額に汗の玉を浮かばせる若造が、またへらへらと笑える日がくるだろうか。

チン チリン

阿呆の為ではない。

あくまで主の為に、わたしはこの身を鳴らし続けた。

## 10 黒いけむくじやらの家出

昼間から涼しい風が吹いている。

若造が倒れてから、三日が過ぎた。

倒れてから丸二日、若造は朦朧とした意識の中、臓腑を襲う痛みにも額の汗がひくことはなかった。

それがどうしたわけか今朝になってぱちりと目を覚まし、よろよると半身を起こしたのである。

寝食を忘れ側に付き添っていた主は、細い肩の力を抜き目尻を涙に光らせた。

「ぼくは、いったい……」

目を覚ました若造は、ほんの数時間ほど寝ただけと思つたらしい。

「悟様、痛む所はございませんか？」

主の言葉に、若造は微笑んで首を振る。

「不思議なほど痛みがひきました。咳き込むと胸は多少痛みますが、大したことはありませんよ」

阿呆面の笑みを見て、ほっとした自分に猛烈な怒りを覚える。

手があつたなら、己の頭を打ち砕くところだ。

「クロ助が見たこともない薬草を、何処からか持つてきてくれたのです。それを煎じて悟様の口に少量ずつ流し入れたのでございますよ。その煎じ薬のおかげで、これほど早く元気になられたのですね」

自力で飲めそうだと判断した陽炎が、煎じ薬を湯呑みにいれながらいう。

それにしてもクロ助？ いつの間にそんな名が付けられたやら。

若造の膝の上で跳ねる黒い毛むくじやは、自分の手柄を誇示しているつもりだろうか。

「クロ助が薬草を持つてきたの？」

目を丸くして若造が、黒い毛むくじやらを手に乗せる。

「ありがたいな」

毛むくじやはくねりと身を振らせ、ぴよんぴよんと跳ねて行灯の向こうに身を隠した。

一丁前に照れているのか？ 生意気な。

「いただきます」

陽炎から湯呑みを受け取った若造は、黄金色の煎じ薬を一口含み、これ以上無いほどに目を見開く。

「辛い！ 苦くて辛いのですね、げほ」

涙目で噎せ返る若造の様子をみて、目を細めながら主が笑う。

美しい主の表情に、三日ぶりの笑顔が戻った。

ただこれだけのことで、わたしはこの身が錆びるまで涙を流せそうないだ。

「おや、この赤い点は？」

若造の足を覆う布団の表布に、小さな赤い染みがあった。

主が行灯の方へ視線を流す。

「まだ完全に傷が癒えていないのですねえ。悟様、クロ助は煎じ薬に使う薬草を手に入れるため、少々無理をしたのでございますよ」

「クロ助が？」

そうだった。薬草を口に咥えて屋敷に戻った黒い毛むくじやは、全身を覆う黒く長い毛の先から、赤い血を滴らせていた。

毛の奥にあるはずの傷は見えなかったが、あの血の量からして浅くはない傷を負ったのであろうと思う。

「クロ助が咥えてきた薬草は、立ち枯れ草と呼ばれるものです。文字通り、立ち枯れたまま生えているのでございます。この屋敷の庭ほどの広さに群生しておりますが、その内も外も茨が守っております。毒こそありませんが、人の肌など簡単に引き裂くほど鋭利

な棘にございます。その茨をくぐって取ってきたのでしようから、全身に傷を負うのは避けられません」

「クロ助、出ておいで?」

悪戯をした子供が頭を覗かせるように、黒い毛むくじやはちよつとだけ頭を出し、それから畳を這うようにもぞもぞと若造の側へとやってきた。

若造が黒い毛むくじやらを手に抱き、長い毛を分けてその下の体を確かめる。

「傷だらけじゃないか!」

若造は眉を寄せる。逃げようとばたつく黒い毛むくじやらを押さえ、無い頭を巡らせた。

「陽炎さん、これほど効く煎じ薬なら、薬湯がわりにクロ助を浸けてみたらどうでしょう。傷が早く治るかも」

真顔で言う若造を、陽炎が慌てて止める。

「それはいけません。辛いということは、傷に滲みるということでございます。薬湯にするのは、まずいのです?」

そうか、と若造は残念そうに眉尻を落とす。もちろん黒い毛むくじやらを、しっかりと手に捕まえたまま。

「それではこの煎じ薬を、クロ助にも飲ませてみましょう。これほどの効き目なら、飲んで

でも傷に効果があるかもしれない！ クロ助、おまえの口はいつたいたいどこにあるのさ？」

煎じ薬を飲ませるといふ言葉に、黒い毛むくじやは必死に身を振る。

お構いなしに若造は、黒い毛むくじやらの口を探していた。

「あつたぞー！」

「悟様、それは……」

主の声が届く間もなく、こじ開けられた小さな口に煎じ薬の雫を垂らした若造の指が突っ込まれた。

黒い毛むくじやらの体が、張った弓のようにのけぞり、軽く二、三度痙攣した。

「クロ助？」

己の手の中でぐつたりと、ナマコのように伸びきった毛むくじやらを見て、若造が口をあぐりと開けた。

「心配入りません。味のすさまじさに気を失っただけでございましょう」

主が着物の袖で口元を隠し、可笑しそうに肩を揺らす。

「それにクロ助の傷に、その煎じ薬は効きませぬよ。その煎じ薬は、打ち込まれた邪気を払い癒すもの。クロ助は、飲み損でございます」

「それはまた……」

しまったというように、若造は黒い毛むくじやらに顔を近づけたが、気絶した者がそうそう目を覚ますはずもない。

「クロ助、ごめんな？」

いい気味だ。今回だけは阿呆の愚行に賛辞を送ろう。これに懲りて、目覚めたらとつとこの屋敷からでていくがいい。

「ところでカナさん、ぼくはいつたい何にやられたのでしょうか」

主の顔から笑みが消える。

「あの女が手にしていた短刀に刺されました。ですがあの短刀、わたしの魂を砕くことはできて、生身の体には傷ひとつつけることは叶いません。その筈なのですが、悟様は血を吐かれた。体に傷はなくとも、お体の内に見えぬ傷を負われたのでございます」

「そうですか」

「ひとつだけお願いがございます」

主はきちりと膝を合わせ、若造を見る。

「今度あのようなことがあっても、決してわたしを助けようなどとはなさらないでくださいませ」

若造は眉を寄せて首を振る。

「放っておくことなど、できるわけがないでしょう？」

「いいえ、放つておいて良いのですよ。守る価値など、このわたしにはございませんから」

言葉とは裏腹に、涼やかな笑みを浮かべて主がいう。

俯きかけた若造に、頷くつもりかとわたしは無い唾を吐く。

俯いたままの、阿呆の表情は見えなかった。

膝の上で握られた拳が、拳を白くしていく。

「わかりました」

はつきりと言い放った声を、わたしは何度も心の中で反芻した。

「ありがとうございます。悟様のお命が何より大事にございます」

「わかりましたが、なにしろ軽い脳みそしか持ち合わせていません。ぼくは人に言われたことを、すぐに忘れてしまいます。約束しても、いざとなったらすっかり忘れて、後先考えずに飛び込むかもしれません。その時は、約束を破ったことをお詫びします」

「悟様？」

へらへらと笑う若造を見て、主は諦めたように息を吐く。

「まったく、しょうもない御方だこと」

主は微笑んだが、それは少しだけ辛そうな笑みにわたしには見えた。

「それにしてもク口助は、あの小さな口で薬草を啜ってきたのですか？ あの小ささで

は、楊子二本ほど唾えるのが精一杯だろうに」

若造の手の平で伸びている黒い毛むくじやらを、陽炎がそつと己の手に受け取った。

「いつの日かきつと、悟様もその秘密を知る日がきます。ね、クロ助？」

訳がわからず考え込む若造は、小さな毛むくじやらが己よりでかいなど、夢にも思つてはいないだろう。

若造が真相を知る日など来はしない。

黒い毛むくじやらとて、馬鹿ではないだろう。効きもしない苦い煎じ薬を飲まされた恨みを胸に、明日の朝には姿を消す決まっている。

たかが魚に食われかけた所を助けられたくらいで、茨をわけて薬草を取ってくるなどという、無駄な良心をさらすからこんな目に合うのだ。

情けをかける相手も恩を感じる相手も、見極めねば痛い目に合う。

ミヤー

庭でシマが鳴いた。

「おや、お客さんだねえ」

若造を布団に潜らせて、主は庭へと降りていった。

平穏な夜というわけには、いかないようである。

次の朝寝所で休むことなく若造の様子を見ている主の腰帯で、わたしは小躍りしていた。

黒い毛むくじやらが、屋敷の何処にも見当たらない。

こりこりと言わんばかりに出ていったのだろう。

「クロ助はどこにいったのかな。怪我が治っていないというのに」

まだ歩けぬ若造は、首を伸ばして庭を隅々まで眺めていたが、探す者は見つからない。見つかるわけではない。

煎じ薬の効き目は素晴らしく、空が夕焼けに染まる前に若造は一人で歩けるようになっていた。

さすがに陽炎の手伝いをするのは無理だが、櫛の木の廊下に腰掛けて庭を眺めるほどに回復した。

裏の河原を散歩する主の腰元で機嫌良く揺られていたわたしは、屋敷に戻った途端、不穏な空気を嗅ぎ取った。

わたしにとつてこの上なく、不穏な気配。

「綺麗だね。茜色の雲に乗れたらと、子供の頃は思ったよ」

庭を眺めながら、若造が話している。

誰と話しているのだろう。

「二度と煎じ薬を飲ませたりしないから、家出は今回だけにしておくれ？」

目にした光景に、わたしは思わず身震いした。

「おや、ちよつと家出したと思つたら、すぐに戻ってきたねえ」

楽しそうな主の声だというのに、わたしは身を鳴らして相づちを打つことさえ忘れた。

のんびりと腰をおろす若造の横で、黒い毛むくじやらが右に左に身を揺らしている。

若造が厠へ行くと、ちよこまかとその後を付いていった。

「なんだかこの屋敷も、賑やかになつたものだねえ」

わたしは主と二人、静かにこの庭と共に時を過ごしていたかった。

いつの日か黒い毛むくじやらを必ずや小池に落としてやると、わたしは心の中で堅く誓つた。

## 11 琵琶の音が呼び寄せる者

「鈴、ずいぶんと不機嫌だねえ。わたしの話に伝えてくれるはいいが、いつもの優しい音色はどうしたのだい？ 古い寺の鐘を火箸で突いたような鳴り方をして。そろそろ曲げた臍を戻しちやどうだい？」

チン

主の問いに短く鳴ったわたしは、黙りを決め込んだ。

無愛想なシマだけでも十分気にくわなかったが、奴はまだ来客を主に知らせる役目がある。耳クソほどだが、役に立っていなくもない。

我慢ならないのは、あの黒い毛むくじやらである。

すつかり元気になった若造の周りを、ちよこらちよこらと彷徨いて、何が手伝えるわけでもないというのに離れることなく側にいる。

目障りなことこの上ない。

全身にぼさぼさと毛が生えた者など、全て嫌いだ。

べつにわたしが、つるりとした金物だからというわけではない。

決してない。

陽炎と主は黒い毛むくじやらをクロ助などと呼び、その様子を愛らしいなどという。それがまた気に入らない。

長い付き合いだ、主も陽炎もわたしを愛らしいなど、一度もいったことがないというのに。

焼き餅などという低俗な感情と一緒にされては困る。これは正当な抗議である。

「クロ助、川に釣りにいくからおいで」

間延びした声に黒い毛むくじやらが嬉しそうに跳ね、腰を屈めた若造の懐に収まった。

「クロ助は魚は嫌いかい？ 魚が釣れたらシマは喜ぶよ。魚が好きだからね」

耳障りな若造の声が遠ざかっていく。

シマが喜ぶなら、小魚一匹釣れなくていい。

シマも黒い毛むくじやらも、動いてみせられるからみんなが構うだけのこと。

わたしのように美しい音で鳴ることはできまい。

まったく面白くない。

裏の川に身投げしてやろうか。身投げして、もう鳴ることができぬほどに錆び付いてやろうか。

主の腰帯でふくれつ面のままぶらぶらとする内に、茜に染まった空はいつのまにやら、黒い墨を流したような夜空に変わっていた。

若造が釣り上げた魚が、皿に盛られた夕の膳が下げられ、陽炎に分けて貰った魚を啜えて、無愛想なシマが庭の暗がりへ戻っていく。

腹立たしい姿が一匹視界から消えたと、ほっとしたのも束の間であった。

ミヤー

暗がりからシマが鳴く声が響く。

月も顔を出さぬ夜だというのに、今夜も辻堂に客がやってきたらしい。

「お客さんかい？」

主が裸足に草履を突っかけ庭に下りると、若い女が庭の暗がりから姿をみせた。

さほど裕福なようには見えないが、長屋暮らしをしている女とは雰囲気が違う。

新しいとはいえない小袖を、それでもきちりと着付けている様は、女の生前の暮らしが困窮していなかった事を思わせた。

「どのようなご用でしょう」

主の問いに、女は静かに頭を下げる。

「ここは迷う者を、導いて下さる場所と聞いてまいりました」

「確かにここは、行く先の道を照らすお手伝いをする場所。闇を抜けると、心をお決めに

なつたので？」

女の胸には琵琶が抱かれていた。

大切そうに琵琶を抱き寄せ、女は頷く。

「わたしの行く場所は決まっております。その覚悟はできました。ですが最後にひとつだけ望みがあるのです」

主は穏やかな笑みを浮かべたまま、小首を傾げた。

庭の木の葉をさざめかせて、一筋の夜風が通る。

「望みなどと言つてはならぬ女だと、わかつております。けれど最後に一度だけ、一度だけこの琵琶を弾かせてはいただけませんでしょうか」

主の返答を待つて、女は深く腰を折る。

「構いやしません、自分では何処へいくと思つておいでだい？」

「わたしの行く先など、地獄と決まっております。憎しみに負けて人様を殺めようと毒を盛り、その毒で大切な者を死なせてしまいました。畜生にも劣る女にございます」

見れば細い女の首には、猫にでも搔かれたような傷が、無数に残っている。

今だ血を滲ませるそれは、女の心の傷そのものに思えた。

琵琶を抱き捲かれた袖から覗く腕にも、深く爪で抉られたような長細い傷が刻まれている。

女は細く、けれどしつかりとした口調で語り出した。

十六で小さな小料理屋に嫁いだわたしは、ほどなくして子を宿しました。

嫁ぎ先の舅はすでに他界して、家族は主人と姑の三人でございました。

もともと愛想の良い姑ではありませんでした。わたしの実家が、嫁ぎ先より格下であることが、母の性格に拍車をかけたのでございましょう。

主人は優しい人でした。

ですが優しすぎて、母親にひと言さえ逆らうことができぬお人でございました。

そして……。

女が人生でこれ以上ない幸せを味わう日に、わたしの生き地獄は始まりました。

産まれたのは、商売を営む家では特に忌み嫌われる、双子でございましたから。

しかも跡継ぎを望めぬ女の子となれば、姑にしてみれば猫を産まれるより価値のないものだったのでございましょう。

——子を連れて出ていけ。

——出て行かぬなら、子をどこぞへ捨ててこい。

顔を合わせる度に、このような言葉をあびせられました。

掃除した部屋に紙くずや集めた塵を撒かれ、湯を浴びた後着物が濡らされていたこと

もございました。

夕餉の汁の入った椀の底から、虫が浮いたことも一度や二度ではございません。それでも我慢できたのでございます。

わたしだけであれば、辛抱の範疇でございました。

子を捨てろというなら三人で身を投げると泣き叫んだため、物言えぬ主人も、しばらくこのまま子供達を家に置こうと姑にいつてくれました。

今思えば、あの時に子を連れて家をでるべきだったのでございます。

走り回るようになった子供らにも、姑の怒りの矛先は容赦なく向かうようになりまして。

何をしてもないというのに、腫れるほどに尻や手を打ち、仕舞いには部屋から一歩も出るなと命じたのでございます。

姑が家を空けるときだけ、わたしは子供達の側へ行き、琵琶を弾きながら色々な話を聞かせました。

少しでも気が晴れるような楽しい話をとりましたが、琵琶の音は楽しい話にさえ、憂いを帯びさせてしまいますでしょう？

子供達は側に寄ってくれましたが本当に楽しかったのか、それを知る術はございません。

ある日の昼下がりでございました。

生けた花の水をこぼしたと、姑が子を庭に投げつけたのでございます。

我慢の限界でした。

わたしは母が毎日口にする、水飴に毒を混ぜたのでございます。

部屋に蠟燭の明かりが灯り、小さな壺に入れた水飴を姑が棒ですくい舐める様を庭の暗がりから眺めておりました。

畳を転がりながら苦しみ藻掻く姑の姿を障子越しに眺めていても、わたしには何の感情も湧いてはきませんでした。

死ぬのだな。

思ったのはそれだけでございます。

主人は寄り合いにでておりましたから、姑を助ける者などおりません。

喜びも悲しみもないまま、わたしは動かなくなつた姑の体を引き摺り、井戸へと投げ込んだのでございます。

夜中でも虫の音を聞きに庭に出ていた人ですから、年寄りが暗がりでも井戸に落ちたことにしよう。そう思つておりました。

闇に染まつた井戸の底を覗くわたしの耳に、囁き合う子供らの声が聞こえました。

姑の気配がなければ、自由に家の中を歩き回るのはいつものこと。

それにしても、この時間ならとうに寝ているはずなのに。

己が今しがた取った鬼畜の行いを忘れて、ぼんやりとわたしはそのようなことを考え、何気なく部屋の方を振り返りました。

走りながら、わたしは叫んでいたと思います。

子供らが姑の壺から指で水飴をすくい取り、口へと運んでおりました。

足が空回り、どれほど走っても子供らの元へ辿り着けない気がいたしました。

この手に二人を抱いたときには、すでに小さな口から白い泡を吹いておりました。

苦しかったのでしょうか。

しがみつくと手はわたしの肌を掻きむしり、名を呼んでもそれに応えてくれる事はない

まま、息絶えたのでございます。

母が我が子の命を、奪ったのでございます。

女の首の傷口から、筋となって赤い血が幾重にも垂れる。

腕の傷は膿んだように口を広げ、琵琶を抱く肘から、ぽたりぽたりと血が落ちた。

「子供達の鎮魂に、琵琶の音を。」

「憎き母の弾く琵琶の音など、子供らが望むはずもございません。わたしの我が儘で。」

ざいます。琵琶を奏でて、纏わり付いて笑っていた子供らの温もりを、今一度だけ思い返したいのでございます」

「おや、お客さんですな？」

陽炎の後片付けを手伝っていた若造が、黒い毛むくじやらを懐に入れて顔を見せた。

「はい。悟様もここへお座りになつて下さいな。今から、琵琶の音を聞くことができますよ」

この言葉を承諾と受け取つて、女は微かに笑みを浮かべ頭を垂れる。

見えぬ若造は、主に言われるままに檜の板張りの廊下に腰をおろした。

「ありがとうございます」

庭の草の上に女は腰をおろし、流れる血をそのままに琵琶を抱く。

流れ続ける血は、子に詫びる女の涙そのものであろう。

血の涙、まさしくそうといえる。

わたしははつとして、思わずこの身を鳴らしそうになつた。

あろうことか黒い毛むくじやらが若造の懐から飛び出し、女の元へ近寄つたかと思うと、座する膝の上にひよつこりと登り、琵琶にその身を近づけた。

琵琶の弦を……舐めたのだと思う。

口など見えはしないが、わたしにはそう思えた。

何事もなかつたように若造の懐に戻つた黒い毛むくじやらを、不思議なものを眺めるように視線だけ送つていた女は、ふと我に返つたように琵琶の弦をつま弾いた。

流れる琵琶の音に、庭の草木が闇の中で擦れざわつく。

闇夜を湿らせる音色が優しいものへと変わり、庭の空気を満たしていく。

突如ざざりと音を立て、地を割つて這い出てきたのは二本の腕であつた。

枯れ枝にも似たそれが、女の体を絡め取る。

腕が首元までまわつても、女は表情ひとつ変えずに琵琶を弾き続けた。

女の体が、庭の地面に引き込まれていく。

動こうとしない主の考えが読めずに、わたしは一人おろおろと身を揺らす。

非道を犯したとはいえ、地の底の闇に落とされるほど腐つた魂とは思えなかつた。

「そのまま引き摺り込まれるおつもりか？ 姑の怨念に引き込まれるも良いが、わたし

にはもう一方から伸ばされた手が見えるのだよ。その手を、掴んでおやりよ」

わたしは一人息を漏らす。

腰まで引き摺り込まれた女の腕を、必死に引き上げる者が居た。

姿は見えぬ。見えるのは女の頭上から伸ばされ、腕に絡まる幼き小さな手であつた。

「お前達、まさか」

驚愕に女の眼が見開いた。

「辛かったらうよ。苦しかったらうよ。でも子供達は大好きだった母を、恨んではないよだねえ。愛しい琵琶の音に惹かれてきたのだから。母を取り返そうとする、小さな想いを無駄にするかい？ 二度も大切な者を、手放すことはないだろうよ」

女の腕から琵琶が落ちた。

震える手が、両側から腕を取る小さな手を包み込む。

「許しておくれ。ごめんねえ……」

女の体が地面から引き上げられていく。

女を離すまいとする枯れ枝のような腕が、空しく宙を搔いた。

醜く藻掻く腕から赤い血の泡が湧き、地の底へと押し戻す。

最後の泡が弾けた跡には、いつもと変わらぬ様子で庭の草が揺れていた。

「お世話になりました」

女の体が、霞となって消えていく。

ころころと笑う幼い声だけを残して、この庭から完全に姿を消した。

幼い笑い声だけが木霊となって、木々の葉をさらさらと揺らしている。

## 1 2 忘却の術から漏れ出る記憶

若造がこの屋敷に来てから、主は昼間の時間を寝所で過ごすことが少なくなつた。

寝屋で休まれるとはいつても、体を横たえるだけで眠りにつくわけではなかつたら、主にとつては差し障りのないことである。

差し障りがあるとするとするなら、主と共に心休まる時を過ごせていた寝所での貴重な安らぎがわたしから奪われたことである。

主の腰帯にぶら下がるしか能のないわたしは、主が居間で庭を眺めているなら、ひとり寝所に籠もるわけにはいかぬ。

塵ほども望んでいないというのに、この騒がしい居間に身を置いてある。

今朝はいつにもまして、騒々しいことこの上ない。

だが今朝の騒々しさは、愉快な色を帯びている。

金物のこの身が表情で歪むなら、にやつくわたしの身は、ぐねぐねにひしゃげていたことだろう。

「クロ助、どこが痛いのか？」 撫でてあげようか？」

陽炎が用意した座布団の上で、黒い毛むくじやらが若造の懐に入ろうともぞもぞ動

く。

その動きときたら笑い死にできそうに滑稽だ。

いつもならばよんぴよんと跳ね回っているくせに、今朝は立ち上がる事さえまならない。

尺取り虫に弟子入りしたようなその動きは、もこり、ペこり、もそり、へたり、と腰痛の芋虫そのものである。

二度ほど尺取り虫を真似て若造に近づいた黒い毛むくじやは、若造の手であつさりと座布団の中央へ戻された。

「駄目だよ。やわらかい座布団の上で横になっていなければいけないよ？　ぼくが悪いのだから望み通り懐に入れてあげたいけれど、クロ助の体にさわるから」

重石でも背負つたような愚鈍な動きで、腰の辺りを持ち上げてたようだが抵抗もそこまであつた。

ぺたりと座布団に這いつくばつたまま、黒い毛むくじやは体を丸めて白旗をあげた。

「悪気はなかつたんだよ。ごめんな」

無意識の悪こそが、本物の悪である。

若造の話によると今朝方目を覚ましたとき、だらりと腕を伸ばして眠っていた若造の

腕と布団に挟まれて、黒い毛むくじやらは悶絶していたらしい。

人の子でいうところの、腰でも痛めたのであろう。

さんさんの体たらくは、春の桜を愛でるよりこの目の肥やしとなる。

様あ見やがれ、このすかぼんたんである。

「カナさん、実はゆつくりと見てみたい部屋があるのですが」

わたしが優越感に浸っていると、若造が主の側へと寄ってきた。

「この屋敷の中でしたら、ご自由にどうぞ。ところで、いったいどの部屋をごらんになりたいのでございますか？」

「子鬼達と遊んでいる時に見つけた納屋です。ちらりとしか見ていませんが、古い帳面や小道具が置いてあったので、面白そうでした」

なるほど子鬼達に遊んでもらっていた時に見つけたのか。

「そういえば古い物を押し込めた納屋がありましたねえ。普段は使わぬ物ばかりなので、すっかり忘れておりました。お気が済むまでどうぞ」

嬉しそうに若造は頷き、置いて行かれるものかと身を振る、黒い毛むくじやらの体を指先で押しもどして、ひとり納屋へと向かった。

「あの納屋を悟様が見つけるなんて、いったい誰の差しがねだい？ 大層な物はおいていないけれど、気になるねえ。そうだろう、鈴や？」

主はわたしに若造の様子を見ろといっているのだろうか。

「盗み見は良くないよ、鈴。そうだろう？」

主が笑い、風に誘われた髪がさらりと頬にかかる。

リーン

「あらまあ、どうして鈴が膨れるのさ。わたしは気にならないかい？　つていっただけじゃないか」

口元に笑みを残したまま、主が草履を突っかけ庭へと降りる。

たとえ何かがわかったところで、主に話して聞かせる術は持たぬというのに。

主は知ったあとのわたしの反応を見て、ただ楽しみたいだけなのだろう。

若造のすることに微塵の興味もないが、主の暇つぶしとなるなら動かぬ事もない。

チリン　チリン　チン

「おやおや、鈴も楽しみなようだねえ」

鈴とは正直なものである。

主に快諾を伝えようとしただけであるというのに、最後のチンは余計であった。

主に見透かされたのが悔しくて、わたしは一人ない歯を軋らせた。

納屋へ姿を消した若造を見送って、ようやく若葉を芽吹かせ活気を取り戻し始めた庭を愛で歩いた主は、本来であれば風鈴を下げる引っかけにわたしをぶら下げ、涼しい目

でわたしを流し見てから、ひとり寝所に戻ってしまつた。

この屋敷の納屋には、数多くの物が眠っている。

古い昔は旅籠であつたこの屋敷を訪れた者は多い。

呼べば医者が来る時代ではないから、やつと辿り着いた旅籠で命を落とす者も少なくはないだろう。

そういう者達の持ち物が、ここの納屋には多く眠っている。

かつての旅籠の主人達が変わり者であつたことが、これだけでも十分に伺える。

遠い日に主と共に納屋を覗いた日には、埃を被つた煙草入れや風呂敷、中には屋号の入つた提灯の火袋まで置いてあつた。

わたしには屑同然と思えるそれらを、旅籠を仕切つた歴代の主人達同様も主も決して捨てようとはしなかつた。

薄暗い納屋の中ではまともにも字も読めまい。気に入つた品を手に出してくるであろう若造待つて、わたしはぶらりゆらりと風に身を任せた。

抱えられるだけの物を手に若造が納屋から出てきた時には、日はとつくに西に傾いていた。

いくつつかの埃っぽい帳面に、煙管や根付けなど雑多な物が放り込まれた籐の小箱を攄

の板張りの廊下に並べ、若造は喜々とした表情でそれらを眺めている。

己より上にで揺れているわたしのことに気付く筈もなく、古い手ぬぐいで一つ一つの品を磨いて埃を落とす。

やつと見つけたと言わんばかりに尺取り虫よろしく、のろりのそりと這つて傍らまできた黒い毛むくじやらの気配にさえ気づかぬほど、若造は古物に夢中になっていた。

「すごいな、昔の物はやはり丈夫だ」

若造が埃を払っている帳面には何の表書きもない。何も書かれていない表紙には厚みがあり、端は朱色の紐で結ばれていた。けして安物ではないことを覗わせる。

紐を解き中の紙を捲っていた若造の手が止まる。

「最後にどうして父さんの名が？」

若造が最初から見直す帳面には、一枚に一人づつ人の名が書かれていた。

帳面に記される名は同じ名字が続いては途切れ、また同じ名字が続くをくり返している。

「父さんの前の名前。小野田源治郎は爺ちゃんの名だ」

わたしにはこの帳面が、何を記した物なのか会得がいった。

しばらく目にしていなかったが、主と共に幾度も眺めた帳面である。

「これは辻堂の歴代の大家の名か」

阿呆もさすがに気付いたらしい。

同じ姓が途切れて別の名に変わるの、その時代の大屋様が次男坊で婿入りされたためであろう。

家督を継ぐというが、大屋様の血は個人に受け継がれる。

婿入りして姓が変わろうと、それを気にする者など浮き世以外に居はしない。

若造は先代である創見の名をそつと指でなぞつた。

歴代の大屋様がそうしてきたように、達筆な筆で書かれた名の下には、血判が押されている。

色褪せた血判を見て、若造が何を思ったかは知るよしもない。

先代の次ぎに己の名を記し血判を押す気概があるのか、考えたところでわたしには吐く溜息さえ残っていない。

「カナさんらしくないな。これは控えか何かだろうか。大家の血判を押した物を、カナさんが納屋に入れておくなんて、妙だな」

何気ない若造の言葉にわたしははっとした。

この帳面があったことはもとより知っている。なのに、存在を今の今まで失念にしていた。

ましてや主が何よりも大切にしているはずの帳面が、納屋に置かれていたなど有り得

ることではなかった。

「置き忘れているのかもしれないから、あとでカナさんに聞いてみようか」

置き忘れなどあるものか。

帳面を預かっているのは主である。主から片時も離れぬわたしが納屋へ置いた事を覚えていないなど、油の代わりに水で明かりを灯すほど有り得ない。

主は知っているのであろうか。

悪戯っ子のように微笑む主からは、そのような思惑は感じられなかったのだが。

知っていて、若造を納屋へ向かわせたのであろうか。

いつのまにか日は傾き、庭を照らす明かりの色も茜へと変わり始めた。

「これは……」

未だ名の記されていない、白紙の紙を捲っていた若造が声を上げた。

白紙の間から、指先で一枚の写真を摘み上げる。

若造の目に驚愕の色が浮かぶ。

色褪せた写真に写る顔が、わたしからも見てとれた。

若造以上に衝撃を受けたのは、わたしの方であろう。

これを写した時のことは、今でも克明に覚えている。余すほど金を持つ先代が、戯れに始めたからといって、妙な道具を屋敷に持ち込んだ。

そして主は長い時間を同じ場所に立って、写真と呼ばれる精巧は絵は出来上がった。ここから持ち出したら、カナの姿は写真から消えてしまうからといって、先代はこの写真を屋敷に置いていったのである。

そこには先代と主、そして小さな男の子が映っていた。

記憶が一気に蘇る。

どうして忘れていたのだろう。

忘れるはずのないことを、忘れていた事実は受け入れがたい。

「思い出した。これは父さんとここへ来たときのぼくだ」

若造の口から、吐く息のように言葉が漏れる。

呆然と写真を見つめていた若造は、夕焼けを渡る鴉の声に我に戻ると、写真を浴衣の懐にそっと入れた。

心の臓が落ち着かないのか、薄い胸が大きく波打っている。

持ち出した物を全て抱えて、若造は納屋へと戻っていった。

大屋様の名が記された帳面も、そのまま納屋に戻すつもりであろうか。

若造は空の頭に、いったい何を思いだしたというのか。

わたしは鈴。

主の為なら、どのようなことでもしてみせよう。

いつの日か主が幸せの中笑ってくれるなら、わたしは恨まれても構いはしない。  
「鈴、どうだったかい？　悟様は今日の探索はお終いにされたようだねえ」

寝所から主が姿をみせる。

ここで見た物を、決して主に悟られてはならない。

一世一代の大芝居。

震えて淀んだ音で鳴りそうになるこの身を、わたしは必死に押さえた。

「悟様は楽しんでおられたかい？　なんぞ面白い物でもあったかねえ」

主はのんびりと庭を眺めている。

チリチリン

わたしは努めて明るく鳴ってみせた。

「その様子だと、誰かの差し金というわけではなさそうだねえ。ふふ、面白いことでも顔を覗かせるかと思つたのに、当てが外れたねえ」

主はそれきり静かに目を閉じる。

主の前で、初めて空言を吐いた。

鈍付くな方ではないから、わたしの吐く空言など幼子の嘘にも劣る。

ひたすら身を縮めて、嘘の皮が剥がれないことをわたしは祈った。

あとは懐に写真を入れた若造が、はたしてこのあとどう動くか。

それを思うと、身が振れる思いであった。

己が好いている若造の心中の乱れを察したのか、黒い毛むくじやらもいつの間にか座布団の上に戻り身を丸めていた。

あの写真を見て、若造が何かを思い出したように、わたしも思い出した事実がある。あの若造の軽口が主に同じことを思い出させぬよう、今はひたすら祈るしかない。

歴代の大屋様の名が記された帳面に、写真を挟んで納屋へ置いたのは主である。そして主は、野坊主に頼んで忘却の術をかけさせた。

主の中から、帳面と写真の存在が消し去られた。

わたしはその術の余波を受けたに過ぎない。

何を思いそのような術を己にかけさせたのか、忘れなければならなかった理由さえ、わたしは聞かされてはいない。

何を機に主の術は解けるのであろう。

記憶が戻った時、主は苦しむであろうか。悲しむであろうか。

主の望む結末なら、どんなものでも受け入れる。

薄闇の降りた庭で、わたしは一人、主の心に思いを馳せた。



## 13 怨念を固めし者

わたしは鈴である。

寝所で横たわる主の腰帯に、ぴくりともせずにはぶら下がっている。

庭に落ちた木の葉が、夜風にはらりと転がされる音さえ耳に入るほど、神経を尖らせてたまま一夜を過ごした。

「悟様がお目覚めになったようだよ。おやおや、朝からクロ助と何やら言い争っているようだねえ。」

間延びした阿呆と身をくねらせるだけの黒い毛むくじやらでは、どこをどうしたって会話などなるまい。

来客のない静かな夜を過ごされた主は、髪に櫛を通してから騒がしい居間へと向かった。

「痛い！ 嚙ったって駄目だよ。クロ助が嚙ったって、楊枝にちくりとされたくらいにしか痛くないんだから。今日一日はそこで大人しくしていて」

座布団に黒い毛むくじやらを戻して、陽炎を手伝いにいこうとする若造のくるぶしに、黒い塊が負けじと張り付いている。

「痛いってば！　まだ腰が痛いんだろ？　休まないと悪化するぞ！」

幼子を叱りつけるように、若造がメツと顔を顰めて見せると、黒い毛むくじやはしゅんとして座布団にころりと転がった。

「直つたらまた、釣りに連れて行ってあげるからね」

若造のそんな言葉に背を向けて……実際はどちらに顔があるのかわからないが、黒い毛むくじやはすねた様子でくるりと丸まった。

ひとりと一匹の小競り合いを眺め、主は楽しそうに目を細めている。

主が楽しそうに微笑まれるなら、阿呆なやりとりも少しは意味を持つというものだ。それにしても騒がしい。

朝餉を盆にのせ居間へと戻ってきた若造は、黒い毛むくじやらに捕まらないように、用心深く座布団を遠巻きに歩いて膳の横に膝をつく。

「悟様、昨日は納屋で、何か面白い物を見つけられましたか？」

わたしはぎちりと身を固くする。

主の問いに、若造はにこりと頷いた。

「昔の旅人が残していったらしい古道具が沢山あつて、まるで宝箱を覗いているようでした」

身が割れそうなほどに緊張していたわたしは、肩透かしを喰らってしげしてと若造の

顔をみる。

「それはよろしゅうございました。お暇な時は、お好きにござらんくださいな」

涼やかな主の表情には、何の疑念も浮かんではいない。

ひとり、ない首を傾げてみる。

わたしと若造の間に、何の申し合わせがあつたわけではない。

だというのに、若造は主に空言を吐いた。

若造が何を思ひ出したかは知らぬが、先代とここを訪れた日の残像を思い出したというなら、すぐにも写真を見せて主と話しに花を咲かせるのが本当であろう。

たとえ思い出しても、頑是無き子であつた若造がここで見聞きした思い出など、たかが知れているだろうに。

「鈴、鈴や？」

いつから主に呼ばれていたのであろう。

鈴という身でありながら、なんとという失態。

チリン

悩みなど感じさせない、呑気な音をひとつ鳴らす。

「朝からぼやっとして、珍しいねえ。日が高くなつたら裏の川へ散歩に行こうよ。悟様も、夕の善に並べる魚を釣りにいくそうだよ。すねて丸まっているク口助も飾り棚用の

小さい座布団にのせて、連れて行ってあげようと思ってね」

リーーン チン

「面白く無さそうな鳴り方だこと。クロ助と仲良くおしよ。あの日だって、琵琶の弦をクロ助が舐めてやったから、音色が子供らにまで届いたんじやないか。悪い子ではないと、わたしは思うけれどねえ」

チン

「まさか、心の中で毛むくじやら、とか呼んじやないだろうね？」

思わず身が固まった。

主が目元を細めてわたしを見る。

「じゃあいいだろう？ 一緒に川にいこうよ」

チリン

ひと鳴りすると、主は白い指先でわたしの身を撫でた。

主に心を見透かされた気分だ。

でも嫌だ。錆びてもクロ助などとは呼んでやらぬ。

それにしても、あの黒い毛むくじやらの正体はいつたい何であろう。

若造を救い、琵琶の弦が奏でる音に力を与えた。

知ったことかと思う。阿呆は阿呆同士、潰し潰され勝手に仲良くするがいい。

若造の後ろから川へ向かって歩く主の腰帯にぶら下がり、ふて腐れたままぶらりゆりと揺れるわたしは、時折通る川風に、ちくりと身を刺されたような痛みを感じた。

さして気にするほどの痛みではなかった。

若造が昨日のことを、これ以上話す気がないと知ってほっとしたせい、周りのちよつとした出来事がやたらと目に付く。

川風をちくりと感じるなど、気が抜けている証拠である。

「この辺りで釣つてみようと思います」

若造が岩の上に腰をおろし、釣り針に餌を付け始める。

少しでも揺らさないようにと、両手の平ほどある小さな座布団に黒い毛むくじやらをのせて歩いていった陽炎は、そつと若造の横に座布団をおいた。

鎌首をもたげた黒い毛むくじやらは、若造と目が合うとぴくりとして顔を伏せる。

「しょうがないな、おいで」

若造の手で運ばれ座した腿の上に乗せてもらうと、黒い毛むくじやらは満足そうに身を横たえた。

夕の善になどと抜かしていたくせに、日が傾く頃になつても若造の釣り針にかかったのは小魚三匹であった。

「陽炎さん、大口叩いたのにすみません」

口をへの字にして謝る若造に、陽炎が笑いながら首を振る。

「シマへの土産ができたではありませんか。夕の善でしたら、何も心配はいりませんよ」  
シマへの土産など川に流してしまえと思つた、ちょうどその時であつた。

若造の手の中、竿が大きくしなつて揺れた。

「おお、あたりです！」

喜んだ若造が急に立ち上がったせいで、腿にのんびりと身を預けていた黒い毛むくじやらが、ごろりと岩に落ちて転がつた。

どこか打ち付けでもしたのか、水から上げられた小魚みたいにのたうちまわつてい

る。  
「クロ助ごめん！　大きいですよ。すごい引きです」

腰を引いて若造が竿に力を込める。

強い川風が通り過ぎた。

ちりちりと身を焦がすような痛みが走る。

主がすいと、切れ長の目を細めた。

「悟様、竿を手放しお下がりがりくださいませ」

主の声に若造が振り向いた。

若造が主の言葉の意味に気付くその前に、魚が逃げたように竿がしなりを止める。

川面から、水の流れを割って迫り出す黒いもの。

見えぬ若造は伸びきった竿を眺め、用心深く黒い毛むくじやらを手に抱いた。

「どうやら悟様は、大物を釣り上げたようでございますよ」

やわらかな声とは裏腹に、主の表情は険しかった。

「悟様、ゆつくりとこちらへ」

その間にも川面から徐々に姿を見せるそれは、濡れた長い黒髪をべたりと頬に貼りつけた、細い女の顔をしていた。

「カナさん、ここに誰か居るのですか？」

「はい。黒髪の女が半身を見せております」

若造は合点がいったという風に頷く。

「実は動けないのです。足の裏が岩に張り付いたとしかいいようがありません。手も首も自由になりませんが、足の裏が岩と同化したように動かないのです」

若造の言葉に、主は美しい眉根を寄せた。

陽炎もびたりと主の横に寄り添い立っている。

「何の用だい？ 話なら聞くが、悟様にかけて術を解くのが先だよ」

「離せば逃げる。だから、離しはせぬよ」

見た目とは違う、透き通るような声であった。

濡れた黒髪が張り付く体に衣服は纏われていない。だが女はそれを恥じている風でもなかった。人の子ではないのかもしれないと、わたしは直感した。

金物のこの身がちりちりと痛む。

風を感じた痛みは、この女が近くに潜むことを示していたのか。

些細なことだからと、主に知らせなかったことが悔やまれた。

「逃げはせぬよ。なぜ辻堂の敷地ともいえるこの川に姿を現した？ 案内する道さえ持

たぬ者のように見えるがねえ」

女の眼は黒い。まるで闇の沼を覗くように、ぞつと悪寒が走る。

「わたしは名を持たぬ。わたしは川そのもの。流れて流れて、行く先々で色々な者をこの身に拾う」

わたしは震える息を吐き出した。

この身を走った悪寒の元凶は、女の目だけではなかった。

妖や亡霊といえど、己と呼べる個を持っているものだが、この女は違う。

顔と長い黒髪の印象で女と思つたが、それさえも違っている。

かといって、男と呼ぶのも憚られた。

女に見えた顔の下にある体は、細い男の物であった。

膨らみのない、のっぺりとした胸に黒い髪が張り付いている。

「やっかいな者が紛れ込んだものだ。ここで姿をみせて、いったい何をするつもりだい？ 思ったようにはいかないと思うがねえ」

若造は何か岩から足を引き剥がそうと藻搔いていたが、糊に付いた小バエのようにぴくりとも動きはしない。

「カナさん、川の中に姿を現した者は、あまり良くない者なのですか？」

「ええ、特に今は日暮れ前にございます。悟様、日が暮れた闇の中で姿を現す者達より、日の光がある内に現れる者の方が、厄介なのでございますよ」

「それはなぜ？」

若造は己の手で、足を一心に引つ張っている。

「邪気を払う筈の日がある内に姿を現すことができるということは、それだけ強い力を持つているからでございます。それが汚れた魂の塊となれば、尚のこと扱はずらいのでございます」

川面から半身を見せる女が、べろりと舌を出し唇を舐めた。

左右の目の形が違う。上唇と、下唇も他人の物を合わせたようにちぐはぐだ。

つり上がる角度も太さもまったく違う眉が、女の顔を更に気味悪く感じさせた。

「川への身投げが、とんと減った」

女が言う。

「それがどうしたというのさ？」

女の舌がちろりと垂れる。

「男が欲しい」

川面から迫り出す女の上半身が、膨らみのある女性の体へと変化した。

「おまが取り込んだ女達は、みな身投げだろうよ。男を恨み死んでいった者として、おまえが取り込まなければ、いつかはあの世へ行けただろうに」

「寂しい魂は、仲間を求め。わたしは死んだ魂の欲望を叶えたまでのこと。取り込んだ男の魂を喰らえば、この身に眠る女どものすさんだ魂も少しは潤う。力のある男なら尚のこと味がいい」

「浅ましいな。見ているだけで吐き気がするよ」

主が懐に指先を滑り込ませる。

「カナさん、それほど危険な相手であるなら、早く逃げて下さい！　いまクロ助をそちらに投げますから、この子を連れて逃げて下さい！　こらく口助、離れるんだ！　逃げるんだよ！」

痛めた腰のどこにそんな力が残っていたのか、若造が引き剥がそうとしても、足首に巻き付いた黒い毛むくじやは、一寸たりとも動こうとはしなかった。

「前にも申し上げたはず。わたしの身を案ずることなどございませぬ。次期大屋様となられるかもしれない、悟様のお命が一番の大事にございます。わたしも、これだけは譲れませぬ」

主が指先に紙を挟んだ手を、懐からすいと抜いた。

「名高いあんたを出し抜く策もなしに、のこのこ狩りに出向くと思うかえ？」

蛇のように舌先をちろりちろりと出しながら、女の顔がにたりと笑う。

主がくつと唇を引き締める。

「聖女の気を纏いながら、あんたという存在は女の無念を引き寄せる。己でもわかつているはず。女の無念が解るからこそ諭し、理解できるが故に相手に引き込む隙を与える」

はつとして、主が目を見開いた時にはもう遅かった。

意思を持つ礫となって飛んだ小石が、主の手から霊符をはらりと落とさせた。

空を舞い落ちる霊府が青い炎に包まれ、地に着く前に灰となる。

小石に魂が吹き込まれた。

少なくともわたしにはそう見えた。

河原のどこからともなくざわざわと集まる小石が、主を足元から埋めていく。

「カナ様！」

伸ばした陽炎の手は、主に届くことはなかった。

どこからか飛んだ小石が頭に当たり、陽炎は気を失ってその場に崩れ落ちた。

チリリン　チリリン　チリリン

これでもかというほど、わたしはこの身を鳴らした。

小石は逆流する雪崩のように、主の足を埋め尽くす。

紐が千切れるほどこの身を鳴らしても、攻め来る小石はわたしに見向きもしなかった。

「カナさんー！」

若造が叫ぶ。

「おまえが察したとおり、わたしの中に眠る魂は数えきれぬ。おまえを妬み縋ろうとする魂の欠片が小石に宿る。小石といえど、集まれば岩をも凌ぐ大きさとなろう。軟弱な体が、いったいどこまで耐えられるか」

暴れるのを止めた若造は、背を伸ばし真つ直ぐに女の声ができる方を見据えている。

「ぼくが望みなら喰らえばいい！　だが他の者に手を出すな」

「悟様！　お止め下さい！」

悲痛な主の叫びであった。

若造は主に目を向けることなく、その顔から表情は消えていた。

ごろごろと小石が転がる音に紛れて、若造の囁きがわたしの耳に微かに届く。

——ク口助、お逃げ。

水しぶきを上げ、女の体が跳ね上がる。

小石は主の腰帯まで埋め尽くそうとしていたから、迫る小石の隙間からわたしはその様子に息を呑んだ。

若造が死ぬ。

感じたことのない苦みが胸を締め付けた。

微動だにしない若造の首筋に女の口が届こうかというとき、小石の隙間から見えたのは黒い大きな塊であった。

わたしは固唾を呑み、この身が震えていたことさえしばし忘れた。

若造を守るように身を巻き付けた黒い毛むくじやらが、鋭い眼光を放つ容態で、牙に女をがしりと啜えている。

水面の隠れていた女の下半身は、人の物ではなかった。

二股の魚の尾びれ、とでもいえば伝わるだろうか。

二つの尾びれが、水を弾いて藻掻いている。

低い唸り声と共に顎に力を込めたのだろう。女はかつと目を見開き、苦しみに腕が宙を掻く。

主の周りで小石がばらばらと力を失い崩れていく。女の意識が、小石を操る力も失ったということだ。

「クロ助？　クロ助なのかい？」

足が自由になったというのに、若造は黒い毛むくじやらに体を巻かれたまま、口を開けて身の丈より大きな黒い塊を見つめていた。

「クロ助、無理をさせて悪かったねえ。もう少しだけ待つておくれ」

主は小石の山を抜け出すと、唾えられたままの女の側に寄った。

「手を出す相手を間違えたようだねえ。この御方を煩わせた礼に、行き先をつくつてやろう」

主が手にした呪符を目にした女は、激しく頭をふる。

強く嘯まれているせいで、声の一つもでないらしい。

「お行き」

押さえた声で主は言うのと、指に挟んだ呪符にふつと息を吹きかけ女に近づける。

呪符は紅い炎で女を焼いた。

炎に触れた先から、霞となつて空へと昇り散つていく。

「人の魂を取り込んだとはいえ、二元は水の気だろう？　数多の魂が固まると碌な事にはならないからねえ。湯気のように立ちのぼつて、あちらこちらで雲となるがいい。ばら

ばらに雨となつて降つたなら、一つ一つの魂など弱いもの。すぐに己を思い出し、それぞれの道を進むだろうよ」

黒い毛むくじやらが、唾えていた女の体を岩の上に吐き出した。

炎に包まれた女の体が、白い湯気となつて昇つていく。

全てが消えた後、空には無数のちぎれ雲が浮いていた。

風に流され、それぞれ違う方へ向かうのだろう。

「クロ助！」

黒い毛むくじやらの体が傾いで、若造の上に覆い被さる。

どん、と音がしたのは気のせいだろうか。

若造を押し潰すはずの大きな体は消え、代わりに若造の肩にはぐつたりと伸びきつた小さな黒い毛むくじやらの乗つていた。

「おい、大丈夫？ クロ助？」

慌てふためく若造に、主が優しく微笑んだ。

「大丈夫でございますよ。火事場の馬鹿力で頑張つたクロ助は、安心した途端に体の痛みを思い出したのでございましょう。腰を痛めて立てぬ老人が、いきなり俵を担いで走つたようなものでございます。我に返れば、ぐつたりもいたしましょう」

まったく懲りずに阿呆の命を助けるから、何度も痛い目に合うのではないか。

同情の余地などない。

だがあの黒い毛むくじやらが、主を救ったことも事実である。

口には出さぬが、心の中だけなら感謝の言葉を述べようかと思う。

「戻りましょうか」

意識を取り戻した陽炎が、ほっとした笑顔でみなを屋敷に誘った。

手の平の黒い毛むくじやらに少しでも振動を与えまいと、若造はへつぴり腰でそろそろと歩いている。

もともと痛がっていたのに、無理をした今はもつと痛みが増しているのだろうか。

いやいや、そのような心配をわたしがするわけがない。

それにしてもぐったりとしている。

たしか屋敷の奥に、滋養に利くという酒があつた。薬草を漬け込んだ酒で、良いものだと言っていたような。

陽炎は気づいて、あの毛むくじやらに飲ませるだろうか。

はつとしてわたしは身を震わせた、

わたしは今どんな物思いに耽っていた？ 夢だ、悪夢だ。

あの女の怨念が、わたしに悪夢を見せたに違いない。

「鈴、妙な音をカタコトとたててどうしたんだい？」

主に問われたわたしは、しゃんとこの身をただす。

わたしは鈴。主以外のことなど、わたしにとって塵ほどの重さもない。

チリー チリーリン チリ

必要以上に陽気に鳴ってみせようとしたのが徒となった。

鈴の音がどうにも調子が悪い。

今夜は静かにしていよう。邪気が抜けるまで、誰のことも想うまい。

## 14 恩義を果たす鷹

わたしは鈴。

いつ終わるともしれない時間の中を、ゆらりぶらりと揺れている。

静かな朝も束の間であつた。

どたばたと騒がしい足音を立て、若造が寢所から出てきた。

「カナさん、カナさん！」

若造の慌てた様子を楽しむように、主はのんびりと首を回す。

「どうかなさいましたか？ そのように慌てて走つては、廊下の板張りが抜けてしまひ  
そうでございますよ」

はつとした表情の若造は、あと散歩で居間に辿り着く辺りでぴたりと止まり、そろり  
そろりと足を進めはじめた。

さんざん走つておいて、今さら気を回しても何の役にも立つまい。

忘れるだけの鳥頭の方が、余程ましというものである。

「カナさん、これを見て下さい」

若造の手には、黄ばんだ長い布があつた。

主の前に布を置くと若造は畏まって正座をし、膝の上で両の拳を握りしめる。

「首筋に触れられた気がして手で払おうとしたとき、何かに触れてしまったのです。指先に、物に触れた感触がありました」

主が小首を傾げて先を促す。

まったく要領を得ない話である。話には順序というものがあるであろうに。

「クロ助の悪戯かと思つたのです。でもクロ助はわたしの布団の中でまだ眠っていましたし、他に人も居ませんでした」

「ではこの布は？」

「それなのですよ。気のせいで済まそうと思つたというのに、枕の上にはらりとそれが落ちていたのです。何かが、居たのではないでしょうか」

丸く目を見開く若造は、本当に驚いているようすだった。

「そのときクロ助は確かに眠っていたのですね？」

「はい、寢息に胸元が膨らんでいましたから、寝ていたと思います」

ぞわりとした気配に目をやると、慌てて寢所を抜け出した若造に、置いてけぼりを食わされた黒い毛むくじやらが、横になって器用に廊下を転がつてきた。

「クロ助だ！」

先日起きた川の件で更に腰を痛めた奴は、尺取り虫の動きよりも転がる方が楽である

ことに気付いたらしい。

ころりころりと転がって、若造の膝元に辿り着いた。

「クロ助？ 今朝方に悟様の寝所に、何かが入り込んだことに気付いたかい？」

主の問いに、黒い毛むくじゃらは寸胴な首を僅かにくねらせる。

「おや、クロ助は気づいていなかったようだねえ」

「カナさん、この布に書かれた文字のようなものは何でしょうか？」

黄ばんだ布には、墨で何か書き込まれていた。文字のように見えるが、人の子が使う文字ではない。この世の物ではない匂いが僅かに漂う。

「これは古の呪術師達が、好んで使った文字でございます。それがどこから漏れたのやら。文字は呪術の物ではありませんが、これを記した者はおそらく素人でございます。術を施した者の力が、まったく感じられませんか」

この様な者が屋敷に紛れ込んだというのに、シマはいったい何をしていたのか。訪れる客を見逃すなど、今まで一度もなかったというのに。

「いったいどのような者が、この屋敷を彷徨っているのやら。シマに見咎められることもなく、悟様の側にいたクロ助にさえ気づかれず。あまり有り得るものではございませんが、確かに居たのでございませうねえ」

黄ばんだ布を手に主は思考を巡らせ、薄く紅を引いた唇に指を当てる。

「ぼくはどうしたら良いのでしょうか」

主でさえ正体の見極めがつかぬ相手に不安が増したのか、若造はきょうろきよると忙しく目玉を動かしていた。

「様子を見るしかございませんね。悟様はいつものようにお過ごし下さいませ。クロ助は、今回は無理をしないようにおし。今度無理をしたら、転がることさえ難しくなってしまうよ?」

主の言葉に黒い毛むくじやは、しょんぼりと身を丸めた。

朝餉の目刺しを分けて貰おうと、庭の隅からシマが姿を現した。

ここに怪しげな布があるというのに、ミヤーのひと言さえ鳴く気配がない。

この様子では、シマにとってこの布はここにあつて当たり前の物、ということになる。それ以外にシマが鳴かぬ理由を、わたしの頭はひねり出せなかった。

「悟様、小鉢を運んでいただけますか?」

奥から陽炎の声がした。

「はい、今いきます」

若造は日常へ戻っていった。いや、戻ろうと必死なのだろう。

若造はこの屋敷で起こる怪異を理解しようとしているが、それに馴染んだわけではない。肝つ玉の小ささは、ここへ来たときと何ら変わってはいないのだ。

次ぎに屋敷が騒がしくなったのは、西の空が茜に染まる頃であった。

檜の板張りの廊下に腰をおろし、変わりゆく庭の色を眺めていた主の後ろで、若造がぎやつ、と悲鳴を上げた。

「どうなさいました？ 悟様？」

主が振り向いた先で、若造は震える指先を畳に向けていた。

色褪せた布が、はらりと畳に落ちていた。

「こゝ、今度ははつきりと聞こえました。やつと手が自由になりました……そういつていました。この手に触れたのは、この布の感触です。確かに何者かがこの屋敷に居るのですよ」

細く白い指先で、主が布を拾い上げる。

「今度ばかりは、わたしにも感じる事ができます。確かに何か居るようでございます。手が自由になったと、そういったのでございますね？」

「はい、若い男の声でした」

「この布がその男の魂を縛っているのでございましょう。この匂い、納屋にあつた籐の小箱からも漂っていたような」

若造がぼんと手を打つ。

「その小箱なら、納屋を探索したときに持ち出した物のひとつです」

納屋から取ってくるといって、若造は居間を飛び出した。

「最初からこの屋敷にあった物だから、シマは鳴かなかつたのかねえ。どう思う？ 鈴だつて、妙な話と思うだろう？」

チリン

わたしはひと鳴りして、主に同意を伝える。

入り込んだ怪異ではない。もともとここに存在した物が引き起こしている怪異。そう考えたなら、多くのことに合点がいった。

「これです、この小箱です」

見覚えのある籐の小箱を手に、若造が戻ってきた。

主が風鈴を下げる引っかけにわたしを下げて。若造の様子を見させたあの日に持ち出された小箱。だが中に入っていたのは雑多な小物ばかりで、若造はそれを一つ一つ磨いていたに過ぎない。

とりわけ目を惹くようなものなど、何一つ無かつたように覚えている。

「あの日も中を見ましたが、怪しげな物などなかつたような。わたしはただ、一つ一つの埃を払って、眺めていただけです」

訳がわからない様子の若造は、腕を組んで首を傾げる。

「悟様、この小箱からは確かにあの布と同じ匂いがいたします。この中の物のどれが、こ

の怪異を引き起こしているのやら。この小箱、しばらくは居間に置いておきましょう」  
げつと口を開けた若造は、渋々といった様子で主の言葉を承諾した。

最初に声が聞こえた気がしたといっていたのだから、若造が解いたのは口を覆うぬのだったであろう。

そして今度は手を覆う布を解いた。残るはどこであろう。

全ての布が解けたとき、姿を現すのは何者であろう。

その答えを知る時は、意外にも早く訪れた。

廁から走り出た若造は、胸の布が解けたと礼をいわれ涙目になり、寝所に戻ってすぐ、足に巻かれていたらしい布を掴んで、転がるように走ってきた。

日はとつぷりと暮れている。

この屋敷が、辻堂と呼ばれる闇の刻であった。

「悟様、その者でしたら目の前に、この庭に立っております」

主が草履を引っかけ庭へと降りる。

また引きに脚絆姿の若い男が、目に布を巻いて立っていた。

旅姿のまま息を引き取ったのか。

白い足袋を濡らすのは、この者から流れた血の色であろう。

「何が望みだい？ 他に打つ手がなかったのは解るが、悟様が恐がられている。事情を

聞かせておくれ?」

害をなす者ではないのだろうか。主の声はやさしかった。

「申し訳ない。この屋敷からでることも、誰かに気づいて貰うこともできずずっと納屋に潜んでおりました。ところが数日前、その方が籐の小箱を持ち出し、中の品を手に取り入れた。その中にはわたしの魂が宿る物も含まれておりました」

地面に置かれた小箱から、若い男が摘み上げたのは一枚の鳥の羽だった。

「これは鷹の羽でございます。道すがら怪我をして身動きの取れぬ鷹を見つけ、捨て置くことができずに、連れて歩いたのでございます」

「その羽に宿っていたというのかい?」

宿るつもりなどなかったのだ、と男はいった。

「わたしは追われておりました。追う者から逃げて、わたしは旅をしていたのでございませぬ。はじめは仏の御心を説く、すばらしい者達だと思つたのです。ですが蓋を開けてみれば、浅ましい術に頼り罪を重ねる集団でございました」

嫌な記憶をかみ砕くように、男はぎしりと歯を鳴らす。

「わたしが御上に訴える事を恐れ、奴らは執拗に追つてきました。鷹を拾い共に旅路を急ぐ中、とうとう追いつかれたのでございます」

若い男の指が、愛しそうに鷹の羽を撫でる。

「この旅籠の少し先の道をいった、林道で闇討ちをかけられたわたしは、どうすることもできず、刺された傷と鷹を胸に抱えてずるずると地に腰を落としました。

鷹だけでも逃がそうと思いましたが、羽も足も治つてはいないこの子が、逃げられる筈もございません。目の前で首を折られた鷹に、私は縋つたのでございます」

男の目を巻く布と頬の隙間から、涙が一筋流れて落ちた。

「申し訳なく思いました。たかが鳥と思われるかも知れませんが、すっかり情が移つておりました。わたしが拾いさえしなければ、この様な凶事に巻き込まれることも無かつたものを」

「そのときの鷹の羽が、なぜこの屋敷にあるのだろうか」

「わたしに布を巻き、呪詛を施しながら男達はいつておりました。おまえの屍が寒空に凍える頃、俺達は先の旅籠で酒でも呑んでいると。奴らは殺した者の怨念に襲われない為、こうやって布を巻き怪しげな言葉を書き込むことを常としておりました。こうすると、魂が存在しなくなると信じていた、阿呆どもにございます」

「封じられた魂が、なぜ鷹の羽に？」

「奴らは小心者で、物の怪を恐れておりましたから、鷹にも布を巻いたのでございますよ。そして殺された鷹に縋つたとき、すでにわたしの命は絶えておりました」

「鷹に寄つた魂が、共に鷹の羽に封じられたか」

「はい、そのように思っております」

鷹と共に封じられたなら、なぜ男は己を封じた布に未だ縛られているのだ？

表に姿を見せるのは、鷹でなければ合点がいかない。

何かに想いを馳せていた主が、顔を上げてああ、と息を吐く。

「思い出しました。大屋様が、布に巻かれた鳥の死骸が部屋に置かれていたとあって、妙な布を訝しみながらも、この庭で茶毘にふしたのでございます。人であれ、動物であれ、分け隔て無く死を悼まれる御仁でしたから」

「わたしが共に宿っていないければ、鷹はあの世へ飛び立てたでしょう。ですが己の肉体と魂を別々に術で縛られたわたしのせい、今だここに留まっております。

自由にしてやりたいのです。この目の布が解けたなら、術は解け鷹は好きに飛び立てるはずでございます」

主は男の目を覆う布に指をかけた。そして解くことなく手を引いた。

「悟様、この布どうやらわたしでは解けないようでございます」

若干頭を後ろに仰け反らせながら、若造が男の方へ寄つていく。

「わたしにできるでしょうか」

「あなた様の指が鷹の羽に触れただけで、足を覆う布が解けました。触れただけで、布は解けて落ちるのです。感謝のしようもございません。今一度、この布に触れてはいただ

きたい」

頭を下げる男の姿は、若造の目には映らない。それでも聞こえる声から必死さを感じたのであろう。若造は、すつと腕をあげ指先で空をなぞる。

「あと少し、左でございます」

主の声に従つて、若造の指が布に触れた。

はらりと布が空に舞い落ちる。

精悍な、若い男の顔であつた。

「ありがとう」

男の体が、土塊のように崩れていく。

まるで模られた砂の山が、崩れるようであつた。

主は目を見張り、それから柔らかい笑みを浮かべた。

「ひとり旅立つこともできたであろうに。その魂を守るために、共にいたのであろう？」

優しい子だねえ」

男の体が消え場所には、茶色の羽を持つ鷹がいた。

鋭い嘴にちらちらと、薄紫の光りを放つ小さな玉を啜っていた。

「鷹がいるのですか？　男はどうなりました？」

見えぬ若造は、視線を游がせあちらこちらと眺めている。

「男の魂を守り通した鷹の姿は、それは凜々しいものでございます」

鷹は大きく翼を広げ、僅かに頭を垂れるとぎつと音をたてて舞い上がった。

暗い夜空に薄紫の光りが小さくなつて、やがて薄れて姿を消した。

主は、ぱんぱんと手を打ち鳴らす。

「陽炎、今宵は良い気分だから、お酒をつけとくれ」

顔をだした陽炎が、にこりと頷き奥へと戻つていく。

「形見代わりにと大屋様が、一枚の羽だけを残してそれを籐の小箱に仕舞われたのは偶然ではなく、あの鷹が仕向けたことだったのかもしれないねえ。この屋敷にあつても、存在を感じられなかったのは、双方に施された呪詛のせい」

「何とも不思議な一日でした。わたしもお酒をいただいても？」

不抜けた顔の若造をみて、主は口元を袂で隠してくすくすと笑つた。

「もちろんでございます。それにしても鷹という生き物は、一度信頼を築いた相手のことを、一生忘れぬものだと聞きましたが、死してなお、忘れぬ鷹も居るのでございますねえ」

「律儀さに種族は関係ないのでしよう。何だかその鷹のことを考えると、クロ助とかぶりません。わたしがあの世へ旅立つときには、すっかり忘れて自由に生きてほしいものです」

名前を呼ばれたのかと、居間の座布団の上で黒い毛むくじやらが頭をもたげた。

「おや、クロ助に聞こえていたようですよ」

「クロ助、わたしの心配ばかりしていると、彼の鷹のように大変な想いをするからね！  
ありがたいが、ほどほどにしておくれよ！」

若造が叫ぶとぷいっと顔をそむけて、黒い毛むくじやらは座布団の上でぐるりと丸  
まった。

ふたり一緒に厄介払いができるなら、どこまででも付いて行けと思う。

黒いゴミの塊と間違えて、陽炎が箒で掃き出してくれないかと、日々本気で思ってい  
るのだ。

チ チン

「おや鈴、意地の悪い鳴り方だねえ」

わたしは黙りを決め込んだ。

意地悪などしていない。思うだけなら、ただであろうに。

## 15 付喪渡しの夜行船

薄い雲に覆われ、今日は夏の日差しもやさしい朝である。

西からそよそよとそよぐ風に、身も洗われる思いであったというのに、それを遮るむさ苦しい顔がぬつと現れた。

「お目覚めですか、悟様」

「おはようございます」

渦巻く寝癖も直さずに女性の前に顔をだすとは、無粋にもほどがある。

「あのですね、寝所の前の廊下にこの様な物が落ちていたのですが、カナさんの物でしょうか？」

若造が手にしていたのは、梅の細工の施された簪と火打ち道具であった。

「火打ち道具も簪も持つてはいますが、それはわたしの物ではございません」

「火打ち道具ですか？」

「火打ち石と火打ち金、そして飛んだ火花を移す火口のことでございます」

若造が暮らす時代と、ここ辻堂では時代が違う。

存在する空間自体が違うのだから若造が知らないことも有り得るが、火打ち道具を使

わずに、どうやって火を起こすのであろう。

「今日はこれらのように、見慣れぬ物がそこらに落ちていたりやもしれません。もし見つけましたら、拾ってここにお入れくださいませ」

主が指差した先にある竹細工の籠には、すでに二つの品が入れられていた。

「これは煙管に鬼の根付けですね。カナさんが見つけたのですか?」

「これは陽炎が拾ってまいりました。悟様、今宵は良いものが見れますよ」

薄く紅を引いた唇を綻ばせ、主が嬉しそうに目を細める。

「良いものですか? 何か楽しいことでもあるのでしょうか」

「今宵は十年に一度、付喪渡しの夜行船が裏の川を通るのでございます。船には綺麗に提灯が灯され、それは美しいものでございます」

それで陽炎は朝も早くから、酒の肴を下ごしらえしているのか。

主は良く覚えているものだ。わたしなど、陽炎が拾ってきた物を見ても、紛れ込んだ者がいる程度にしか思っていなかった。

「それはまた、どのような船なのでしょう。お祭りのような物でしょうか」

「祭りといえば祭りでございます。付喪神達の、最後の祭りにございます」

忙しそうに働いていた陽炎が、戸口から顔をだした。

「悟様、わたしも楽しみでなりません。船に乗る付喪神にとつては最後の夜となりま

しょうが、悲しい物ではないのです。以前はカナ様とわたしだけでしたが、今宵は悟様にクロ口助もいます。楽しくなりそうですね」

陽炎め二人だと？ わたしの事を忘れている。

あろうことか今宵の面子にまで、わたしの名が入っていないとは。

浮かれすぎであろう。

磊落な気質のわたしといえど、仲間の人数から弾かれるのは面白くない。

「付喪神にとつて最後の夜になるのですか？ 何だか寂しげな感じがしますが、本当に楽しいのでしょうか」

若造のくせに、主の言葉に意見する気か。

「最後ではありませんが、それは付喪神が望んだことにごさいます。悟様が拾われた簪にも、火打ち道具にも付喪神が宿っております。それらは望んで今日この場にきたのでございますよ。渡し船に乗りたくても乗れずに終わる者が多い中、色々な吉事が重なってここに辿り着いたのでございます」

「今宵で自分の存在が最後となる事を知って、渡し船に乗るといふことですか？」

理解しがたいという表情で、腕を組んだ若造が呻る。

「人として生まれた悟様には、理解しがたい概念でしょうか。短い人の人生とは違い、付喪神は長い時の中を、孤独に過ごすことが多いのでございます。本来なら宿る物が壊れ

たとき、付喪神の魂は消えて失せます」

「消え失せるとは、それはまた寂しい話です」

他人事だというのに、若造は眉尻を下げる。

まったく人がいいだけの阿呆など、ただの阿呆より扱いにくい。

「寂しいと思うのも、また人の概念でございましょう。もともと騒ぐことが好きな付喪神にございすのに、楽しく過ぐしていた仲間と一人また一人と離れ、最後には使われもせずに棚に飾られるか、蔵の中で埃を被つて生涯を終える者のなんと多いことか」

「使われてこそ、物の価値があるということでしょうか」

主はにこりと頷いた。

「だからこそ最後まで、楽しく騒ぎたいと願うのでございす。長すぎる時の中で、己の宿る器が壊れる寸での者しか乗れない渡し船。この世に未練の無い者しか乗れない渡し船でございす。ここへ集まった付喪神は、運良く辻堂に吹き込む異風に乗った者達でございすよ」

「そうだったのですか。それなら見逃しがあつては大変です。わたしは屋敷の中を見回つてきましよう」

「はい、お願いいたします。そして楽しく見送つてやるのが、わたくし達の勤めでございましよう」

立ち上がった若造の下に、ころころと転がって黒い毛むくじやらがやってきた。

「クロ助、おまえも一緒にいくかい？ どれどれ、いま懐に入れてやるから」

手を伸ばして黒い毛むくじやらを抱き上げようとした若造に、黒い塊がぴよんと跳ねて顔面に張り付いた。

「うわー！」

目をしばしばさせながら、黒い毛むくじやらを顔面から引き剥がした若造は、鼻に皺を寄せ目を三角にして見せた。

「こいつめ、腰は治っていたんだな？ びつくりさせようって魂胆だろうー！」

小突こうとした手を逃れ、黒い毛むくじやらがふざけた調子で、ぴよんぴよんと跳ねて先を行く。

「こら待て！ 待てつてばー！」

若造が後を追いかけて、檣の板張りの廊下を軋ませながら走っていく。

「賑やかだねえ。毎日あんなに走り回られたら、廊下の板を張り替える日も、そう遠くはなさそうだねえ」

楽しげにくすくすと主が笑う。

笑いごとではないであろう。主は優しすぎる。あの一人と一匹など、す巻きにして渡し船より先に流してしまえば良いものを。

その後若造は、日が暮れるまでに紅い漆塗りの合わせ鏡を拾ってきた。もうすぐ日が暮れる。

陽炎の作る肴の、良い香りが漂ってきた。

日が暮れて月も昇り、昼間の暑さをすっかり夜風がさらつてくれた頃、準備が整つたと、陽炎がみなを呼びに来た。

「シマ、悪いが留守番を頼むよ。いつも通りなら、お客は来ないと思うがねえ」

いわれてみれば付喪渡しの夜行船が通る夜に、客人が訪れたことはない。

ミヤー

ひと鳴きして主に応えると、シマは庭の闇へと姿を消した。

薄情で世の中にも他人にも無関心なシマは、付喪渡しの夜行船に興味を示したことがない。だからいつも留守番役である。

「悟様、今宵を見逃すと次は十年後にごぎいます。集めた付喪神達を、忘れずに連れて行かなくては」

主が手にした風呂敷を、慌てて若造が引き取った。

「では、まいりましょうか」

川の水気は好まぬが、今宵は少しばかり胸が躍る。

目の前の川をゆく、ほんの一時の大見せだが華があるとわたしは思う。

すっかり体調の良くなったらしい黒い毛むくじやらも、若造の後について跳ね回っている。

元気になった途端に動きが喧しくて、まったく目障りだ。

「さあ、みなさんこちらへどうぞ」

河原に陽炎がゴザを広げ、その中央にはお重に詰められた料理が詰まっている。

物を食さぬわたしだが、陽炎の樂しげな思いが料理の匂いに乗って漂うのは感じられた。

「まあ美味しそうだこと」

主の言葉に、陽炎ははにかんだように肩を竦める。

「では宴会を始めましょうか」

主が若造に酒を注ぎ、若造も主と陽炎に酒を注ぐ。

「祭りはいつ頃始まるのですか？」

「さあ、そればかりは風まかせでございますよ。始まりを告げるのは、川に架かる橋でございませう。ク口助が見えるように、悟様にも橋が見えるはずでございませう」

「それは嬉しい。では、渡し船も見えることができますか？」

「もちろんです。どちらも恨みを背負った存在ではございませぬから、この辻堂に来た

ときと同じように、自然と目に入ってくるでございましょう」  
若造は嬉しそうに酒を口に運んでいる。

ゴザの上に置いた盃から時折目を盗んで、黒い毛むくじやらが酒を舐めているのに気づいているのだろうか。

というより、酒を呑むのだな。

酔うのだろうか？

酔って川に落ちた話など、腐るほど耳にする。

黒い毛むくじやらが酔って川にほとりと落ちる様を想像して、わたしはひとりほくそ笑む。

川のせせらぎを三味線代わりに、酔った若造が踊っている。

日本舞踊などと呼べる崇高なものではない。

陽炎と黒い毛むくじやらは喜んでいて、わたしにいわせれば白い上下で狐踊りをする、狐の飴売りより酷い踊りだ。

主が笑っているのは、情けである。

本気で楽しんでるわけがない。

「おや、はじまりましたよ」

主の声に、みな一斉に川上に目をやった。

月明かりにぼんやりと照らされていた川に、蠟燭の灯りで作られたような半円の橋が架かっていく。

川の両端から淡い橙の灯りが幻の様に伸びていき、やがて一つの橋を模った。

「なんと美しい」

呆けた顔の若造は、すっかり橋に見とれている。

わたしでさえ、何度目にしても見惚れる光景であつた。

「陽炎、準備をしておくれ」

ひとつ頷いて、陽炎が風呂敷の口を開ける。

中からは、集められた付喪神の宿った品が顔をだす。

チンチン ドンドン チントンシャン

何も見えない橋の向こうから、鐘と銅鑼を鳴らす音が響く。

「これは、なんとー！」

初めて目にする若造が驚くのも無理はない。

灯りが造りだした橋の下から、突如として船先が現れた。

屋形船の屋根には所狭しと提灯が下がり、船を明るく照らしている。

チンチン ドンドン チントンシャン

右に左におつとつと！

打ち鳴らされるチンドンに、調子っぱずれな唄声が重なる。

渡し船にはすでに大勢の付喪神が集まっていた。

船先で竿を操る渡しと、船尻で櫓を操る渡しが一人ずつ、合いの手を入れながら、川面を行く船を器用に操っている。

あゝらよ！　ちよゝいよ！

渡しのだみ声は、付喪神の唄の中でも良く響く。

こちらの姿を見つけた船先の渡ししが、笑顔で竿を伸ばして寄越した。

竿の先には、いつの間にもやら大きめの竹籠がぶら下げられていた。

心得ている陽炎が、その竹籠に集めた物をそつと入れる。

チンチン　ドンドン　チントンシャン

そこから先は、まるで手妻を見ているようだった。

渡しによって引き上げられた竹籠が船の上に差し掛かると、そこから湧き上がるように、それぞれの形をなした付喪神達が船の上に降りたついでいく。

そして迷うことなく、踊りの輪に入ってしまった。

人の形でありながら、頭部は赤鬼である者。

桃の花を頭に飾っているのは、若造が拾った簪であろう。

歌舞いた着物姿の男は、煙管の付喪神であろうが正直へんちくりんである。



主が酒の入った盃を口へと運ぶ。

その横顔は穏やかで、宵闇を照らす灯りのようだとわたしは思った。

遠ざかる渡し船の上で、付喪神が思い思いに踊っている。

手を上げ足を上げ、くるくると周りながら互いに笑いあつてた。

やつとこの世を去れるのだと、喜びの宴を乗せて船が行く。

提灯の灯りに照らし出された渡し船が、船先からその姿を闇に溶かして消えていき、

銅鑼の音と唄が小さく、小さく遠ざかる。

船尻が闇に吞まれようとした寸でに、火消し道具の三人組が振り向いた。

小さな身の丈をいっばいに伸ばして、幾度も幾度も手を振っている。

手を振り返す若造の目は、流れずに溜まったもので月明かりを反射していた。

チリリリリリン

送辞代わりに、わたしも身を鳴らした。

川面を月明かりがちらちらと揺らす以外、何もかもが姿を消した。

一夜限りの夢夜行。

嘘のような静寂に、主は静かに盃を傾けた。

## 16 庭の水面に珠に舞い

日照りが続いて、すっかり庭の土が乾いてた。

一度は枯れて青葉を取り戻した庭の葉も、心なししんなりと頭を垂れている。

鈴であるわたしには金物であるゆえに、かえって心地よい空気の乾きであった。

今日は早めに夕の善が並べられ、日照りの暑い日々が続いているからと、陽炎が番茶で焚いた飯に、濃い目のだし汁を冷ましてかけたものをのせていた。

「あっさりして美味しいですね」

若造がどんぶりに口を付け、かき込むように食べている。

味と共に涼を味わう品だというのに、まったく風情のない奴である。

「今日は団子を作ってみましたよ。膳をお下げしたら、お酒と一緒に持ってまいりますね」

陽炎がくりりと目を回し、嬉しそうな顔で奥へと引つ込んでいく。

団子の出来が良かったのであろうか。

それにしても団子と酒の取り合わせもどうかと思う。全をそつなくこなす陽炎であったが、酒の肴に関しては時折ちぐはぐな品を取り合わせる。

まあ良いか。べつにわたしが食すわけではない。

「団子ですか、ゆつくり酒を呑みながら過ごせる夜になるといいですね」

「そうですねえ、陽炎がせつかく作ったお団子が、堅くなつては勿体のうございます」

日が落ちて薄闇に包まれた庭を眺めながら主も微笑む。

いつもより早めに酒を運んだ陽炎は、草色と白と薄紅色に染められた小さな丸い団子を、白い鉢に盛つて主と若造の間に置いた。

「草色に染まつているのは、ヨモギを練り込んだものでございます。ヨモギの保存は……内緒にございます」

悪戯つぼく口元を袖で隠し、陽炎が奥へと戻っていく。

「今宵は陽炎を酔わせて、ヨモギの保存の仕方を話させましょうかねえ？　大層な秘伝がでてくるやもしれないでございましょう？」

まったく陽炎が自ら秘密だなどと口にするのは珍しい。

主がからかいたくなるのも解るといふものだ。

「ク口助、美味しいかい？」

団子の色合いの美しさを愛でていた、わたしの風流はその一言で吹き飛んだ。

黒い毛むくじやらが、若造の方にこくこくと何度も頷いている。

毛を掃き集めたような黒い塊の前には、指先で丸められたであろう小さな団子が、笹

舟の上にちよこりと数個載せられていた。

陽炎め、余計な気遣いを。

どこが口なのかわからない、毛むくじやらの黒い毛の隙間から吸い込むように、ひとつまたひとつと小さな団子が減っていく。

出されても食せないことなど百も承知だが、面白くない。

黒い毛むくじやらが喜ぶなら、庭の虫一匹でも勿体ない。

ミヤー

庭でシマが鳴く。

庭の葉陰から姿を現したシマは、悠然とした足取りでこつちへ来ると、主の座る檜の板張りの廊下にひよいと飛び乗った。

いつもであればひと声鳴いて姿を見せ、そのまま庭の暗がりへ姿を消すというのに、今宵に限ってどうしたというのだろう。

シマに限って、団子が目当てということもないだろうに。

「まだひとつしか食べていないというのに、お客さんのようだねえ」

主の口から、小さく溜息が漏れる。

シマの鳴き声にはつとした表情をみせた若造だったが、団子の旨さには勝てなかったようで、次々と口に放り込んではおくりもくりと口を動かしていた。

「これはまた……」

檜の板張りの廊下に腰かけ、庭にゆらりと足をおろしていた主が、すいと目を細めゆつくりと己の足を庭から引き上げた。

「どうかしましたか？」

口の中に団子をためたまま、見えぬ若造はきよとりとした風にいった。

「同じ光景を目にしたのは、いったどれほど前のことやら。はつきりと覚えていないほど、珍しい光景でございます」

夜闇に包まれた庭の奥から、青白い灯りがぼんやりと向かってくる。

その灯りが庭の middle を薄く照らし出した頃、青白い灯りの中からさらさらと流れ出てきたのは水であった。

檜の風呂の湯が溢れるように、さらさらと水が広がり日照りで乾ききった庭の土を覆っていく。

「悟様、ほどなくして庭は、ちよつとした湖になりそうですございます」

木々の生えた湖であった。湖面の下では庭の草花が水に揺れている。

普通の水ではないのだろう。

水気を嫌う金物のこの身がチクリともしない、はて面妖な。

檜の板張りの廊下の上に逃げ込んだとはいえ、わたしの次ぎに水気を嫌うシマでさ

え、なぜかのんびり片手を舐めて、その横に顎を落として目を閉じた。

「屋敷は大丈夫なのですか？ まさか水没するなど」

団子を食う手を休め、やつと焦りの表情を浮かべた若造に、主はやりわりと首を振る。「その心配はございません。ただ、この湖の主がいったい何者を連れてくるのか、それが気にかかっているだけにございます。知らぬ同士ではございませんが、滅多なことでもこへ立ち寄ることをしない者なのでございます」

青白い灯りがぶわりと広がり、灯りの只中を抜けて姿を現した者が居た。

その者が手にする櫂で、凧いでいた湖面に波紋が走る。

船先から姿を見せたのは、船首をイノシシの牙の様に反らせた造りの猪牙船であつた。

見覚えのある船頭が一人乗っていた。右に左にと必死に櫂を漕いでいるようだが、その表情は険しい。

「おやおや、妙な者を引き連れてきたようだねえ」

主の言葉より早く、わたしは押し寄せ、それらの者に目を奪われていた。

透明な紅い玉が無数に押し寄せ、庭の湖面を埋め尽くす。

目を懲らすと紅い玉は己が意思で湖面を渦巻き、猪牙船を押し動かしているようであつた。

「すまねえ。ここへ来るつもりなんざ更々なかつたんだ。いつものように闇の中を猪牙船で流していたら、わらわらとこいつらが押し寄せてよ。後はいくら權に力を込めても舵取りのかの字もありやしねえ。」

お手上げだ、と男は小さな猪牙船の上にとんと座った。

胸に紐の付かない黒い半纏をざつと脱ぎ捨て、額に巻いた手ぬぐいを乱暴に抜き取り首の汗を拭う。

男が舵取りを放棄したことを見て取ったのか、渦巻いていた紅い珠がすつと船から離れていく。

「その様子だと、かなり意地を張って小舟の行き先を操ろうとしたのだろうか？ かまいやしないよ」

「誰か庭にいるのですか？」

若造の目に映っているのは、未だに乾いた夜闇に閉ざされた庭であろう。聞こえてくる声だけが、若造にこの庭への来客を告げている。

「浮き世とあの世の道が交わるといわれるこの辻堂に来るまでの闇にも、色々な者が己の役目を果たしております。いま目の前にいる男もその一人。名は宇木次と申します。古の時から、闇の中を猪牙船で渡つては、沈んでいる魂を拾い上げてきた男でございませう」

ほう、と若造が感心したように相づちを打つ。

「屋敷の庭はこの世のものではない水に満たされ、湖となっておりすが、猪牙船を押しこきまで来た者達は、紅い透明な珠となつて水面の漂つております。濁つた朱は怨念に染まつた無念を示すことがおおございですが、透明な紅い色はただひたすらの無念にございましょう。何を思い残すことがあつたのやら」

ひたすらの無念と主は言うが、無数の紅い珠がわらわらと漂う様は、浮いた血の玉を思わせ快いとはいえなかつた。

「こいつらに、ものを言う力なんぞ残つちやいないと思つぜ。暗い水の底から藁に縋るようになら湧いてきやがつた。それからおれの船を押し、ここまで来たのが精一杯だろうよ。どんな死に方をしたのか知らんが、供養されることなく沈んでいた魂だ」

薄く紅を引いた唇に指を這わせ、揺れる水面を眺めていた主は振り返ると手をひとつ叩いて陽炎を呼んだ。

「陽炎、すまないがどんぶりに山盛りの炊いた米を持つてきておくれよ。それとお酒も新しいものを小樽ごと持つてきておくれ。もし残っているなら、団子もありつたけ皿にもつておくれでないかい？」

はい、とひとつ頷いて、陽炎は足早に奥へと向かつた。

「酒の樽は、ぼくが運びます。陽炎さんには重いでしょうから」

急いで若造が立ち上がると、それについて黒い毛むくじやらも跳ねながら奥へと姿を消した。

「宇木次も船をこつちに寄せておくれ。この屋敷からでようとするのでなければ、この者達もは舵取りの邪魔などしないだろうさ」

ちえ、と舌を鳴らしながらも、宇木次は大人しく主の言葉に従った。

主は居間に置かれた小さな踏み台で墨をすり、一枚の和紙を取りだし筆で文字をしたためる。

霊符の一種であろうか。わたしなどに読み解ける文字ではなかった。

書き上げた和紙を作法道通りに丁寧に折りたたみ、主は檜の板張りの廊下へと戻っていく。

「まずはお前達の話を聞かせて貰わないことにはねえ」

その言葉の真意を探ってか、水面の紅い玉がざわめき揺れた。

「カナ様、用意がととのいました」

陽炎が山盛りの飯と、これまた山盛りの団子を手に戻ってきた。

少し遅れてへっぴり腰で小樽を抱えた若造がやってくる。

黒い毛むくじやらは、ちゃっかりその肩に乗ってだらりと身を休ませていた。

「カナさん、これは、こゝ、こゝここに置いても？」

「はい、お願いいたします」

陽炎が先に置いた団子の横に、若造は太ももを震わせながらゆつくりと小樽を置く。

威勢良く手伝いを申し出たわりに、とんだ軟弱者である。

膝を正し主が庭へと向き直る。

「この霊符が、おまえさん達の慰めになると良いのだが」

書き上げたばかりの霊符を指の根に挟み、主は音を立てて両手の平を打ち合わせた。

一拍、二拍、水面を吹き抜ける風が、失望に淀んだ空気を押し流す。

水面に揺れる紅い玉が、泡の様に弾けてひとつ、またひとつと消えていく。

奥行きが完全に現実と分離したものとなった庭に、大勢の姿が浮かんで揺れる。

まるで夢をみているような、何とも言えぬ曖昧な風景であった。

徐々に人の姿が色づく、それは無残な姿の者ばかり。

男はみな一様にぼろの野良着に身を包み、女達も色も華もない煤けた様子であった。

骨のようにやせ細った者ばかりだ。

子供の姿も見てとれる。子供もみな、やせて肋が浮いている。

「今宵は少ないながら、こちらを供えさせていたどうかと。召し上がりなされ」

主は山盛りの飯と酒と団子を指先で示し、息を吹きかけ霊符を湖面にはらりと落と

す。

湖面に立つ人々の表情が変わった。

目を見開く者、涙を流す者、最初こそそれぞれの反応であったが、しばしの時を経て全員が臉を閉じ、ゆっくりと息を吸い込み始めた。

「カナさん、いったい何をされたのですか？」

穏やかな表情で振り向いた主は、若造をみてにこりと笑う。

「この者達はおそらく、飢えて死んだ者がほとんどでございましょう。村が全滅したなら、逝った者が供養されることもありません。飢えたまま、その辛さを抱えたまま黄泉の海底で蹲っていた魂ゆえ、食べ物気を吸い込んだなら、話す気力も湧くはずでございませう」

「そういうものですか」

見えているわけもなく実感の湧かない若造は、不思議そうに小首を傾げる。

庭の光景が目に見えて変わっていった。

肉のそげ落ちた頬に色味が戻り、飛び出たほお骨を隠すほどに肉付きがよくなる。

己の重さに耐えかねて、震えるほど細っていた足にも力が戻った。

脱力して立ち尽くすだけだった人々の表情に、ぽつりぽつりと笑顔が浮かぶ。

「霊符が供物をこの者達に、きちりと届けたようでございませう」

主の美しい顔で、形の良い唇が花のように綻んだ。

宇木次もほお、と感嘆の息を漏らしている。

「話せる者は前へでておくれよ」

主の声に、一人の老人がおずおずと前へでた。

「これほど大勢の者が一度に訪れるなど珍しいが、いったい何があつたんだい？」

接ぎだらけの野良着を着込んだ老人は、主に深々と頭を下げた。

「わしらは山深くに里を切り開き、それでも目立たぬように幾つかの村に別れて暮らしておつた。御上の目が届かぬ辺境に里を築いたのは、わしらの先祖だったが、あの頃にはもう、隠れ里の意味はなく、ただ山奥に隣り合わせて点在する村じやつた」

「ほう、隠れ里とは。それで納得がいく。野山と共に過ごすだけの者にしては、雰囲気がちと違う気がしていたのだよ。山に潜んでも、途絶えることなく町人以上の知恵と知識を受け継いでこられたのであろう？」

少し驚いたように、老人は頷いた。

「豊かな土地で男は畑を、女は畑と同時に布を織り染めるのを得意としておつた。鮮やかに布を染め抜く技術と知恵は、村の女達だけものであつたから、染めの技術の見事さから、町の者に目を付けられることのないよう、ありふれた染め物だけを遠い町に時折売つて、それで生きるのに最低必要な金子を稼いでおつた」

「そのように豊かな村に住んでいたのに、なぜこのような惨状に？」

昔を思い出したのか、老人が眉間に深く皺を刻む。

「日照り続きでな。作物は枯れ、枯れずに残ったものも日照りが引き起こす病気で秋を待つことなく畑全体が死んでいった。いくら豊かな土地とはいえ、三年そのような年が続けば食料も尽きる。あと一年と立ち上がるうにも食い物もない中、腹下しと熱でみな命を落とした。その年の正月を越せなんだ」

死んだ状況がそれなら、みな骨と皮だったことに納得がいく。

これだけの村を一度に壊滅させた飢饉なら、この者達が知らぬ外の世界の村では、一揆が起きていてもおかしくはない。

己の食い扶持を政に取り上げられることなく、密かに暮らしていた者達にとつて、豊かであることも貧困に落ちるも己の責任であるから、責める先さえなかったであろう。

「少なからず満たされて、先へ進めそうな気持ちになられましたか？」

主の言葉は穏やかで、相手の想いを汲み取るに留まる。

老人は静かに首を振る。

「確かに無念ではあったが、わしらが飢餓の苦しみを抱いたまま水底に沈んでいたのは、決して満たされなかった腹の為ではないのだ。正月を越せなかった、それが死ぬ以上に心残りだった者達が、ここに集まっている」

「正月、でございますか？」

「閉ざされた山間で生きてきたわしらは、田舞も独特のものを作り上げていたらしい。外との繋ぎをとる者がいつておった。この辺りの村の田舞は見事だと。色とりどりの布を身につけ、隣り合う村だというのに、衣装も唄も囃子も違うと。その田舞を一番の楽しみとしていたわしらが、最後にもう一度田舞を舞い踊れなかつたのは、ひたすらの無念だった」

「まさか田舞をやりたくて、おれの猪牙船を無理矢理押して此処まできたのか？」  
呆れたように宇木次がいう。

「申し訳ない。だが水底で流れる噂では、辻堂への道を知っているのは時折通る猪牙船だけだと聞いていた。暗い水底では女達の染め抜いた布も見えんし、囃子の音も響かん」

「浮き世の明かりが差すこの庭で、最後の田舞を行いたかつたのですねえ」

老人が深々と頭を下げると、後ろに控える村人達も一斉に頭を垂れた。

「陽炎や、わたし達のお酒も少し多めに足しておくれ。二度とは見られぬ最後の祭りなら、祭りらしく楽しませてもらおうよ」

老人の目に涙が浮いた。

にこりと頷き、陽炎が仕度をしに奥へと戻る。

「カナさん、田舞とは田植え祭りのようなものですか？」

「そうでございます。悟様は馴染みがないでしょうが、昔は正月に豊年を祈願して里独自の祭りが行われておりました。田植え作業の動きを模して踊った田植え踊り、田舞はそれに似てはおりますが、もう少し洗練されております。里の独自性も強く、後に田楽に進化していったといわれておりますよ」

へえ、無知な若造はひたすら感心したように頷いた。

酒の用意がととのうと、どこからともなくバチで叩いた太鼓の音が響いた。

わたしは目を見張った。

庭の水面の立つ人々の姿が揺らいだかと思うと、ぼろの野良着を纏っていた村人達は色鮮やかな祭りを身に纏っていた。

村ごとに衣装も違うのであろう。

紅と瑠璃色の長い布を頭に巻いた男衆が、腹に太鼓を横に結わえ両手にバチを持っている。頭に笠を被る者、腰から色とりどりの布を下げる者。

田舞と知らなければ、田舎臭さを感じさせるものは何一つない。

足を踏み鳴らすたび、水面の水がびしゃりと跳ねる。

「女性の衣装の美しいこと。まるで異国の者が宮中に舞を奉納する雅やかさだねえ」

同じ衣装を身に纏った者達が前へと集まる。

老婆の唄と笛の音に合わせ、輪になつて踊る村人が腰に結わえた太鼓を両手のバチでタンと叩く。

美しい衣装に素朴な舞が不思議な風情を醸し出す。

「こりや、なかなかいいもんを拝めたな」

船の上で揺られながら、宇木次が酒を呑んでいる。

主さえ見とれる舞を目にすることのできない若造は、聞こえてく唄と囃子だけを酒の肴に、楽しげに身を揺らしていた。

目を盗んでは若造の酒を舐めている黒い毛むくじやらも、すっかり楽しそうに右に左にと跳ねている。

「いい踊りだねえ。祭りだもの、あの世への土産は楽しんであげることだろうよ」

主は呟き盃を口へと運ぶ。

踊りの輪はかけ声を最後に姿を消した。

まるで手妻を見ている様であった。

控えていた次の村が舞い始める。

幼き者達が田植えのまねごとを踊って見せ、それを道化役の者が戯けた調子で励ましている。

その中に女性が混ざり、一気に場が色づいていく。

最後となつた村の踊りが終盤に差し掛かると、宇木次は櫂を手に廊下の端をとんと付いて水面へ船を滑らせた。

「お先に」

そういうと器用に櫂を操り、庭の木々の間を抜け奥の闇へと姿を消した。

一斉に打ち鳴らされた太鼓の音。

バチを高く頭上に掲げた村人の表情には、豊かな笑みが浮かんでいる。

村人の姿が消えていく。

潮が引くように、庭を満たしていた水が奥の闇へと吸い込まれていった。

「いい夜だったねえ」

天を仰いで主は目を閉じた。

揺れる水面は姿を消し、後には乾いた庭の土だけが残っていた。

欠伸をひとつ残して、シマが庭の隅へと姿を消す。

すっかり酔いつぶれた黒い毛むくじやらが、若造の膝の上で寝息を立てていた。

夜の静寂が耳に痛い。

そう感じるほどに、賑やかな囃子の音がいまだこの耳に残っていた。

## 17 奪われてこそ咲く命

ここ数日ぱたりと姿を見せなくなつた小鬼達のせいか、若造はぼんやりと庭を眺めることが多くなつた。

陽炎の仕事は毎日楽しそうに手伝っているが、二人で働けば自ずと手早く片付いてしまい、昼からは暇を持て余す。

だからといって以前のように屋敷の隅を漁つて、古びた書物や小道具を眺めることもない。

あの納屋に入った日から、ぴたりと好きな古物漁りをやめてしまった。

主もその様子に気づいてはいるのであろうが、口を出そうとはなさらなかった。

若造がここに留まれる時間もそう長くは残されていない。

それを考えれば、自ずと口数も減るのかもしれない。

期限を若造に知らせていないのは、自由に考える時間を与えたいからであろうか。

夕の膳を片付け終わった若造は、寝酒にするからと湯飲みに酒をつぎ、早々と寝間に引つ込んだ。

主はそんな若造に構うことなく、一人酒を舐めている。

生暖かい風が吹く夜だが、あとひと月もしないうちに、日が沈めばひんやりとした空気が庭を満たすようになる。

その頃には陽炎が屋敷を去り、主は秋風と共に現れるはずの薄を待ちわびていることだろう。

若造が出す答えひとつで、この先の辻堂は変わる。

己の考えひとつで陽炎や薄が身を寄せる場所がなくなる事を、若造はわかっているのだろうか。

わたしの中で変わらなず燻っている火種は、日増しにわたしを不安にさせる。

—— 思い出した、思い出したよ。

あの日若造は、いったい何を思い出したのだろう。

何処まで思い出したのであろう。

あの写真が物語る真実か、それともその真実の底に眠る真相を揺り起こしたか。湯を浴びるからと、主はわたしを腰帯から外し陽炎に預けた。

月を見ながら湯に浸かるであろう主の背を見送っていると、陽炎がわたしをつまみ、僅かに隙間の空いた若造の寝所の前の出っ張りに下げた。

寝所の襖が僅かに開いて、灯りが漏れている。

陽炎はちらりとわたしを見たが、何もいわずにその場を去った。

若造の寝所には野坊主が姿を現していた。

何の気配も感じさせることなく姿を見せるなど、今まで一度もなかったことだ。

「見つけたのであろう?」

「ええ、見つけてしまいました」

若造は寂しそうに頷いた。

「あの写真に写っていたのは、父さんと三歳のぼくです。あの写真を見た途端、忘れていた光景を、驚くほど鮮明に思い出したのです」

「どのようなことを思い出したのだ?」

「カナさんはぼくに話しかけてくれました。大家が子を連れてきたのなら、カナさんが忘れるはずがありません。でも、カナさんはあの時のことに深く触れようとはしない」

「不満か?」

「いいえ、自分の不甲斐なさに腹が立つのです。ぼくは、カナさんのいったような男にはなれていなかったのでしょうか。だからあの時のことを、カナさんは語ろうとしない」

奴坊主の出張った額に皺が寄せられる。

「カナは何といった?」

「庭の草を抜いて遊んでいたぼくの顔を腰をかがめて覗き込んだカナさんは、こういい

ました」

——小さな坊やだねえ。俠気のある男におなりよ。そんな男になっていつかこの辻堂に戻ってきたら、あたしは坊やを認めてあげるよ。あんたなんだって、認めてあげるよ。

「ぼくはカナさんが認めてくれるような男には、なれなかつたようです。このことを思ひ出したとき、もうひとつのことに気づいてしまいました」

「なんだ？」

「あの日のカナさんは、肩までとどく黒髪を風に揺らして微笑んでいました。今と何ら変らない姿で、微笑んでいたのです」

「気づいたのか」

「聡は小さく頷いた。

「ここへきた日カナさんは髪の手、袖の手にも触れてくれるなどといった。それは、触れようとしても触れられぬから。カナさんは、この世の人ではないから」

部屋の空気を揺らす声が途絶え、行燈の蠟燭さえまっすぐに炎を立たせる。

「盃にも植物にも触れられるというのに、生身の人間だけには触れられないとは、なんと因果なことでしょう」

若造の言葉に、野坊主は目を伏せる。

部屋を眺めていたわたしは、この静寂を破る存在が現れたことに驚いて、思わずこの身を鳴らしそうになった。

「とうとうやって来たか」

野坊主の言葉に頷くのは、腰まで伸びた黒髪を纏う、色の白い女であった。

「誰かいるのですか？」

「廁の戸口で会った女にございます」

姿の見えぬ人物に思い当たった若造は、声の方へ頭を下げた。

「わしがここへ潜った隙について、おまえも入ったわけか。それならカナに気づかれることを案ずる必要もない」

野坊主の言葉に女が頷く。

「カナさんに気づかれずにここへ？」

「これからおまえに話す事を、カナはけっして望まぬであろうから」

野坊主の顎が、ぎちりと噛み締められる。

「カナを殺したのは、わたしなのだよ」

息を呑んだ二人の心中を悟ってか、蠟燭の火がぐらりと揺れる。

眼を見開く二人の聞き手に口を挟ませることなく、野坊主は語り始めた。

わたしは仏に受け入れられた僧ではない。門禪の僧を語るのもおこがましい。

戦国の世に生まれ、戦いのために生きたが親方様の為とは名ばかり。露ほどの信念も持たぬ屑であつた。

多く人を切れば戦国の世では名を上げることが出来る。だがわたしは幾人の敵を倒そうと、戦史に名を刻むことの無い身分であつた。世に存在すら知られることのない影の身であるがゆえ、わたしは敵を倒すことに夢中になつた。

必要とあらば女子供でも、一刀のもとに斬り捨てた。

闇と浮世が入り乱れた平安の時には、千とも万とも言われる妖を殺したなら、己が身も妖怪に変化するという言い伝えがあつたようだが、それはある意味人を殺すことでもなんら違いはなかつたらしい。

千の人を斬つたか、万の人を斬つたのかはわからない。

ある夜、わたしの枕辺に亡者が溢れた。

この先死ぬことは許さぬといった。

死にたくば、斬つた数に等しいだけの魂を救えという。

救うために、それに見合う場所とそこを支える魂を見繕えと。

確かに目にした亡者の姿や声を、それでもわたしは信じなかつた。死ねぬというなら死んでやろうと思つた。そしてわたしは、己の身を守る刀を持たずに、戦いに赴いた。

死ねぬのだよ。

まるでわたしの存在が見えていないかのように、刀も矢もわたしの命を取ろうとはしない。

亡者の言葉の意味にわたしは気づいた。

わたしはこの世から消えたということに。ここに居るのに、誰からも認識されぬ存在になったのだということに。

わたしの話を耳を傾けてくれる者はいなくなつた。

誰もわたしに語りかけようとはしない。

わたしに笑いかける者はおろか、罵声を吐く者さえ居なくなつた。

そんな日々が幾年も続いたある日、一人の亡者が枕辺に立つた。

年端のいかぬ幼子であつた。

わたしに胸を刺されてこと尽きたという。

「さみしい？」

幼子はわたしに問うた。

「この孤独には耐えられぬ。死にたい」

わたしは答えた。

「ぼくたちは、さみしい。ひとり。くらい」

幼子は今にも泣き出しそうだった。

ああ、わたしはそこでようやくと解つたのだ。亡者達は己の感じている孤独を、行き所のない闇を、わたしにも味合わせているのだと。

そして解せないと思つた。

わたしが憎いなら取り殺せばいい。なぜこのように回りくどいことをするのかと。

相手が詮無き子であることを忘れ、わたしは問うた。

「わたしはどうすればいい？ どうしたなら、お主達の魂は安らぐのだ？」

幼子は、言われたとおりにして、とだけいつた。

明確に表す語彙を持ってさえいなかったのだろう。

幼子の姿が薄れかかってきた。

「なぜわたしにそれを伝える。誰かに行けといわれたのか？」

幼子は首を振る。

「母ちゃんがいつた。恨んじやいけない。あのおじちゃんも魂を失つた、かわいそうな人なんだからって」

愕然とした。死に際にさえ、母というものは子の心のあり方に思いを馳せるのか。

「おつちゃんが言われたとおりにしたら、ぼくは寂しくない場所にいけるかもしれない。だからここにきた。母ちゃんもどこにいるかわからない。母ちゃんをたすけて」

腰が砕けて、わたしはその場に崩れ落ちた。  
泣いた。

己の罪を思つて泣いた。

顔を上げたとき、既に幼子の姿は無かつた。

母を思つて敵であるわたしに助言をしにきた、幼子の心を思うと身が震えた。

物のように斬り捨ててきた、無数の魂にも子があり親があつたのだと思ひ知つた。

母を思う幼子に、人のあり方を諭された。

夜が明けて、わたしは髪を剃つた。

剃つた髪と共に、己は死んだものと思うことにした。

亡者達が残した言葉を幾度も思い返してみる。

魂を救え、それに見合う場所と魂を探せ。

意を決したものの、わたしは途方にくれた。どういふわけか歳は取らず時間は腐るようにある。

だが、肝心の人が見つからない。

誰一人わたしに眼を留めぬのに、どうやって見つければよいのか。

長い年月が流れた。

そんなある夜、カナと出会つたのだよ。

カナは死にたがっていた。

己の定めに絶望して、死に場所を探していた。

通りすがり、カナに声をかけてみた。

「この辺りにうまい蕎麦屋はありませんか」

すると答えたのだよ。

力ない声ではあつたが、細い指で一軒の蕎麦屋を指差した。

わたしの声に答えた者は初めてであつたから、わたしには直ぐわかつた。

この女が、あるべき場所を支えるに値する者なのだと。

女がそれほどまでに死に急いでいる理由は、わたしには解らなかつた。

それを知つたのは、もっと先のことであつたから。

ずっとカナの様子を覗っていたわたしは、橋の袂に立つカナに声をかけた。

カナがその夜、命を絶とうとしていることに気づいていたからだ。

「その命、いや、魂をわたしに預けてはみぬか？　そなたが思うように探す者が闇を彷徨

うておるなら、探す手助けをしよう」

死に魚のようだったカナの目に、光が宿つた。

「魂を預けるとは、どうすれとおっしゃいますか？」

カナはそう問うた。

「わたしの手で、そなたを殺す」

カナは瞬きひとつせなんだ。

「今宵捨てようと思うた命にございます。万が一にもあの人を救う手立てがあるなら、この命差し出しましょう」

深い事情も聞かずカナが意を決したのは、藁にも縋る思いであったからであろうか。

月明かりのない夜であった。

カナの持つ提灯だけが、若く美しいその顔を照らし出していた。

わたしは印を切った。

刀を持って、その切っ先でカナの体に印を刻んだ。

カナの命は絶え、魂がわたしの前に残った。

生きながらに亡骸と化していた魂を、死して咲かせたのがカナだった。

そして、今に至るのであるよ。

野坊主の語りが途絶えても若造の胸は大きく波打ち、すいと立っていた女は、膝から崩れて両手で顔を覆った。

飽きるほど虫の音が鳴った頃、ようやくと若造が口を開いた。

「カナさんが、死にたがっていた理由とは、いったいどのような」

壁に横られた野坊主の臉がきつく閉じられる。

「陽炎、とても良い湯であつたよ」

庭の向こうから主の声が出た。

すいと女の姿が消える。

「それは語れぬ。似非坊主が語つて良い話ではないのだよ」

野坊主の姿が壁の中に吸い込まれていく。

後には平らな壁と、放心した若造だけが残された。

わたしは主の心と体の痛みを思い起こし、何もできぬこの身を軋ませた。

## 18 古傷を背負う者の行末は

昨夜遅くに主の腰帯へと戻されたわたしは、まんじりともせず一夜を過ごした。

野坊主が自ら口を開くなど夢にも思っていなかったから、逃げることも止めることもできずにいるわたしの耳に勝手に入ってきた昔語りは、この身を凍らせた。

とうの昔に知っている話であった。

だが若造が耳にして良い話ではなからう。少なくとも、大屋様と呼ばれる者以外が耳にして良い話ではない。

気落ちして主の為に明るく鳴ることさえできずにいたわたしは、寝所から出てきた若造を見て、いっそう身を固くした。

「悟様、今日はお早いお目覚めですこと。ゆるりと休まりましたか？」

主の問いに、ぼけらとした表情のままに若造ははい、と頷いた。

すぐにへらへらとした笑いを張り付け、顔を洗いに井戸へと向かう。

「あと二日。悟様は、とうとうお心を固めるには至らなかつたようだねえ」  
ない心臓が跳ね上がる。

主の言うとおおり、若造がこの屋敷に留まれるのはあと二日。

次ぎにこの屋敷を訪れるには、一年の時を要する。

大屋となろうとする者が、定められた日数を過ぎて此処に留まれば、己の世界へ戻る道を見失う。

それは大屋様として同じこと。

この屋敷に身を寄せられる日は、短い人生の中限られた日々と定められていた。

主はそのことを、若造に告げようとしているのであろう。

その言葉を皮切りに、若造が余計なことを主に話さぬことを祈るしかない。

主にとっては昨夜の出来事と感じられるほど、生々しいものであろうから。

それを話せば、陰膳の訳も話さねばなるまい。

主のことだ。若造に請われたなら、どれほど辛かろうと穏やかな笑みで語って聞かせるだろう。

微笑みの陰に血の涙を流しても、それを他人に悟らせはしない。

わたしの慕う主とは、そういう御方だ。

「カナさん、陽炎さんが白玉をこしらえるそうですよ」

わたしの心配をよそに、若造が嬉しそうに阿呆面をさげて戻って来る。

この若造の心には、昨夜の話は欠片も残っていないのであろうか。

「それは楽しみでございませう。ところで悟様、言い忘れていたことがあるのでございま

すが」

主がいうと若造は、纏わり付く毛むくじやらを器用に避けながら主の横に腰をおろす。

「いったいどのようなことでしょう」

「大屋様になられる方も、大屋様もこの辻堂に一度に留まれる期限は決められておりません。

悟様はあと二日残っておりますが、一度この辻堂からでたなら、次ぎに此処を訪れる事ができるのは、一年後でございます」

若造が目を見開く。そしてすぐにぼんやりとした笑みを浮かべた。

「この大屋になることを決めるのは、来年でも良いということですか？」  
穏やかな笑みで主は微笑みす。

「今度お会いするときには、お心を決めていただきますが、今回はこのままお帰り下さいませ。辻堂の在り方を知っていただいただけで、十分でございます」

そうですか、と若造が頷いた。

今年決められぬ者が来年に英断を下さるものかと、わたしは心中で舌をだす。

「では今日と明日は泊まらせていただき、明後日の夕暮れまでにはここを発ちます」  
話の内容を知ってか知らずか、黒い毛むくじやらがしゅんと項垂れた。

「悟様が居なくなると、クロ助が寂しがりますねえ。塞いで気の病にならなければ良いのですが」

若造が指先で黒い毛むくじやらの体を撫でると、すねたようにぷいと横を向く。

「その者のことですが、こちらで引き取りにまいりました」

地を揺らすような、野太い声であつた。

知らぬ声に、主と若造が振り返る。

辻堂を包む闇が去つた朝日の中だというのに、庭に見知らぬ男が立っていた。

「昼日中にこの辻堂へ入る者は、厄介だと相場が決まつているんだがねえ。いったいどのような用向きだい？」

深く被つた笠で覆われた男の顔は、無精髭の生えた口元しか見えなかつた。

主の言葉に動じることなく、男は話の先を続ける。

「それはわたしがある方に売つた者。珍しいからと高値で買われたのに、逃げましてな。どこで拾われたかは知りませんが、こちらに返していただきたい」

黒い毛むくじやらが、若造の懐に身を滑り込ませる。

あの男を恐れているのだろうか。

「クロ助をいっただい幾らで売つたというのです？ 金なら払います。相手方より高値をだしましょう」

若造の表情が変わった。

口調さえ、耳にしたことのない色を含む。

残念ながら、と男は首を横に振った。

「信用が第一の商売。たとえどれだけの金子を積まれても、最初に売った方がお客様。こちらに売るわけにはまいりません」

口調こそ商売人の柔らかなそれだが、ぶれぬ芯を秘めている。

「悟様、事情がはつきりした今、クロ助を此処に置くのは無理でございます」

「カナさん！」

「クロ助を無理に留めたなら、悟様に害が及ぶでしょう。それを見過ごすわけにはまいりません。クロ助を助きたい気持ちは同じでございます。ですがこの世界、理に逆らうことはできないのでございますよ」

若造に害が及ぶという言葉に、黒い毛むくじやらがびくりと跳ねた。

止める若造の手の間を縫って、ぼとりと板張りの廊下にその身を落とす。

「クロ助？」

男の元へいこうとするクロ助を、主が白い指先で制す。

「理にはいつの時代も抜け道がございます。そのことを秘したまま、この屋敷から去るおつもりか？」

主の言葉に、笠の下で男の口がやりと笑う。

「やつかいなことを知っていなさる。この辻堂へ逃げ込んだと噂で聞いたとき、嫌な予感がしたんでさあ。姉さんのいうとおり、この取引には抜け道がある。何せ生き物を扱うわけだから、そこには少なからず意思がある」

くくく、と喉に籠もった笑いが耳をぞわりとさせた。

「クロ助を引き取れる方法があるのですか？」

若造が身を乗り出した。

「あっちの客人が用意した化け物とやり合つて、勝てばそいつは自由の身だ。ただし負けたときには、情け容赦なく待っているのは死だ。まあ、こいつらがもともと生きているのかつてえと、それはちと疑問だが」

黒い毛むくじやらの尊厳を無視した言葉に、眉を顰めて口を開こうとした若造を、首を振つてゆるりと主が止めに入る。

「どうするかはクロ助次第。その立ち会い見えぬ所で行われるとはいえ、わたしが後見人となりましょう」

「ああ、後見人としちやあ、申し分ない。あちらさんに繋ぎをとつて、さつそく始めるが良いのかな？」

主は黙つて頷いた。

「カナさん、それではクロ助が……」

「悟様、わたしが後見人になったとはいえ、戦いを挑むか売られるかを決めるのはクロ助本人でございます。どちらにころんでも、クロ助の心が願うことでございます」

若造は悔しそうに唇を噛みしめた。

「クロ助、ここで待っているからね。腰を痛めて帰ってきたなら、今回は特別に最初から懐にいられてあげるよ。でもね、クロ助には痛い思いをして欲しくないな。死ぬなんて絶対に嫌だ。クロ助の好きにおしよ」

若造は泣いていた。

悲しみより、守ってやれぬ己の非力に滲む涙であろう。

さすがのわたしも、冷やかす気にはなれなかった。

黒い毛むくじやはらば嫌だし邪魔くさいが、無残な死を望んだことなど一度もない。

このままずっと、この屋敷でうっとおしいほど陽炎の周りを跳ねて時を過ぐすとばかり思っていた。

この感情はなんであろう。

胸が痛い。小針の山に座った様な痛みである。

わたしは、悔しいのだろうか。悲しいのだろうか。

「くへん」

笠を被った男が踵を返し、庭の向こうへ姿を消した。

「クロ助、ぼくは君を引き留めることも、守ることもできない。けれど、それでもやつぱり、クロ助を好きだと思つてしまふんだ。これは、ぼくの我が儘だ」

若造の指先が震えて、そつと黒い毛むくじやらの背を撫でる。

身じろぎさえしなかつた黒い頭をもたげ、黒い毛むくじやらがきゅいつと体を傾げてみせる。

心配するな、まるでそう言っているようであつた。

ぼん、という音と共に黒い巨体が現れた。

鋭い眼光を主と若造に向け、鋭い牙の生えそろつた口を若造の耳元にそつと寄せた。

若造ははつとした表情をしたが、何かを問う間もなく黒い巨体は庭の向こうへ音を立てて姿を消した。

若造が片耳を己の手をあてる。

「悟様、どうかなさいましたか？」

「いいえ、クロ助の毛の感触を……懐かしんでいるだけです」

若造の顔に微笑みはない。

居間を仕切る障子の向こうから、すすり泣く陽炎の声だけが響いた。

夜もすっかり更けた頃、若造は風鈴を貸して欲しいと主に申し出た。なるべく音の良い物をひとつ貸して欲しいのだと。

黒い毛むくじやらが姿を消した静寂を、少しでも紛らわせたいのだと若造はいった。

「風鈴はいくつかございますが、これの涼やかな音がわたしは好きでございます」  
そう言つて主は、鈍色の風鈴を若造に渡した。

若造は小さく頭を下げて受け取ると、己の寝所の前、檜の板張りの廊下に備えられた引っかけに風鈴を釣るす。

りーん

若造の指に弾かれて、深みのある音が庭の闇に余韻を残してひとつ響いた。

すぐに眠るつもりなのか、若造は寝所に入ると障子をぴたりと閉じた。

今宵は居間に陽炎の姿さえない。

一人残された主は居間の壁に背を凭れ、半分開け放つた障子の隙間から庭を眺めている。  
る。

「久しぶりだねえ。夜の庭をもの悲しいと思うなど」

目を閉じた主の腰帯で、わたしは黙り込む。

あと二日も経つたなら、この様な夜が続くのだ。

黒い毛むくじやらが居なくなり、若造も姿を消す。

何ということはない。

この屋敷本来の静けさを取り戻すだけのこと。それだけのこと。  
りーん

風に揺られて風鈴が鳴った。

わたしの意識がぐらりと揺らぐ。

主は目を閉じたまま動かない。

そうか、まさか若造がこの様な手を使うとは思ひもしなかった。

この様な浅知恵、いったい誰に吹き込まれたというのか。

主の腰帯でぶら下がるわたしの意識は、風鈴の音に呼び寄せられ、若造の寝所を覗いていた。障子に穴を開け、覗くように視界が開けていく。

若造の策から逃れられずに、寝所の壁には野坊主が姿を現していた。

「すみません。こうでもしないと、あなたとは会えないでしょう？　もうぼくには日が残されていないから」

若造は見えぬ野坊主に頭を下げる。

「風鈴でわたしを呼び出すなど、誰に教えられた？」

呆れたように野坊主がいう。

「クロ助が、ぼくの耳に息を吹きかけたとき、風鈴の音とあなたの声が聞こえました。あなたと会う方法を、クロ助が知らせようとしているのだと思いました。クロ助が教えたということ、ぼくはあなたに会う必要があるはずだ」

若造の顔に、いつものへらりとした笑顔はない。

「何を聞きたいのだ？」

「似非坊主には語れぬといった真実を。上手くいえませんが、ぼくはそれを知らなくてはならないと思うのです。心の奥からふつつつと、知るべきだという思いが湧いてくる」

壁に模られた野坊主の眉が怪訝そうに寄った。

そして口の端が僅かに持ち上げられる。

「なるほどな、風鈴を使ってわたしを呼び出せるのは、カナだけだと思っていた。妙だとは思ったが、妙な者に全てを託すも悪くはないか」

しばしの沈黙のあと、野坊主が語り始めた。

語る野坊主のすぐ横に、厠に現れた女がすいと姿を現し、黙って若造に頭を下げる。

言葉を噛みしめるような、ゆっくりとした重い語りであった。

「目の前で、惚れた男が死んだのだよ」

言葉を解さぬ虫の音が、涼やかに庭に響く。

「大店の娘だったカナが惚れたのは、寺子屋で筆指南を手伝う男だった。浪人者なのは見た目にも明らかで、だが物腰の柔らかい男でな。時折習い事の帰りにすれ違い、ひと言二言、言葉を交わしたのが出会いであった。その日暮らしに子供に読み書きを教える男に、娘をくれてやる大店の主人などあるものではない。だがカナは、添い遂げようなどとは思っていなかった。時折言葉を交わすだけで良かったのだ。己の恋心を押し通せば、相手に迷惑がかかるのは百も承知。だから、そっと見ているつもりであった。あつたのに……」

奴坊主の眉根がぐいと寄る。

「父である大店の主人にことが知れてしまった。ろくな職に就かぬ浪人が、娘に色目を使っているという噂が事のはじまりだった。大切な一人娘を守ろうとしたのだろうが、やりすぎたのだよ。一線を越えてしまった。浪人の男とて、己の身分はわきまえている。どれ程胸が騒いでも、大店の娘と添えるわけがない。浪人の男も、時折交わす会話でよかつたのだ。すれ違う寸の間に見せてくれる、笑顔ひとつで十分だった」

「お父様が、動いてしまったのですね」

女の言葉に、野坊主が頷く。

「裏の者を雇って、男を川に沈めようとした。だが、間が悪かった。手習いで遅くなった

カナが、その場を通りかかった」

顔を覆っていた女の指の間から、嗚咽が漏れる。

「聞き覚えのある声に、カナは川べりに走りよつた。依頼主の大切な娘を死なすわけにはいかないと、溺れかけた男に手を伸ばすカナを、男二人が羽交い絞めにした。カナの目の前で、男は川の流れに沈んでいった」

「カナさんのせいではないのに、なぜそこまでその男の死に拘るのでしよう」

「溺れる男は死を間近にした者の形相で、カナに言葉を吐いたのだそうだ」

——死んで鬼となつても、決して忘れるものか。

父親が手を下したことに感じて、男は自分を恨みながら死んでいったとカナはいう。

鬼となつて彷徨うているなら、闇から救いたいと。

「その男のために、カナさんはあなたの手によつて斬られる道を選んだと」

若造の視線をまっすぐに受けて野坊主が頷く。

「カナさんのなかに残るのは、その男への侘びの想いだけでしょうか。それともまだ、その男のことを好んでいるのでしょうか」

呟くような若造の声に答えたのは、女であつた。

「カナ様が贖罪の思いだけで、今に至るとは思えません。そうでなければ、カナ様が選ば

れた道には何の救いもございません」

女の目尻から、涙が落ちる。

「それはカナさんの行先に、望みがないということですか？」

言葉と共に、若造の口から深いため息が漏れる。

「この辻堂で彷徨う者を一人助けるたび、カナ様が自由に歩いてゆける場所は狭まっているのです。いつの日かこの辻堂から庭へ出ることも叶わなくなり、やがては空間がカナ様を押しつぶすでしょう」

聞いていた若造の目が、裂けんばかりに見開かれる。

「それがこの辻堂の主に及ぶ理なのだ。カナは知っていてわたしに斬られた」

じつと耳を傾けていたわたしは、聞いているのさえ辛くなってきた。

たとえ承知のことであっても、言葉で語られるとその事実が重く押し掛かる。

だがわたしは聞き届けなければならない。

主の代わりに、聞き届けなければならない。

「父はそのことを知っていたのでしょいか」

「先代をはじめ、歴代の大家は全員承知のこと。先代は家族をないがしろにしたわけではない。一人で過ごすかなを不憫に思うて、ここへ足を運んでいたのだよ」

そうでしたか、若造がいう。

「ここへ戻るとカナ様に大見得を切りましたが、わたしの得られる情報など所詮知れたもの。どうしたならカナ様を救えるのか、手立ては見つかりませんでした。恥ずかしくて、カナ様の前に姿を見せることさえできません」

女がいう。

「カナは、そのようなこと気にする女ではない。おまえは、よくやった」

女のすすり泣く声だけが、畳に染み込んでいく。

「カナさんを救うには、どうしたら良いのでしょうか」

「どうにもできぬ。探す男を闇から見つけ出し、救う意外に道は無い」

淡々とした野坊主の声に、若造は僅かに俯いた。

「もし見つかったなら、カナさんはどうなりますか？」

「この旅籠を去る日を己で定め、魂を休めることができよう」

若造はしばし考え込むように顎を撫でる。

「男が見つかったとして、その男の魂と共に成仏できるといふことですか？」

「浮世の言葉で言うなら、そうであろうな」

睫を伏せて眉根を寄せていた聡が、鋭く宙を睨む。

「その男、闇を彷徨っていないければどうなりましようか」

野坊主が訝しげに首を傾げる。

若造の間抜け面の中、寸の間眼が鋭く光る。

庭の虫の音が、煩く響く。

涙に濡れた頬を袖でふき、女が顔を上げた。

「仮にそのようなことがあつたなら、わたしにもできることがございます」

死人の眼に、光が宿る。

壁に模られた、門禪の僧の口の端が僅かに上がった。

人と呼ばれるべきただ一人の男は、宙を睨んだまま動かない。

その三人の全てを視界に入れるわたしの身は、芯から痺れ己が鈴であることを、寸の間忘れるほどだった。

最後に口を開いたのは野坊主だった。

「カナが写真のことを口にしないのは、その記憶を己で封じ込めたからだ。なぜだと問うても、カナは笑って本当のことは口にしなかった。ただ一言、気まぐれですよ、そういつていた」

若造に対する野坊主の態度が先代へのものと違っていたのは、このためか？

若造と先代では、同じ大家でも負うべき物の重さが違うと？

話の先に耳を済ましていたわたしが、その先を知ることがなかった。

誰一人口を利かぬまま野坊主が姿を消し、女も霧のように消えた。

残された阿呆は、石になったかと思うほど、微動だにしなかった。

## (完) 遠い日の誓いを守る者

この屋敷に留まれる最後の日も、若造は迷い込んだ小鬼達を相手に、庭を走り回っていた。

それを樂しげに眺めながら主が酒を舐め、陽炎が魚を焼く。

焼ける魚を待っているのか、主の傍らで丸まるシマが邪魔なことを除けば、辻堂にしては穏やかな時が流れていた。

いや違うな。シマは主の隣で魚が焼けるのを待ったりはしない。

あの捻くれた猫は、黒い毛むくじやらが今帰るか、もう帰るかと庭に顔を出さずには居られないのではないだろうか。

いやいやシマに限って、そんな心根を持ち合わせるはずもない。

この世に限らずあの世でも一番薄情な、灰色の毛を持ったクソ猫なのだから。

昨夜日が沈むと若造は、日が暮れる前に明日ここを立つと主に告げた。

主は何も聞くことなく、頷いただけであった。

今日になっても畏まった挨拶が交わされることもなく、若造は土を尻に付けながら走り回っている。

どうしてこうも平常心でいられるのか、わたしには理解できない。

阿呆がここを先代から引き次ぎ、大家となることをたとえ心の隅であつても決めたのか否か。それを考えると身の置き所がなかった。

笑顔で去っていく小鬼どもを見送ると、若造は体を投げ出した。

「お疲れのようですね」

微笑む主を見上げながら、若造が笑う。

「今度ここへ来るときまでに、体力をつけてきますよ」

主がしげしげと若造の顔を覗き見る。

「ぼくはこの大家になろうと決めました。だから、これからもよろしくお願いします」

驚いたような主の顔の中、唇がほころんで笑顔となる。

「こちらこそ、よろしく願いました。大家様」

二人のやり取りを見ていた陽炎が、袖の端でそつと目じりを拭いた。

緊張の解けたわたしはというと、体が痺れてチンと鳴ることさえ叶わない。

とにかくこれで、この辻堂は守られた。

主のことは後々考えていけばいい。

今はどうにもならなくとも、いずれいい案が浮かぶかもしれない。

昼の膳に並んだのは、焼いた干物とこんにやくの白和え。

旨いうまいと食べる若造に、主は自分の小鉢も差し出した。

「そういえばこんにやくの白和え、野坊主が食べたいといつていたよ。食べ損なつたと知つたら、がっかりするかねえ」

「いつでも造りますよ」

陽炎がうれしそうにいう。

主から魚の端をもらつたシマは、愛想のひとつもなく庭のどこかへ姿を消した。

やはり黒い毛むくじやらの安否を気遣っているなど、思い過ぎであつたか。

「ぼくは気楽な商売なので、来年また顔を出します」

「少し遅らせたなら、その頃には、薄がいるかもしれませんよ」

主がいう。

是非に会いたい、と若造は空を見上げる。

「悟様、今年中にお会いするのは今日が最後でしょう。来年の今頃、またわたしの料理を食べにいらしてくださいませ」

少し潤んだ目元を恥ずかしそうに隠しながら、陽炎はいった。

「うん、かならず」

日が半分傾いだ頃、若造はここへ来た時の服に着替えて、裏戸の前に立っていた。

屋敷で見知つたことは、人の信条も生き方も変えるほどのものと思うが、若造は相変

わらずへらへらとした笑顔を浮かべている。

歴代の大家様の足元にも及ばぬ男だというのに、今から辻堂の先が思いやられるというものだ。

「必ずまた来ます。別れは苦手なので、送らないでください。帰り道ならわかりますから」

「今からなら日が暮れる前に境界を越えられるから、心配はございませんね」

ふわりと吹き込んだ風に、主の着物の裾が捲かれて淡い若草の裏地が顔を覗かせた。

主が最後に釘を刺す。

「寄り道はなりませんよ。日が暮れるまでに必ず、山向こうの境界を越えてくださいませ」

若造はしつかり頷くと、手を振って屋敷を出て行った。

見送りがついていた陽炎も、我慢して屋敷の奥へ戻っていく。

「陽炎、少し早いけれどお酒を用意しておくれないかい？ 一緒に呑もうよ」

主は一人庭の岩に腰掛ける。

庭の小池で小さな魚がぼちやりと跳ねた。

まだ明るい空には、丸く白い月が浮かんでいる。

「しばらくは、寂しい日が続きそうだねえ」

シマが庭をゆつくりと横切っていく。ふと立ち止まり、背を伸ばして欠伸をした。客が来ないなら庭に用などないであろうに、目障りである。

「それにしても悟様がいらつしやらない間、子鬼達の相手を誰がするのさ？」  
主が横目でシマを見る。

「シマ？」

主の気持ちを察したのか、シマはさつきと逃げていった。

「行つてしまったよ。薄情だねえ」

主が笑う。

陽炎が主の横の岩に腰かけ、酒を注ぐ。

「そういえば陽炎、あたしは何か大切な事を忘れている様な気がするのだけれど、何を忘れてるのだろうねえ」

「いやですよ、カナ様。物忘れですか？」

陽炎も、手酌の酒を口へ運ぶ。

それ以上の話もないまま、西の空が茜色に染まり始めた。

ここはわたしの出番であろう。

チリチリン

わたしは最高の音で鳴ってみせた。

「鈴も無理をするんじゃないよ。文句を思う相手がいなくなつて、寂しいだろう?」  
そんなことはない。

明日からの静かな毎日を思うと、鈴の音も冴えるというものだ。

黒い毛むくじやらとて、戻らなければそれまでの者であつたということ。

わたしの鈴の音を曇らせる理由になどなりはしない。

夜の闇の黒さを眺めると跳ね回る毛玉を思い出すが、そんなものは気の迷いである。

リン

ふくれて鳴つたわたしの身を、主の指先がこつりと弾く。

「まつたく、いじつぱりな子だねえ」

主は思い違いをしている。わたしはあの阿呆が嫌いだ。

シマと同じくらい嫌いだ。

「おや、悟様の気配が消えたよ。無事に境界を越えられたのだねえ」

ほつとしたように、主が寸の間目を閉じる。

すつかりむくれたわたしは主の腰帯で揺れながら、ひとりだんまりを決め込んだ。

茜色の空が墨を流したような黒に染まるころ、いつもよりひとつ少ない膳が用意され

た。

今はぽつりぽつりと陽炎と言葉を交わし、時折小さく微笑まれる主の姿が見られる

が、あとひと月も経たぬうちに、夏の盛りを過ぎて陽炎は姿を消してしまふだろう。

薄が姿を見せるまで、幾日も幾晩も、言葉一つなくひとり盃を傾ける主の姿を思うと、慰めにもならぬ己の身が恨めしい。

日が暮れた途端、シマはぷつりと姿を見せなくなった。

魚の匂いがなければ姿も見せぬとは、まっこと薄情なやつである。

ゆるり、ゆらりと辻堂の時間が流れていく。

月がてっぺんに昇ろうかというころになって、主は座敷に入つていった。

座敷に入つても、開け放つた障子の間からひとり月を眺めておられる。

陽炎もすでに姿を消していた。

「悟様がいらしたのはほんの束の間だったというのに、一人きりとはこんなにも静かなものだったかねえ」

主の声を聞く者はいない。

チリチリ

鳴つたわたしに視線を落とし、主が微笑む。

「おまえが居てくれたのであつたね、鈴よ」

白く細い指先でわたしの身を撫でながら、ひとつ息を吐いて主は静かに目を瞑つた。

「ひとりは、寂しいですか？」

庭から突如響いた声に、主が振り返った。

襖からのぞく庭に、黒い人影が見える。

口元を押さえる主の指が震えた。

月明かりを背に庭に立っていたのは、とうにここを出たはずの若造であった。

ふらりと立ち上がった主は、おぼつかぬ足取りで前へ進む。

「悟様、なぜここに？」

「ぼくは意気地なしですが、カナさん。あなたの策には嵌らないと決めたのです」

障子の縁に手をかけて、主が膝から崩れ落ちる。

「悟様は確かに境界を越えられたはず。今の今まで、悟様の気配などなかった」

「それはぼくだけの力ではありません」

場の空気が揺れ、檜の板張りの廊下の壁から野坊主の半身が現れた。

その横に現れたのは、色の白い女であった。

腰までであった黒髪はなく、尼のように剃り上げられた頭であった。

「おまえさんは、廁であつた娘だね」

主の問に女が頷く。

「そこにいるのですね。彼女がぼくの気配を消してくれました。ぼくはずっと屋敷の奥

に居たのですよ」

若造が手にした写真を主に見せた。

「これを見て、ぼくはカナさんより先に、いろいろと思い出したのです」

主の目がごぼれんばかりに見開かれる。

「この写真を撮ったとき、先に全てに気づいたのはカナさんでしょうか？」

主の細い肩が大きく上下する。

若造の手が前へと伸ばされ、主の頬にかかった黒髪をさらりと撫でた。

目を見開いた主の肩がびくりと跳ねる。

主の唇から速い息づかいがもれ、閉じた瞼で長い睫が月明かりに陰を落とす。

「思い出しました。己で封じた記憶でございます。なぜ戻ってしまわれたのです？　大

家様のお役目は、通いで十分でございます」

主の言葉にいつもの力はない。

野坊主の言葉が蘇る。

主はあの写真と共に、どのような記憶を封じたというのか。

「大家になることは既に承知しています。ぼくがここへ戻ってきたのは、昔自分で立てた誓いを守る為です」

何か言おうとする主の唇が震えている。

「カナさん、ぼくが誰だかわかりますね」

主が頷く。

細い肩が尚更に小さく見えるほど、主は身を竦ませていた。

「ぼくは、あなたが命をかけて救おうとした男です」

「全て思い出しました……申し訳ございません」

主は膝を正して座り、両手をついて頭を下げる。

「なぜカナさんが謝るのです？」

主は指をついたまま、頭を上げようとはしない。

わたしの心が痛みを軋む。

「あの日川へ沈みながら、あなた様はあたしを恨んでおいででした。死んで鬼となっても、決して忘れるものか。今際の際にあなた様は、あたしにそう言われたのです。恨まれても仕方がないこと。父は、罪も無いあなたに惨いことをいたしました」

瞬くたびに、主の両目から涙が溢れた。

「ぼくに死に際の際の記憶がありません。でもカナさんに意見します。その男がぼくである限り、その言葉は恨み言ではない。断じてありません。ぼくがカナさんを恨むのなら、どうしてここに居るのでしょう」

「記憶がないのならなおのこと、どうして戻られました。あなた様は二度とここから出

られない身となつてしまわれた」

若造はゆるりとした笑みを浮かべる。

「いったではありませんか。カナさんの策には嵌らないと決めた。カナさんは幼いばかりを見て、探している男だと気付いた。だからこそ、記憶を封じてぼくをただの大家にしようとした。ぼくをこの辻堂や、そしてカナさんに縛られた人生を歩ませないように」と

俯いたまま主が口元を手で押さえた。

「そうだ、そうであつた。」

主は求めた男を目の前にして、それでもなお男の幸せを願つた。己の孤独と引き替えに、男の平穏な人生を守ろうとされた。

「無いのは死に際の記憶です。覚えているのですよ。道ですれ違ふとき、微笑んでくれたカナさんの顔を」

若造が静かに微笑む。

「だからこそ、ぼくははじめからやり直そうと思うのです。出会いから、やりなおしましょう」

主が涙に濡れた顔を上げる。

「探し人であるぼくが、あなたと会いここに残つたら、ぼくとカナさんがどのような運命

を迎えるかは、既に野坊主さんから聞いています」

主が半身を返して、野坊主を見やる。

「カナがそうであったように、今度はおぬしの為に全てを賭けるといふ、男がひとり現れただけのこと。これでわたしは、カナとの約束を守れたことになるであろうかな」

野坊主の姿が壁に吸い込まれていく。

主の肩が涙に揺れる。

「わたしは、悟様が闇に彷徨うことなく生きておられるなら、それで十分幸せでございました。これはあたしが己で選んだ道。どんな成れの果てが待っていていようと、悟様を巻き込む気など、なかったのをごさいます」

「この辻堂での定めをあなたが選んだように、ぼくも自分の定めを選んだだけのことです。ここへきたとき、カナさんに髪の手、袖の手にも触れてくれるなどいわれて、胸が痛かった」

「それは……」

「ぼくが触れたなら、封印したカナさんの記憶が蘇る。だから触れてくれるなどといった。でもぼくの中の遠い記憶が疼いたのでしょう。今はこう思うのです。たとえば髪の手、袖の先にさえ触れられなくとも、あなたと共に居たいと」

若造はゆつくりと歩み寄って、主の横に腰を下ろす。

歴代の大家様はカナに触れることができた。若造は主の髪に触れたが、それは実際に触れたのとは意味が異なる。若造の手に、主のさりりとした黒髪の感触は伝わらなかつたはずである。

求める者と求められる者の間に生まれた、非情な理であつた。

「やつと見つけたのですから、今度はぼくが側にいます。情けないことに肝心なことは何も覚えていませんが、こうすることで、ぼくはあなたへの誓いを守るような気がするのです。どんな誓いかと聞かれてもわからないから、聞かないでくださいね」

何をいつても若造の阿呆面は変わらない。だが今宵だけはその阿呆面も、俠気ある男の顔にわたしには見えた。

「ぼくはずいぶんと長いこと、あなたが好きだつたらしい。今も好きですよ」

涙で顔を濡らしたまま、主が微笑んだ。

辻堂に来て初めて、主は己の幸せを思つて微笑まれた。

「わたくしもこれにて失礼いたします。そろそろ行かなくてはなりません」

女の声に、主は立ち上がり側に歩み寄る。

「その髪、闇の者に売つてしまったのだね」

頷く女の表情は、とても穏やかなものであつた。

「髪は女の命というのは、言葉のあやじゃあないんだよ」

「わかつております」

「髪を失った女は、次に生を受けても女にはなれぬというのに。好いた男のために苦しんだ身で、女であることを捨てるなど」

女は涼しげな笑みで首を振る。

「カナ様が笑ってくださったのですから、この髪など惜しくはありません。男に産まれるというなら、わたしを虐げた男どももより強くなつて、端から蹴り倒して見せましょう」

その言葉に主は笑った。笑つて見せた先から、隠そうとした涙がこぼれる。

「カナ様、縁があつたなら、またどこかでお会いいたしましょう」

霧をかき消すように女の姿が消えた。

女が立っていた場所を見詰めて、主は静かに頭を下げる。

袖の裾で涙を拭いて、主は若造に向き直った。

「悟様、本当に良いのですね？ もう後戻りはできませんよ」

「ええ、本当にいいのですよ」

「本当に、どうしようもない御方だこと」

何処に姿を隠して話を聞いていたのか、酒を持った陽炎が座敷に姿を現した。

庭の隅でシマが鳴く。

どしり がしり

裏戸の向こうから聞こえる振動に、屋敷の庭が揺れる。

わたしははつとした。

二度とこの身を感じることは無いかも知れぬと覚悟した、ざわざわと金物のこの身が粟立つような気配。

リリリン リン リリリン

わたしは、ありつたけの力でこの身を鳴らした。

どしり がしり

何かを打ち付けるような振動は、なおも庭を揺らしている。

はたと顔を見合わせた主と若造は、あつ、と声を漏らして裏戸へと走った。

竹の扉の間に造られた裏戸を若造が押し開けようとしたとき、がしやりと何か割れるような音が響き渡った。

続いていた振動がぴたりと止む。

若造がそつと裏戸を押し開けた。

「クロ助！」

叫んだ若造が表へと飛び出した。

あとを追つて道へと飛び出した主も、口元を押さえて息を吐く。

道の向こうの草原に、黒い巨体を投げ打つように横たえているのは、黒い毛むくじやらであつた。

「しつかりしろ！ クロ助！」

駆け寄つた若造が、クロ助の頭を抱きかかえる。

鋭い眼光を持つ眼は、片方が潰れて完全に塞がれていた。

抱きかかえた若造の手に、赤い鮮血がべたりとつく。

「カナさん、クロ助が！」

黒い毛むくじやらが、震える首を回して若造の頬を軽く舐めた。

まるで大丈夫だと伝えているようであつた。

ぼん

音が鳴つたかと思うと黒い毛むくじやは氣を失つて、若造の膝の上でだらりと伸びる。

「悟様、クロ助は勝つたのでございますよ。理に打ち勝つたのでございます」

膝をついた主は、微笑みを浮かべてそつと黒い毛むくじやらの背を撫でた。

そしてはつとして、見開いた瞳の下口元を袖の裾で覆い隠す。

「カナさん、どうしたのです？」

再び泣きそうな顔で、主は黒い毛むくじやらを優しく撫でた。

「思わず駆け寄ってしまいました。この草原、わたしが立ち入れるはずのない場所でございます。とうの昔に、見えない壁に遮られ、道のこちら側には立ち入ることができなかつたというのに……」

「まさかク口助が？」

主は草に手を這わせながら、何度も何度も頷いた。

「わたしでさえ、お伽噺と思っておりました。理に打ち勝った者は、ひとつだけ我が儘を許されるといふ言い伝え。ク口助は馬鹿でございます。命懸けで勝ち取ったというのに、己が望んだのは自由だけ。道の先を眺めるだけしかできぬわたしを哀れんで、隔てるものを僅かに打ち砕いてくれたのです」

主が愛しそうに触れているのは、ただの草である。どこにでもある草だというのに、主には手の届かぬ夢であつた。

黒い毛むくじやらが打ち砕けたのは、三畳分の広さがるかどうか。

主にとっては、それで十分なのだ。わたしは知っている。

辻堂と前を走る道以外、主にとっては見えるだけの絵であつたというのに、その草地に座り、草を撫でている。

「悟様、ク口助は大丈夫でございますよ。死なずに帰つたということは、必ず生きるとい

うことまでございます」

「よかった」

若造も安堵の表情を浮かべた。

騒ぎを聞きつけた陽炎も、黒い毛むくじやらの姿を見て涙を流す。

陽炎は涙を流しながら笑っていた。

クロ助の自由に、そして主のささやかな自由に満面の笑みを浮かべる。

「クロ助、約束だから懐に入れてあげよ。そのあとは、また座布団暮らしたからね」

黒い毛むくじやらを胸に入れて、辻堂へと戻っていく。

シマがそしらぬ顔で庭を通り、若造の胸元をちらりとだけ見て姿を消した。

黒い毛むくじやは、わたしにはできぬことをやって見せた。

主の願いを叶えたのだから。

感謝するとはいわないが、座布団に寝転んでいても我慢してやろう。

元気になったなら、少しくらい跳ねても目くじらは立てずにいてやろう。

あいつが現れた気配を感じてこの身を必死で鳴らしたのは、急な事の展開に驚いただけである。歓喜の音などでは決してない。

ミヤー

庭の隅でシマが鳴く。

「悟様、明日はさつそく忙しい一日になりそうですよ」  
「なぜですか？」

ミヤー ミヤー

「日の出と共にここへ来ようと、小鬼が待ち構えているようにございます」  
主の言葉に、悟はぎよつとしたように目を見開く。

「それは、早めに寝たほうがよさそうですね」

「なりませぬ」

腰を浮かしかけた若造を、主の声が制す。

「断腸の思いで意を決した、わたしの心遣いを無駄にされた罪は重いのでございますよ。  
今宵は、朝まで付き合っていたできます」

頭を掻いて座りなおす若造をみて、女二人が笑い声をたてる。

「なにか肴になりそうなものを持ってまいりましょう」

「カナ様、わたしがいきます」

陽炎が慌てて腰を浮かせる。

「いいから座っておいで」

立ち上がった主の腰帯から、私を繋ぐ糸がするりと抜けた。

畳に転がったわたしに、板張りについた阿呆の手が触れる。

ああ、わたしまでもが思い出してしまった。  
つもらぬことを思い出してしまった。

男が今にも川へ落ちようと体を傾げたとき、わたしは男の腰帯にぶら下がっていた。助けようとして男の袖をつかみ損なつた主の手が、宙に浮いたわたしを掴んだ。沈む男の口が動く。

両の手が主を求めて前へと伸びる。

「死んで鬼になろうと、決して忘れるものか」

まだ語る口は流れる水に吞まれ、声は届かない。

男は己と共に娘も攫われ、襲われたのだと思つていた。  
もがく男の手に跳ね上げられた水の飛沫が、わたしの身にかかる。

ああ、解つてしまった。

死にかけてた男の想いが、主を想う気持ちが生じたのがわたしであった。  
だからわたしは、若造が嫌いなのだ。

己と根を同じくする魂を持つから、阿呆面が嫌いなのだ。  
だからといって、わたしは何も変りはしない。

わたしは鈴。主を守りたいと想う気持ちは、誰にも負けぬ。

死んだ男に劣ってなどいない。

わたしの中に、浮世に届かなかった男の声の流れ込む。

死んで鬼になろうと、決して忘れるものか

世の果てまで彷徨っても

必ずや探し出す

次の世では、必ず守り通してみせよう

鬼になろうとこの想い、決して消せはしないだろうよ

(完)